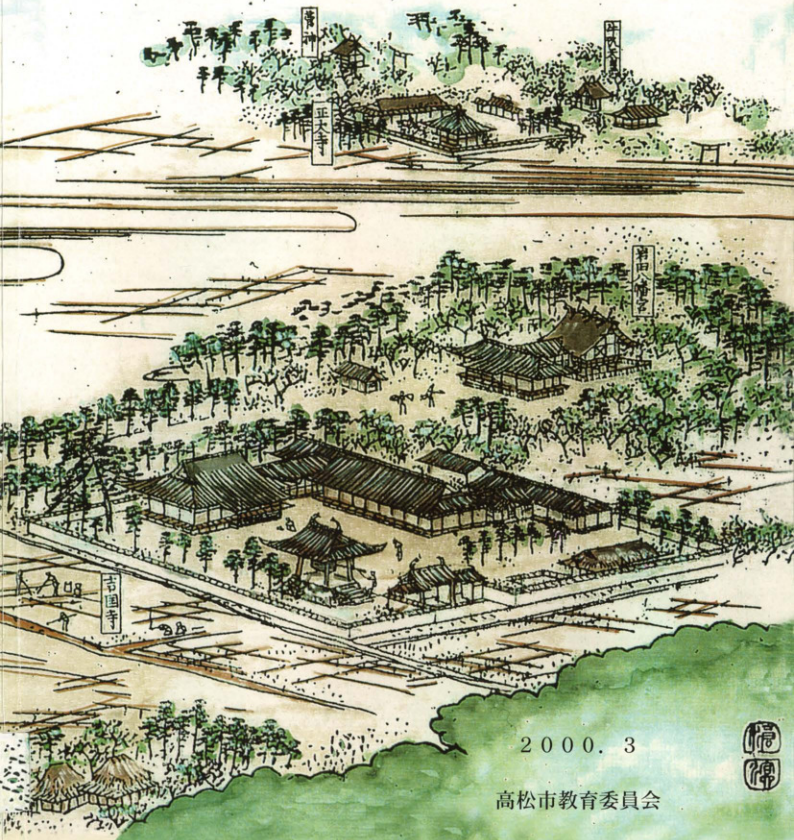
上林村
岩田八幡宮
吉國寺
王子社
下林村
牛頭天皇
正大寺
上多肥村
櫻木八幡宮
西蓮寺

一角遺跡

～特別養護老人ホームさくら荘建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～



2000. 3

高松市教育委員会

噴　礫（平面）

噴　礫（断面）

序　文

最近の考古学研究の成果によると、日本列島に人が生活をはじめたのは、50万年以上も昔であったことが明らかになってきています。以来、私たちの祖先は荒れ地を切り開き、田畑を開墾し、家を建て、都市を建設してきました。そして、国内はもとより海外とも活発な交流を行うことによって新しい技術を導入しながら、自らの創意工夫により地域に根ざした文化を築きあげてきました。その証は有形・無形の文化財として残っています。これらの文化財は地域の方々が中心となり、今日まで大事に護られてきたもので、より良い状態で未来へ引き継いでいく必要があります。

文化財の中で地下に埋もれているものを埋蔵文化財と言います。埋蔵文化財、いわゆる遺跡は発掘調査によって私たちの前にその姿を現します。発掘調査によって発見された建物跡や墓などの遺構、出土した土器や石器などの遺物は、その時代の地域の歴史を雄弁に物語ります。発掘調査の結果、歴史が書きかえられることも少なくありません。

我々が住む高松平野にも未知の埋蔵文化財が地中深くに数多く埋もれています。その一端を解明したのが、高松東道路建設や空港跡地整備事業に伴う発掘調査でした。沖積平野の遺跡は丘陵部の遺跡と違い、地表面にその痕跡を残すことはほとんどありません。このため、工事の事前調査によって発見されることが多く、今日では市内の遺跡数は800余になっています。

一方、高松平野は古代において全国に施行された条里制の地割が良く残っており、条里制研究には欠かせない土地です。また、現存する「弘福寺領讃岐国山田郡田図」は天平７年（735年）の年紀を有し、国内最古の荘園田図として平成２年に重要文化財に指定されました。高松市では昭和61年度から国・県の援助のもと、田図比定地周辺の調査を行ってきました。その結果、奈良時代の村落の様子を解明する多くの手がかりを得ることができました。

本報告書掲載の一角遺跡は、空港跡地整備事業によって発見された空港跡地遺跡の北側に位置し、弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地の東に隣接することから、非常に重要な地域としてとらえてきました。このため、工事に先立ち試掘調査を行ったところ、弥生時代から近代に至るまでの遺跡が存在することがわかり、発掘調査を行うことになりました。発掘調査によって空港跡地遺跡や弘福寺領讃岐国山田郡山図比定地等の調査内容を補完することができたとともに、新たに多くの事実を解明することができました。

最後になりましたが、今回の調査に際し、多大なご理解とご協力をいただきました社会福祉法人すみれ福祉会に深くお礼申しあげます。

平成11年12月

高松市教育委員会
教育長　山口　寮弐

例　言

1．　本書は特別養護老人ホームさくら荘建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市林町に所在する一角（いっかく）遺跡の調査報告を収録した。

2．　調査および整理作業については高松市教育委員会において実施し、費用については原因者である社会福祉法人すみれ福祉会が全額負担した。

3．　調査にあたって下記の関係諸機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。
香川県教育委員会　　(財)香川県埋蔵文化財調査センター
石上　英一（東京大学）　　稲田　道彦（香川大学）　　内田　忠賢（お茶の水女子大学）
木原　博幸（香川大学）　　金山　章裕（京都大学）　　工楽　善通（奈良国立文化財研究所）
権藤　典明（高松工業高等専門学校）　　寒川　旭（通商産業省）
新見　治（香川大学）　　高橋　学（立命館大学）　　山中　健二（香川大学）
外山　秀一（皇学館大学）　　丹羽　佑一（香川大学）　　山中　敏史（奈良国立文化財研究所）

4．　調査から報告書作成に至るまで下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。
末光　甲正・中西　克也（讃岐文化遺産研究会）
松田　重治・今西　康代（佛教大学）　　山内　康郎（桃山学院大学）
坂東　祐介・信吉　純恵（徳島文理大学）　　大野　宏和・川部　浩司（花園大学）
十河佐千子・吉本　和哉（香川大学）

5．　本遺跡の調査は、試掘調査を平成６年１月14日～１月30日まで文化振興課文化財専門員山本英之が行い、本調査については平成６年２月８日～４月８日までを山本が行い、平成10年４月20日～５月22日までを同文化財専門員大嶋和則が行った。整理作業は上記の学生の協力を得て大嶋が行った。

6．　本報告書の執筆は山本・大嶋が行い、編集は大嶋が行った。執筆分担は下記のとおりである。
山本……第１章第１節　　信吉……第２章第２・４節　　大嶋……それ以外

7．　本文の挿図中で国土地理院発行の２万５千分の１地形図「高松南部」を一部改変して使用した。

8．　本書で用いる略号は次のとおりである。
ＳＢ……掘立柱建物　　ＳＤ……溝　　ＳＥ……井戸　　ＳＨ……竪穴住居
ＳＫ……土坑　　ＳＰ……ピット　　ＳＲ……自然河道　　ＳＸ……性格不明

目　　次

序　文

例　言

目　次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査の経緯 …… 1
　第２節　試掘調査 …… 3
　第３節　第１次調査の経過 …… 7
　第４節　第２次調査の経過 …… 9
　第５節　整理作業の経過 …… 10

第２章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境 …… 11
　第２節　歴史的環境 …… 12
　第３節　弘福寺領讃岐国山田郡田図調査について …… 22
　第４節　周辺の調査成果 …… 24

第３章　第１次調査の成果
　第１節　調査区の概要と基本層序 …… 27
　第２節　第３遺構面 …… 37
　第３節　第２遺構面 …… 57
　第４節　第１遺構面 …… 68

第４章　第２次調査の成果
　第１節　調査区の概要と基本層序 …… 85
　第２節　第３遺構面 …… 91
　第３節　第２遺構面 …… 100
　第４節　第１遺構面 …… 101

第５章　まとめ
　第１節　遺構の変遷について …… 103
　第２節　吉国寺について …… 104

観察表 …… 109

挿 図 目 次

第１図　一角遺跡位置図 …… 1
第２図　試掘調査平面図 …… 5・6
第３図　調査区位置図 …… 8
第４図　周辺遺跡分布図 …… 14
第５図　調査区南壁土層断面図 …… 29・30
第６図　第３遺構面平面図 …… 31・32
第７図　第２遺構面平面図 …… 33・34
第８図　第１遺構面平面図 …… 35・36
第９図　ＳＲ－301出土遺物実測図① …… 38
第10図　ＳＲ－301出土遺物実測図② …… 39
第11図　ＳＲ－301出土遺物実測図③ …… 40
第12図　ＳＲ－301出土遺物実測図④ …… 41
第13図　ＳＲ－301出土遺物実測図⑤ …… 42
第14図　ＳＲ－301出土遺物実測図⑥ …… 43
第15図　ＳＲ－301出土遺物実測図⑦ …… 44
第16図　ＳＲ－301出土遺物実測図⑧ …… 45
第17図　ＳＲ－301出土遺物実測図⑨ …… 46
第18図　ＳＲ－301出土遺物実測図⑩ …… 47
第19図　ＳＲ－301出土遺物実測図⑪ …… 48
第20図　ＳＲ－301出土遺物実測図⑫ …… 49
第21図　ＳＲ－301出土遺物実測図⑬ …… 50
第22図　ＳＢ－301平・断面図 …… 55
第23図　ＳＤ－303土層断面図 …… 56
第24図　ＳＫ－207出土遺物実測図 …… 58
第25図　ＳＫ－208出土遺物実測図 …… 59
第26図　ＳＫ－209出土遺物実測図 …… 60
第27図　ＳＤ－201平面図 …… 61
第28図　ＳＤ－201出土遺物実測図 …… 62
第29図　ＳＤ－202出土遺物実測図 …… 62
第30図　ＳＤ－203石列平・断面図 …… 63
第31図　ＳＥ－201半・断面図 …… 64
第32図　ＳＥ－201出土遺物実測図 …… 65
第33図　ＳＥ－202出土遺物実測図 …… 66
第34図　第２整地面精査時出土遺物実測図 …… 67
第35図　ＳＤ－101出土遺物実測図 …… 69
第36図　ＳＤ－102出土遺物実測図① …… 71

第37図　ＳＤ－102出土遺物実測図②……72
第38図　ＳＤ－101・102コーナー部出土遺物実測図……73
第39図　ＳＰ－108出土遺物実測図……74
第40図　ＳＰ－113出土遺物実測図……74
第41図　ＳＸ－101出土遺物実測図①……76
第42図　ＳＸ－101出土遺物実測図②……77
第43図　ＳＸ－101出土遺物実測図③……78
第44図　ＳＸ－101出土遺物実測図④……79
第45図　ＳＸ－101出土遺物実測図⑤……80
第46図　ＳＸ－101出土遺物実測図⑥……81
第47図　ＳＸ－101出土遺物実測図⑦……82
第48図　ＳＸ－101出土遺物実測図⑧……83
第49図　ＳＸ－111出土遺物実測図……84
第50図　南壁土層断面図……86
第51図　西壁土層断面図……87
第52図　第３遺構面平面図……88
第53図　第２遺構面平面図……89
第54図　第１遺構面平面図……90
第55図　ＳＨ－301平・断面図……92
第56図　ＳＨ－301出土遺物実測図①……93
第57図　ＳＨ－301出土遺物実測図②……94
第58図　ＳＨ－302平・断面図……96
第59図　ＳＨ－302出土遺物実測図……97
第60図　ＳＨ－303平・断面図……98
第61図　噴礫平・断面図……99
第62図　ＳＫ－201断面図……100
第63図　ＳＫ－201出土遺物実測図……100
第64図　ＳＫ－202断面図……100
第65図　ＳＤ－201断面図……100
第66図　遺構変遷略図……103
第67図　文化15年山田郡下林村順道図絵（縮尺は約2000分の1）……106
第68図　山田郡下林村第弐号字松生切り絵図（合成）（縮尺は約2000分の1）……107・108

写 真 図 版 目 次

写真1　第1次調査作業風景 …… 7
写真2　第2次調査作業風景 …… 9
写真3　調査区南壁土層堆積状況（西から）……27
写真4　調査区南壁土層堆積状況（東から）……27
写真5　第3遺構面完掘状況（東から）……31・32
写真6　第2遺構面完掘状況（東から）……33・34
写真7　第1遺構面完掘状況（東から）……35・36
写真8　SR－301出土土器①……51
写真9　SR－301出土土器②……52
写真10　SD－303完掘状況（北から）……56
写真11　SD－303土層堆積状況（南から）……56
写真12　SK－203土層堆積状況（東から）……57
写真13　SK－204土層堆積状況（南から）……57
写真14　SK－205土層堆積状況（西から）……58
写真15　SK－206土層堆積状況（東から）……58
写真16　SK－207土層堆積状況（西から）……58
写真17　SK－208土層堆積状況（西から）……59
写真18　SK－209土層堆積状況（西から）……59
写真19　SK－210土層堆積状況（西から）……60
写真20　SD－201完掘状況（北から）……61
写真21　SD－203完掘状況（西から）……64
写真22　集石遺構検出状況（北から）……64
写真23　SE－201井戸枠検出状況（北から）……65
写真24　SE－201土層堆積状況（北から）……65
写真25　SE－202完掘状況（北から）……66
写真26　SK－101検出状況（西から）……68
写真27　SK－102・103検出状況（西から）……68
写真28　SK－104検出状況（西から）……68
写真29　SD－101土層掘削状況（東から）……70
写真30　SD－101完掘状況（東から）……70
写真31　SD－102土層堆積状況（南から）……70
写真32　SD－102完掘状況（南から）……73
写真33　SP－101検出状況（西から）……74
写真34　調査区西端段差（南から）……74
写真35　SX－101検出状況（南から）……75
写真36　SX－106検出状況（東から）……75

写真37　調査区西壁土層堆積状況（南から）……85
写真38　第３遺構面完掘状況（南から）……91
写真39　ＳＨ－301検出状況（南から）……91
写真40　ＳＨ－301完掘状況（南から）……91
写真41　ＳＨ－301土器出土状況（南から）……94
写真42　ＳＨ－302完掘状況（北から）……95
写真43　ＳＨ－303完掘状況（南から）……95
写真44　ＳＤ－301完掘状況（東から）……97
写真45　ＳＤ－302完掘状況（東から）……97
写真46　噴礫検出状況（南から）……98
写真47　噴礫断面（西から）……98
写真48　第１遺構面遺構検出状況（西から）……101
写真49　吉国寺絵図（『讃岐国名勝図絵』を撮影）……105

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

本書に報告する一角遺跡での特別養護老人ホーム「さくら荘」建設計画を高松市教育委員会が把握したのは、平成５年12月８日付けの新聞報道によってであった。計画は、林町の空港跡地に建設された県立図書館の北側真向いにケアハウス付き特別養護老人ホームを平成６年度中に建設するというもので、報道は建設事業に投入する補助金の補正予算議案の上程という形で公表されていた。当時、国を挙げて積極的に推し進められていた老人福祉政策、ゴールドプランの一環になるものであった。

第１図　一角遺跡位置図

これより先、高松市教育委員会では昭和62年度から、高松市木太町南部から林町にかけて所存していたといわれる弘福寺領讃岐国山田郡田図の調査を実施してきた。調査事業では、木太町大池南一体の田図比定地北地区と林町の当時の高松空港北西部の田図南地区を調査の中心箇所として捉えていたが、平成３年度までの５ヵ年に及ぶ調査ではこれらのうち北地区の調査に終始してしまった。それは、北地区が昭和61年度から高松市が事業を進めてきた太田第２土地企画整理事業の範囲に含まれていたため、調査事業も区画整理事業の事前調査的正確を帯びざるを得なかったためである。

その後、平成元年暮れの新空港移転、平成３年のインテリジェントパークとしての整備計画の決定を受けて空港跡地の整備が進行し、周辺部にも道路建設、新設高校建設等新たな開発計画が次々に発生するにおよび、田図南地区も早晩、開発・市街化の影響に晒されることが懸念された。このため高松市教育委員会では、平成６年から南地区比定地を主体として第２次弘頭寺領田図調査事業を起こすことで国・県の理解を得、平成５年度は翌年からの本格的着手に先行して委員会の編成や調査地点の選定を進めていた。そうした矢先に飛び込んできたのが特別養護老人ホームの建設計画であった。

文化財保護と調査の窓口となる分化振興課では、計画把握の当初からこの取り扱いについて協議を重ねたが、隣接する空港跡地遺跡の調査状況から判断しても遺跡範囲が当該箇所にまで広がってくることは容易に予測できたし、国県の補助事業としての調査を控えた地区でのことであり事業者に調査の協力を要請することとなった。なお、新聞発表からほどなく香川県教育委員会からも当該地の埋蔵文化財の取り扱いに関して遺漏なきようにとの指導を得ている。

そして、年が改まって平成６年の１月初旬に事業者である社会福祉法人すみれ福祉会に出向き、予想される埋蔵文化財の状況説明と調査に対する協力を依頼したところ、突然の申し入れにもかかわらず、当初の建設スケジュールである４月の着工までには調査を終了することを条件として快く調査に応じていただいた。

これによってまずは１月14日から30日の間で範囲確認の新掘調査を実施し、その結果、事業対象地約2700㎡のうち西半分には弥生時代後期の遺物を濃密に含む遺物包含層、東半分も同時期の集落跡の存在を確認した。このため再度協議して実際の建設範囲となる敷地西寄りの約1600㎡について全面調査、残り東半部分は駐車場や植栽用地となるため地下遺構は現状保存を図ることで双方の了解を得、２月１日付で高松市教育委員会が発掘調査を実施する旨の調査協定書を締結した。

発掘調査は２月８日に着手し、年度をまたいで、４月８日に完了した。この間、調査重機や現場プレ

ハブその他調査機材を事業者側で調達または提供戴くことで些かなりとも経費、工程の面で削減を図ることができた。また遺構遺物の出土量等から勘案して、整理作業ならびに調査報告書作成の期限を平成8年度末まで猶予をいただいた。しかし、報告書の作成については諸般の事業により予定の期限までに果たせず、一時は調査成果の公表の機会を失ったかたちとなっていた。

しかし平成10年が明けて、今度はさくら社側から施設増床の計画についての打診を戴いた。新たなる増床部分は、前回駐車場として遺構保存をお願いした敷地東半のうちの北側約600㎡である。既に前回の試掘調査によって弥生後期等の住居跡等の所存が確認できていたため、当時の所見に基づいて双方協議を行った結果、平成10年4月15日付けで前回と同様の調査協定書を締結した。そして、舗装・外構フェンス等既存工作物の撤去を待って4月20日から発掘調査に着手、5月22日をもって完了した。また前回同様、調査結果のとりまとめと報告書作成の期限を平成11年末とし、この際、前回の未報告部分についても併せて掲載できる方向で了解を得ることができた。社会福祉法人すみれ福祉会のご理解とご協力に深く感謝の意を表すものである。

第２節　試掘調査

調査地の南に隣接する空港跡地遺跡Ⅰ－７区では弥生時代後期の集落跡が、その西に隣接する１－８区では下層に弥生後期の遺物を包含し、上層に平安時代の水田を検出した旧河道が確認されている。西側には我が国最古の荘園絵図である弘福寺領讃岐国山田郡田図の南地区比定地が見られる。また、北側には文化15年の順道図絵によると岩田神社、吉国寺といった社寺が建立されており、今回の調査地のすぐ西側には南北に岩田神社の参道が通じていたと考えられている。なお、順道図絵によると一帯が上山として表現される山園地帯である。このような周囲の環境から、当所に遺跡が所在する可能性は極めて高いと推測されたため、工事に先立ち試掘調査を行った。

第２図試掘調査平面図のとおり、老人ホーム建設予定地周囲に幅約２ｍの試掘トレンチを掘削した。北東隅のトレンチを第１トレンチとし、左回りに第７トレンチまで掘削した。調査面積は約520㎡である。試掘トレンチの上層堆積状況及び平面の観察によって遺構の有無を判断し、遺物の有無とともに遺跡の範囲を限定する方法をとった。以下、各トレンチの調査結果概要を簡単に紹介していく。

第１トレンチではトレンチ西端において弥生後期の遺物を多く包含する浅い旧河道を検出した。最深部で深さ約70㎝である。旧河道より東側については微高地となっており、若干のピットは認められたが、主要な遺構は検出されなかった。

第２トレンチの東端において第１トレンチで検出した旧河道の西肩を検出した。これにより旧河道の幅が約10mであることが確認できた。旧河道より西側では現地表下の浅い部分に洪水砂礫層が見られ、この砂礫層および砂礫層上層の灰褐色シルト層が近世～近代頃の地表面と考えられた。２面とも遺構は検出できなかったが、耕作土および床土中に瓦片が多く散在していた。地山は黄灰色シルト層で、周辺部の調査では弥生時代の遺構を検出しているが、第２トレンチでは検出できなかった。

第３トレンチも第２トレンチ同様、近世～近代の遺構面を２面検出した。２面とも遺構は検出できなかったが、瓦片を中心に多量の遺物が出土した。地山の黄灰色シルト層上層では遺構、遺物とも検出できなかった。

第４トレンチは全域において弥生後期の土器片を多量に包含する旧河道を検出した。最深部は約70㎝の深さで、流路方向、時期等から考えて第１・第２トレンチに続くものと推測される。旧河道底面の地山で溝を１条検出した。また、第２・第３トレンチ同様、近世の遺構面を２面確認しており、遺物についても瓦片を多量に出土した。近世の遺構面のうち、下層の遺構面では、トレンチ南壁において井戸を１基検出した。上面については、灰褐色シルト層中に多量の瓦片が含まれていることから、明らかに人為的な整地層としてとらえることができた。

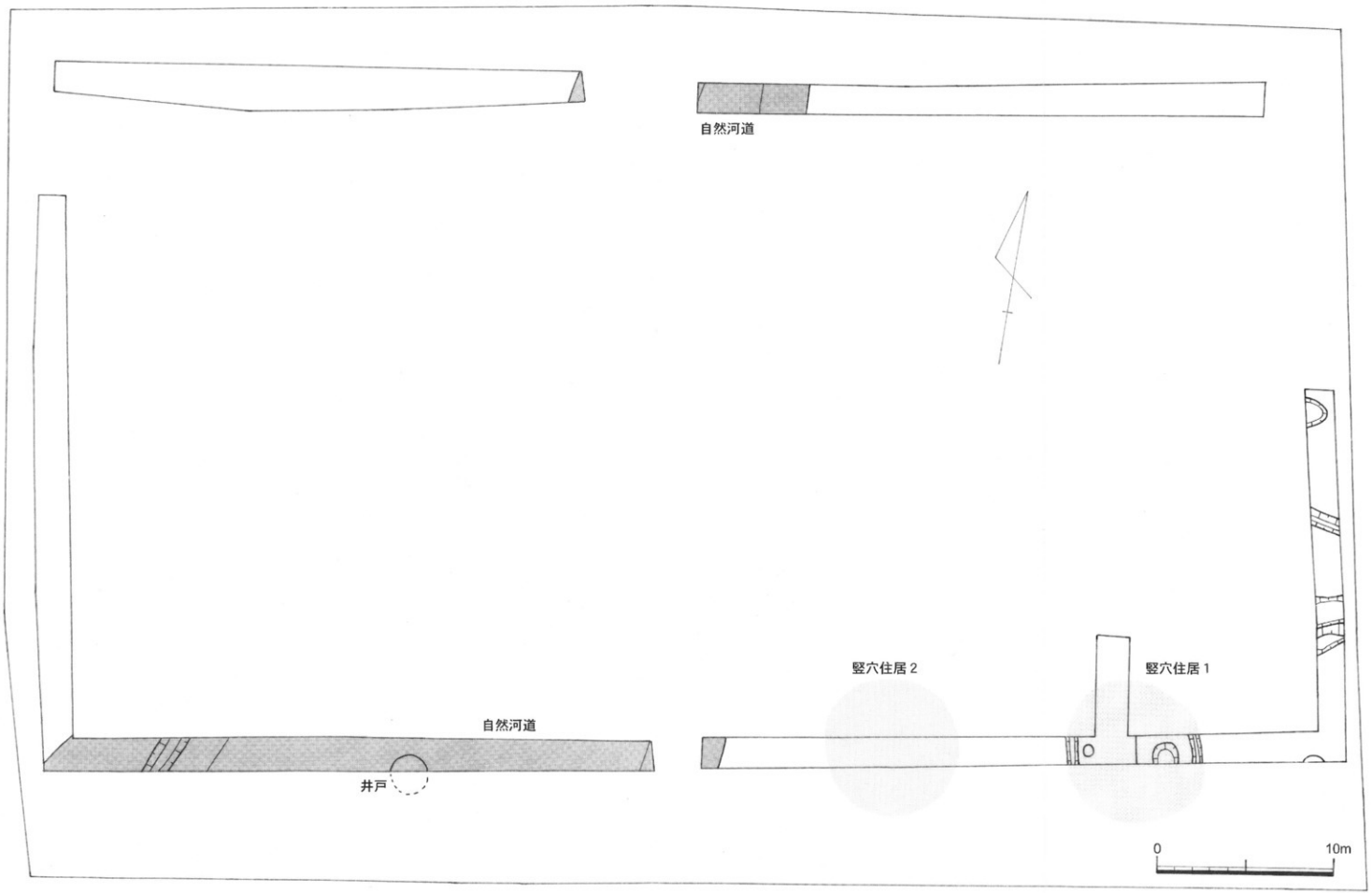
第５トレンチではトレンチ西端において第４トレンチで検出した旧河道の東肩を検出した。旧河道の幅は約36mで、南から北へ幅を減じながら流れていたことが判明した。旧河道より東側については微高地となっており、黄灰色シルト層の地山上面で遺構を検出することができた。トレンチ中央では竪穴住居を２棟検出した。東側の竪穴住居については、半面において確認できたが、西側の竪穴住居はやや下層まで掘り込んで調査を行ったため、断面観察で確認したにすぎない。両者とも埋土中から弥生後期の土器片を出土していることから、当該期のものと考えられる。その他の遺構としては柱穴が数基認められた。

第６トレンチは第５トレンチで検出した東側の竪穴住居の広がりを確認するために設けたトレンチで、この結果、竪穴住居は径８ｍの円形と推測できた。竪穴住居以外には遺構・遺物とも確認できなかった。

第７トレンチは第５・第６トレンチ同様、旧河道東側の微高地にあたる。地山の黄灰色シルト層上面で東西方向に流れる溝２条と柱穴数基を検出した。遺物はほとんど出土しなかったが、遺構の時期としては竪穴住居および旧河道と同じく弥生後期と考えられる。

以上の調査結果を総合すると、工事予定地全域が弥生～近代の遺跡と考えられ、遺構面については３面が数えられる。工事予定地の北西部については遺構が確認できていないが、文化15年の地籍図（順道図絵）に残る吉国寺の推定地に重なる可能性が高く、当時の地表面に相当すると思われる整地層が確認できた。また、中央部を北流する旧河道は濃密な弥生土器の包含層である。空港跡地遺跡の旧河道と同一のものであると考えられるが、上層で平安時代の水田は確認できなかった。旧河道の東側は微高地となっており、弥生の集落域にあたる。空港跡地遺跡のＡ集落の続きとも考えられる。以上から、予定地全域が埋蔵文化財包蔵地として事前調査が必要な区域であると判断した。

当初の工事計画では東３分の１、つまり弥生の集落部分に関しては駐車場、中庭等構造物の基礎が地下深くに及ばないため、盛り上等で地下遺構に影響を及ぼさないよう現状保存を行った。しかしながら、平成10年の増築に際し、増築予定地である北東隅部分のみ事前調査を行うことで合意した。



第 2 図　試掘調査　平面図

第３節　第１次調査の経過

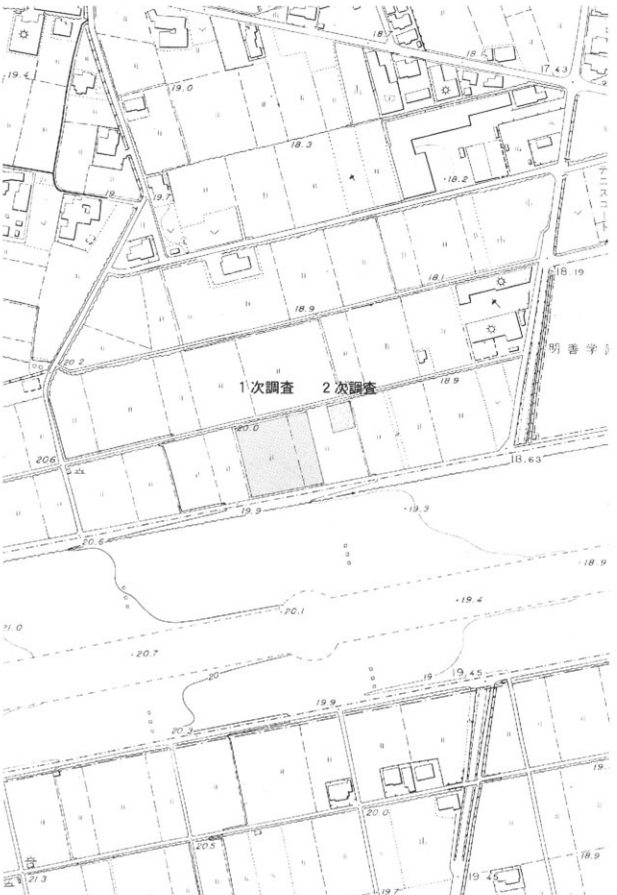
試掘調査結果をもとに社会福祉法人すみれ福祉会と協議を行ったところ、平成６年４月より老人ホームの建設を始めるため、できる限り早急な調査を要請された。このため、平成６年２月８日から本調査を行うこととなった。

写真1　第1次調査作業風景

本調査では試掘調査の第２・第３・第４トレンチの内側を概ね調査区として設定した。本調査の調査面積は約1800㎡である。調査にあたり、弘福寺領讃岐国山田郡田図の南地区比定地に隣接していることから、弘福寺領讃岐国山田郡田図調査委員会各委員のご指導のもと調査を進めた。近世～近代の遺構面２面および、弥生時代の遺構面１面の計３面の調査を行い、平成６年４月８日に全調査は無事終了した。調査日誌は以下のとおりである。

<調査日誌抄>

２月８日　調査開始。重機による表土掘削。
　25日　第１遺構面精査。溝、土坑等検出。
３月４日　Ｌ字に掘曲するＳＤ－101，102を掘削。上層で多量の瓦出土。
　16日　ＳＤ－101，102完掘。底面で杭列を確認。
　17日　第１遺構面完掘。写真撮影。
　18日　包含層（近世～近代整地層）の掘削。多量の瓦出土。
　20日　第２遺構面精査。溝、土坑等検出。
　24日　第２遺構面各遺構の土層断面図作成。
　30日　第２遺構面完掘。写真撮影。
４月１日　第３遺構面精査。弥生後期旧河道検出。旧河道の掘削開始。
　５日　弥生後期旧河道完掘。旧河道底面で溝、柱穴等検出。
　６日　第３遺構面完掘。写真撮影。
　８日　調査終了。



第3図　調査区位置図

第４節　第２次調査の経過

増床工事に先立ち、社会福祉法人すみれ福祉会と協議を行ったところ、平成10年秋頃より工事を着手するため、事前の調査を要請された。これを受け平成10年４月20日より調査を行うこととなった。

調査地が老人ホームの出入口にあたることから、出入りに支障をきたさないように、調査区を設定、調査面積は300㎡となった。近世・古代・弥生の３面の調査を行い、平成10年５月22日に全調査を無事終了した。調査日誌は以下のとおりである。

写真２　第２次調査作業風景

＜調査日誌抄＞

４月20日　調査開始。重機による表土掘削。
22日　第１遺構面精査。十字の溝を検出。
24日　第１遺構面完掘。写真撮影。
25日　包含層掘削。
５月４日　第２遺構面精査。条里地割に合致する溝を検出。
12日　第２遺構面完掘。写真撮影。
13日　包含層掘削。
14日　第３遺構面精査。竪穴住居２棟検出。
18日　竪穴住居掘削。弥生後期土器、石錘等出土。
20日　第３遺構面完掘。写真撮影。
22日　噴礫検出。断面剥ぎ取りを行う。
調査終了。

第５節 整理作業の経過

第１次調査を行うにあたって社会福祉法人すみれ福祉会との間に凍結した協定書では、第１次調査の整理期間として平成９年３月31日までに完了という項目があった。しかしながら、調査終了後発掘調査件数の増加もあり、整理作業は遅滞し、基礎整理を行ったのみで完了期限を過ぎる結果となってしまった。平成９年度に入り、増床工事の計画が持ち上がり、協議の結果事前の調査を行うこととなった。協議中に第１次調査の整理作業についての取り扱いについて再度話し合いを行い、増床部分の調査結果と同時に報告書を刊行することで合意した。第１次調査、第２次調査の整理期間を平成10年６月１日から平成12年３月31日までと新たな協定書で定めた。

実際の整理作業は、平成10年５月22日に現場作業が終了したことにより、５月22日より基礎整理作業を行った。平成11年12月までの期間で他事業との調整から断続的に整理作業を進めることになった。整理作業の工程表は以下のとおりである。

整理作業工程表

	平成10年							平成11年										
	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
基礎整理																				
実測																				
トレース																				
図版作成																				
報告書執筆																				

第２章　地理的・歴史的環境

第１節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。気候が温和なこともあって、讃岐三白（綿・塩・砂糖）の産出が有名であった。南部に讃岐山脈の北縁がかかり、東西に日妻山、上佐山、実相寺山、巾良山が続く。東部に屋島、竜王山塊、南西部に石清尾山、浄願寺山、白峰、堂山の山系が連なる。いずれも讃岐山脈の基盤である洪積台地と同じ地層からなるメサ、あるいはビュート型の溶岩台地で、塩江町との境（標高532.9m）、白峰山塊の青峰（449.3m）以外は20mから300mの低い山地である。北方はひらけ、瀬戸内海に面し、男木島、女木島、大槌島、小槌島などの島をも市域に含み、備讃瀬戸を挟んで岡山県と対峙する。

高松平野は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川といった河川が北流しているが、なかでも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現存の春日川以西が香東川による沖積平野といわれている。現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は17世紀初めの河川改修によるもので、それ以前には石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残りをとどめている。

高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野での流入口で緩やかな傾斜をもつ扇状地形の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壌をもたらしたが、諸河川の中流域は伏流し、表層は涸れ川になることが多く、早くから溜池を造築して水不足を解消してきた。山間の洪積台地と洪積層の境目に多くの溜池が分布する。これらの溜池は、年間1000mm前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。

しかし、昭和50年の香川用水の通水によって、一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水の確保の不安が払拭された反面、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、溜池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

今回の調査地である林町一帯は、昭和19年に軍用空港として接収され、大規模な土地改変が行われた土地である。調査地周辺にはそれまで池台池という池や岩田神社などの社殿も存在していたとされているが、現在は跡形もない。高松空港移転後も、大規模開発によって日々姿を変えている地域である。

第２節　歴史的環境

高松平野では、ここ10数年間の大規模な開発事業（高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等）の事前調査により、遺跡数が飛躍的に増大しつつある。

旧石器時代では、高松平野及び周辺丘陵部では、表採や混入で発見された久米池南遺跡、雨山南遺跡と、ＡＴ火山灰上層からナイフ型石器等を出土した中間西井坪遺跡が知られている。

次に、縄文時代では、大池遺跡で草創期の有舌尖頭器２点の採集が報告されている。また、井手東Ⅰ遺跡では現地表下約0.70mでアカホヤ火山灰の堆積層があり、縄文中期における平野の形成過程をうかがうことができる。晩期の遺跡は、近年の平野部の発掘調査により発見例が相次ぎ、林・坊城遺跡、冶・松ノ木遺跡、冶・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡、居石遺跡、上天神遺跡から新たな資料が提示されている。

弥生時代前期になると、天満・宮西遺跡、空港跡地遺跡、大池遺跡、松縄下所遺跡等が新たに登場してくる。このうち、冶・長池遺跡、冶・長池Ⅱ遺跡ではこの時期から小区画の水田が営まれており、早い時期から稲作文化が受け入れられていたことがうかがえる。また、汲仏遺跡、鬼無藤井遺跡等の調査では多重環濠を持つことが分かった。

これに続く弥生中期では、多肥松林遺跡、日暮・松林遺跡、冶・長池遺跡、冶・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅰ遺跡が見られる。多肥松林遺跡では自然河川の中から土器と共に、鳥形木製品、木製農具等が出土している他、竪穴住居跡も確認されている。また、中期後半になると久米池南遺跡のように丘陵上あるいは丘陵裾部に集落を営む例が多い。

弥生時代後期になると遺跡数は増大する。平野部では、上天神遺跡、天満・宮西遺跡、凹原遺跡、空港跡地遺跡のように十数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う集落の他に太田下・須川遺跡、蛙股遺跡、日暮・松林遺跡、井手東Ⅰ遺跡などがある。丘陵部では、香川県の弥生後期の標式遺跡として著名な大空遺跡が平野東部に存在する。

その一方古墳の造営は盛んで、発生期と考えられる諏訪神社墳丘墓、鶴尾神社４号墳を皮切りに、石清尾山塊では猫塚、石船塚等の積石塚からなる石清尾山古墳群、三谷地区では小日山１・２号墳、前田地区では高松市茶臼山古墳、下笠居地区では横立山経塚古墳等が築造され、その後ほぼ古墳時代全期間を通じて地域単位で断続的に展開している。

石清尾山古墳群では頂上部の尾根筋を中心とした前期の積石塚の築造が途絶えて100年以上の断絶を経た後、南山浦古墳群、浄願寺山古墳群等の盛土の後期群集墳である三谷石舟古墳、直径42mを測り周濠を巡らす円墳の高野丸山古墳が、そして後期には平石上２号墳、矢野面古墳、犬の馬場古墳、石舟池古墳群といった古墳群につながってゆく。前田地区でも同様に高松市茶臼山古墳につづき、前期から中期にかけての茶臼山古墳群、諏訪神社古墳、後期の久本古墳、小山古墳、山下古墳、瀧本神社古墳、後期群集墳の岡山古墳群、長尾古墳群といった古墳が引き続いて築造されている。

また、鬼無地区では前期末から中期初頭とみられるかしが谷２号墳をはじめとして、土師質陶棺を出した中期の前方後円墳の今岡古墳、巨石積みの横穴式石室を有する古宮古墳、平木１号墳等の神高池古墳群へと続いている。さらに距離的にはやや離れるが、中間西井坪遺跡では今岡古墳と同様な土師質陶棺の焼成土坑が検出されており、西山崎町の本堯寺北古墳でも埴輪円筒棺の出土が伝えられていることから本津川を介して物資の交通が想像できる。

屋島地区でも、瀬戸内海を見渡す丘陵上に位置する長崎鼻古墳をはじめ浜北古墳群、中筋古墳群、金

比羅神社古墳群、東山地古墳等が知られる。未調査で時期の確定を見ないのも含まれるが、平野周辺部の単位地域よりもなお閉鎖性の強いであろう島嶼部の古墳群という点で、また生産基盤となる耕作地をもたないという点においても注目すべき地域である。

古代では、条里遺構と古代寺院跡が注目される。冷・長池遺跡、冷・松ノ木遺跡、井手東Ⅰ遺跡、蛙股遺跡、上天神遺跡、凹原遺跡、松縄下所遺跡等で条理坪界線にあたると思われる遺構を検出している。遺構の多くは平安時代から鎌倉時代の遺物を含み、一般に条里の施行期とされる奈良時代とはかなりの時期の隔たりがあるが、蛙股遺跡、松縄下所遺跡のように奈良時代を中心とした遺物の出土をみた遺跡もあり、条里地割の施行時期と存続期間を解明できるデータが揃いつつある。古代寺院跡では宝寿寺跡、山下廃寺、下司廃寺、高野廃寺、拝師廃寺、多肥廃寺、勝賀廃寺等が平野部を中心に知られている。正式の発掘調査を経たデータがないため、寺域、伽藍等の全容がわかるものではないが、現在でも礎石や遺物の散布がみられる。

中近世以降では、東道路関連の冷・長池遺跡、冷・松ノ木遺跡、弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区比定地等で、旧河道の埋没後の凹地に中世の小規模な区画の水田層が出土しており、その後現在に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから、この時期に現在の地形環境がほぼ形作られていたことがうかがえる。また東山崎・水田遺跡、川南・西遺跡では春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた集落跡や耕土層が発掘され豊富な木製品が発見されているほか、現高松市美術館の紺屋町遺跡でも近世の陶磁器や木簡が出土し、玉藻町香川県民ホールの高松城東ノ丸跡でも寛永年間の東ノ丸造営以降の石垣や建物礎石の遺構が出土し、往時の城下町の一端をうかがうことができる。

参考文献

『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報』Ⅰ～Ⅳ　高松市教育委員会　1988～1992
『高松城東ノ丸発掘調査報告書』香川県教育委員会　1987
『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第四冊　井出東Ⅰ遺跡』
高松市教育委員会　1995
『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第三冊　冷・松ノ木遺跡』
高松市教育委員会　1994
『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第一冊　冷・長池遺跡』
高松市教育委員会　1993
『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第三冊　冷・長池Ⅱ遺跡』
高松市教育委員会　1994
『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第五冊　井手東Ⅱ遺跡』
高松市教育委員会　1995
『多肥松林遺跡発掘調査概報』平成５年度　香川県教育委員会　1994
『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　多肥松林遺跡　鹿伏・中所遺跡』
平成６年度　香川県教育委員会　1995
『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　太田下・須川遺跡』
香川県教育委員会他　1995

第４図　周辺遺跡分布図

周辺遺跡一覧表①

番号	遺跡名称	種類	時	概要	文献
1	一角遺跡	集落	弥生～近代	木書	
2	向城跡	城館	中世	真鍋氏の城。土塁跡と思われる土壇状地形が現存する。	1,2
3	白山神社古墳	古墳	古墳中期	円墳。直径約30m。墳丘の中央付近で内面に朱が施された竪穴式石室が確認されている。	2,3
4	神内城跡	城館	中世	十河氏配下の神内氏の城。「城屋敷」の地名が残っている。	1,2
5	松縄城跡	城館	中世	宮脇氏の城。現在の熊野神社の敷地が比定地である。	1,2
6	天満・宮西遺跡	集落	弥生～近世	弥生時代前期から近世までの複合遺跡であるが、特に弥生時代には環濠集落跡、竪穴住居跡、溝状遺構、自然河川跡、井戸跡等の多くの遺構が検出されている。	4,5
7	境目・下西原遺跡	集落 水田	弥生～近世	弥生時代から近世までの複合遺跡である。掘立柱建物跡、溝状遺構、水山跡、土坑跡、自然河川跡等の多くの遺構が検出されている。	6
8	松縄下所遺跡	集落	弥生～中世	条里地割に重複する溝状遺構の他、弥生時代後期の掘立柱建物跡や中世の水田跡が検出されている。	5,7,8
9	鹿原遺跡			詳細不明。	
10	佐藤城跡	城館	中世	香西氏の部将、佐藤孫七郎の居城。方形館の南東隅部分に相当する堀跡が検出されている。遺存する遺構は堀跡内部の傾斜面下部の１～２段のみである。	1,8,9
11	キモンドー遺跡	集落 城館	弥生～近世	弥生時代の溝状遺構や掘立柱建物跡、中世の佐藤城の堀跡、江戸時代の建物跡等が検出されている。	8,9
12	上西原遺跡	水田	弥生～中世	弥生時代前期と中世のものと思われる水山跡が確認されている。	10
13	大池遺跡	散布地	旧石器	有舌尖頭器２点、弥生土器、須恵器、サヌカイトの剥片等が出土している。	11,53
14	林下所遺跡	集落	近世	近世以降と思われる井戸や条里坪界線等の他、噴礫が数ヶ所で検出されている。	12

周辺遺跡一覧表②

番号	遺跡名称	種類	時	概要	文献
15	林沿遺跡		弥生	数条の溝状遺構が検出されている。遺物は弥生土器片、勾玉、ガラス玉等が若干出土している。	12,13
16	太田下・須川遺跡	集落	弥生～近世	弥生時代中期～古墳時代後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡等の集落跡が検出されている。遺物では弥生時代後期の溝状遺構周辺から分銅形土製品、5世紀末から6世紀前半と思われる溝状遺構からは滑形蹉が出土している。	14
17	蛭股遺跡	水田 墓地	弥生～近世	古代から中世にかけての水田跡、溝状遺構、畦畔跡等が検出されている。また、弥生時代後期の自然河川跡から3基の土器棺が出土している。	7,15
18	居石遺跡	自然河川	縄文～近世	香束川に起因する自然河川跡が検出されている。遺物は縄文時代晩期中頃の土器や古墳時代初頭の小型仿製鏡等が出土している。	5,7,16,17
19	井手東Ⅱ遺跡	集落	縄文～近世	縄文時代の溝状遺構が多く検出されている。縄文土器と弥生土器が供伴して出土しているほか、石棒などの石器も出土している	5,18
20	井手東Ⅰ遺跡	集落	縄文～近世	縄文時代から弥生時代の溝状遺構と鎌倉時代から江戸時代の集落跡を出土している。弥生時代中期中頃の溝状遺構からは鋤、鍬、琴、機織具、弓等の木製品が出土している。	5,19
21	冷・長池Ⅱ遺跡	集落 水田	縄文～近世	弥生時代前期末頃の水田跡の他、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑等、縄文時代晩期から近世にかけての遺構が出土されている。	5,20
22	冷・長池遺跡	集落 水田 墓地	縄文～近世	弥生時代前期の水田跡と弥生時代中期の竪穴住居跡、円形周溝墓、掘立柱建物跡等を検出している。遺物では縄文時代晩期から弥生時代の木製品や石器が多く出土している。	5,21

周辺遺跡一覧表③

番号	遺跡名称	種類	時	概要	文献
23	浴・松ノ木遺跡	自然河川 水田	縄文～近世	弥生時代前期から近世にかけての自然河川跡と水田跡が断続的に見られる。最も水田の規模が拡大する時期は古墳時代中期末から後期初頭頃と12世紀後半頃である	5,22
24	林・坊城遺跡	自然河川 墓地	縄文～古墳	縄文時代晩期の土器と木製品が出土している他、弥生時代の竪穴住居跡と円形周溝墓、初期の条里地割、坪界溝が検出されている。	23,24,25
25	六条上所遺跡	自然河川 集落	弥生～近世	古墳時代の竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡を中心として多くの遺構が検出されている。また、古墳時代中期の竪穴住居跡からは韓式系土器が出土している。	26
26	宗高・坊城遺跡	集落	弥生	弥生時代後期の自然河川跡をはじめ、中世の条里地割や用水が検出されている。	
27	弘福寺領山図比定地	散布地	弥生～近世	弥生時代から近世にかけて多くの遺構が検出されている。条里地割に基づく溝状遺構、吉国寺や岩田神社の参道なども確認されている。	5,27,28,29,30,31,32,33
28	空港跡地遺跡 （亀の町地区）		弥生～近世	現在の春日川方向へ通水する溝状遺構と里界を構成する溝状遺構が検出されている。	34,35
29	空港跡地遺跡	集落	弥生～近世	弥生時代前期から近世にかけての複合遺跡である。竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝状遺構、周溝墓等の多くの遺構を検出している。また、銅剣転用鋳鉄や人形土製品、鎌形木製品等の遺物も出土している。	36,37,38,39
30	宮西・一角遺跡	自然河川	弥生～近世	弥生時代前期の土坑５基、溝状遺構11条、中世の土壙墓１基、弥生時代後期頃の自然河川跡などが検出されている。	10,31,33,34
31	宮尻上遺跡	水田	奈良	溝状遺構、水田畦畔を検出。土器片数点が出土している。	10,54
32	凹原遺跡	集落	弥生～古墳	弥生時代後期から古墳時代初頭の集落跡が中心で、この時期の竪穴住居跡で円形２棟、方形７棟を検出している。	5,40

周辺遺跡一覧表④

番号	遺跡名称	種類	時	概要	文献
33	日暮・松林遺跡	集落 墓地 自然河川	弥生～近世	弥生時代中期から近世の遺構を検出している。主に弥生時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓、中世の条里地割に基づく溝などがあげられる。遺構では古墳時代の自然河川跡から多数の須恵器が出土している。	34,41
34	多肥・宮尻遺跡	自然河川	縄文～鎌倉	縄文時代晩期から鎌倉時代にかけての遺跡が検出されているが密度は稀薄である。自然河川跡から多量の遺物が出土している。	42
35	多肥松林遺跡	集落 自然河川	縄文～近世	弥生時代中・後期と平安時代の集落跡や自然河川跡を中心に縄文時代晩期から近世にかけて遺構を検出している。河川下層からは弥生時代後期の溝状遺構が２基検出されている。遺物では弥生時代中期の自然河川跡から出土した農耕具、祭祀具等の木製品、平安時代の自然河川跡から出土した墨書土器等があげられる。	34,42,43,44,45
36	松林遺跡	集落	縄文～近世	弥生時代中期の竪穴住居跡、土坑等の他、竪穴が検出されている。また条里地割に合致する溝状遺構も検出されている。	46
37	多肥廃寺	寺院	奈良～平安	布目瓦が出土し、見性寺林の小字名が残る。	47,48
38	高木城跡	城館	中世	乃生氏の城。鎮守「城の神」と関連地名が現存する。	1
39	拝師廃寺	寺院	奈良～平安	奈良時代後期の布目瓦が出土している。	48,49
40	由良山城跡	城館	中世	城主は由良遠江守兼光といわれるが、その系譜ははっきりしない。由良山山頂部分の平坦地を中心とする。	1,50
41	南海道推定地	道路	古代	三木町白山から御厩町の六月山を結ぶ直線上に位置する。加摩羅神社の東北部分に道路遺構の一部と思われる堤状の盛り土遺構がみられる。	2,53
42	加摩羅神社古墳	古墳	古墳	横穴式石室を有する。	2

周辺遺跡一覧表⑤

番号	遺跡名称	種類	時	概要	文献
43	高野丸山古墳	古墳	古墳中期	直径約40mの円墳。古墳の周囲に幅10～15mの基壇状テラスと思われる地割がみられる。	3
44	高野廃寺	寺院	奈良～平安	周辺から重弧文・古瓦が出土しているが詳細は不明。	48,49
45	高野南1号墳	古墳	古墳後期	15m×6mの盛土が残るのみで詳細は不明。埴輪が出土している。	3,48
46	高野南2号墳	古墳	古墳後期	1号墳同様盛土残存。	
47	二谷石舟池古墳群	古墳	古墳後期	三谷石舟古墳をはじめ11基以上の古墳がある。1号墳で竪穴式石室が、2,3,4,5号墳で横穴式石室が確認されている。	7,51
48	三谷石舟古墳	古墳	古墳中期	前方後円墳。全長88m、後円部径44m、高さ4.5m、前方部幅27mを測る。刳抜式石棺を有し、埴輪、須恵器、勾玉、切小玉等が出土したとされる。	48
49	三谷城跡	城館	中世	三谷氏の城。三谷石舟古墳の西南にあたる部分に城があったとされる。詳細不明。	1
50	平石上古墳群	古墳	古墳後期	1号墳から6号墳まで確認されている。1号墳は直径20mの円墳。隣接の建物建設の際、古墳の西側が削られたため前方後円墳の可能性もある。2号墳は開墾によって上半部が失われた横穴式石室が見つかっている。3号墳は直径13mの円墳。横穴式石室を持つ。残りの古墳は詳細不明。	48
51	小日山1号墳	古墳	古墳前期	全長約31mの前方後円墳。後円部中央に盗掘を受けた竪穴式石室がみられる。鏡が出土したと伝えられるが所在不明。	48
52	雨山南遺跡	散布地	旧石器	サヌカイト製の国府型ナイフ形石器が出土している。	
53	矢野面古墳	古墳	古墳後期	南北15m、東西10mが現存する。高松平野南部では最大規模の横穴式石室が確認されており、石室の大きさや墳丘の状態から古墳の規模は約20mと推定される。	48,52

参考文献一覧表

1．『高松市の文化財　第７編　古城跡を訪ねて』　高松市歴史民俗協会　高松市文化財保護協会　1982
2．『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報』　高松市教育委員会　1987
3．『香川考古　第３号』　香川考古刊行会　1994
4．『香川県埋蔵文化財調査年報　平成元年度』　香川県教育委員会　1990
5．『讃岐国弘福寺領の調査』　高松市教育委員会　1992
6．『太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　境目・下西原遺跡』
高松市教育委員会　1998
7．『香川県埋蔵文化財調査年報　平成４年度』　香川県教育委員会　1993
8．『むかしの高松　第４号』　高松市教育委員会　1994
9．『香川県埋蔵文化財調査年報　平成５年度』　香川県教育委員会　1994
10．『香川県埋蔵文化財調査年報　平成７年度』　香川県教育委員会　1996
11．『香川考古　第２号』　香川考古刊行会　1994
12．『香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度』　香川県教育委員会　1997
13．『四国横断自動車建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成８年度』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1997
14．『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　太田下・須川遺跡』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1995
15．『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊　蛙股遺跡』
高松市教育委員会　1995
16．木下晴一　「井堰と瀬の祭祀」　『同志社大学考古学シリーズVI』　森浩一編　1994
17．『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第７冊　居石遺跡』
高松市教育委員会　1995
18．『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊　井手東Ⅱ遺跡』
高松市教育委員会　1995
19．『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　井手東Ⅰ遺跡』
高松市教育委員会　1995
20．『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　浴・長池Ⅱ』
高松市教育委員会　1994
21．『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　浴・長池』
高松市教育委員会　1993
22．『一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊　浴・松ノ木』
高松市教育委員会　1994
23．『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊　林・坊城』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1993
24．『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成９年度』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1998
25．『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1999

26.『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊　六条・上所』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1995
27.『弘福寺領讃岐国山田郡山図比定地域発掘調査概報Ⅰ』　高松市教育委員会　1988
28.『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報Ⅱ』　高松市教育委員会　1989
29.『弘福寺領讃岐国山田郡山図比定地域発掘調査概報Ⅲ』　高松市教育委員会　1990
30.『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報Ⅳ』　高松市教育委員会　1993
31.『弘福寺領讃岐国山田郡山図関係遺跡発掘調査概報Ⅰ』　高松市教育委員会　1996
32.『弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡発掘調査概報Ⅱ』　高松市教育委員会　1997
33.『弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡発掘調査概報Ⅲ』　高松市教育委員会　1998
34.『香川県埋蔵文化財発掘調査年報　平成６年度』　香川県教育委員会　1995
35.『高松市林町ＲＴ（加入者線多重伝送装置）設置に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　空港跡地遺跡
（亀の町地区Ⅰ）』　高松市教育委員会　1995
36.『空港跡地遺跡発掘調査概報　Ｈ３～Ｈ８』　香川県教育委員会　1992～1997
37.『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　空港跡地遺跡Ⅰ』
香川県教育委員会　1996
38.『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊　空港跡地遺跡Ⅱ』
香川県教育委員会　1997
39.『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　空港跡地遺跡Ⅲ』
香川県教育委員会　1998
40.『香川県埋蔵文化財発掘調査年報　平成２年度』　香川県教育委員会　1991
41.『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　口墓・松林遺跡』
高松市教育委員会　1997
42.『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成９年度』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1998
43.『高校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成５年度　多肥松林遺跡』　香川県教育委員会　1994
44.『高松土木事務所新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成６年度　多肥松林遺跡』
香川県教育委員会　1995
45.『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　多肥松林遺跡』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1999
46.『香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　松林遺跡』
高松市教育委員会　1996
47.『多肥郷土史』　多肥郷土史編集委員会　1981
48.『遺跡が語りかける　高松の古代文化』　高松市立図書館　1998
49.『第11回特別展讃岐の古瓦展』　高松市歴史資料館　1996
50.『川島郷土誌』　川島郷土誌編集委員会　1995
51.『高松市内埋蔵文化財試掘調査概報　平成３・４年度』　高松市教育委員会　1993
52.『香川考古　第６号』　香川考古刊行会　1997
53.『香川県史１　原始・古代』　香川県　1989
54.『香川県埋蔵文化財発掘調査年報　平成９年度』　香川県教育委員会　1998

第３節　弘福寺領讃岐国山田郡田図調査について

高松市教育委員会では、弘福寺領讃岐国山田郡田図に関してこれまでに、高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査事業（昭和61年度）ならびに弘福寺領田図関係遺跡発掘調査事業（昭和62～平成３年度）、第２次弘福寺領山図調査事業（平成６～10年度）を文化庁ならびに香川県教育委員会の理解と指導の下に実施してきた。これは、高松市が昭和63年度から進めている太田第２土地区画整理事業地内の遺跡の分布状況を確認する中で、同じく当該範囲に存在が予想されていた弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地の調査を深めてきたものである。

調査の主題となった「弘福寺領讃岐国山田郡田図」は、天平７（735）年の記年を有するわが国最古の荘園絵図であり、当時大和に所在する弘福寺（川原寺）が讃岐国山田郡に領有した荘園の領域と土地利用の様子が条里地割の方格を基本として描かれている。現在、香川県大川郡志度町の多和文庫（松岡弘泰氏）の所蔵になる「弘福寺領讃岐国山田郡山図」は、鎌倉時代の写本で奈良時代から伝えられたものではないものの、原本の内容を忠実に模写して当時の荘園の様子をよく表し、資料的な価値は計り知れないとして、第１次調査終了後の平成３年６月に重要文化財の指定を受けている。

第１次調査事業では、弘福寺領荘園に関係する具体的な遺構の確認を見ることはできなかったものの、主に調査に際して組織した「弘福寺領讃岐国山田郡山図調査委員会」の方々のご苦労によって、弘福寺領田図の南北両地区比定地がそれぞれ木太町大池南半から南側の一帯、旧高松空港滑走路の西半分からその北側一帯に存在する可能性が高いことが推測されるに至った。そして、何より大きな収穫はそれまで埋蔵文化財包蔵地としては殆ど空白地帯であった高松平野の全域にわたる条里地割、埋没微地形の分布状況が明らかにされたことである。これら第１次調査事業の成果は、ほぼ同時期に本格化した高松東道路建設事業、太田第２土地区画整理事業等による遺跡調査事例の増加と相俟って、現在の埋蔵文化財調査を進めてゆくうえで不可欠な基本資料となっている。

一方、弘福寺領田図南地区比定地では、平成２年の新高松空港の開港に伴い跡地再開発事業が始まり、周辺部でも県立高校新設等による工事が計画されてこれらに先立つ埋蔵文化財調査が平成３年から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによって実施されてきた。

高松市教育委員会及び「弘福寺領讃岐国山田郡山図調査委員会」委員の中では、これらの開発計画によって弘福寺領田図北地区比定地のみならず南地区周辺までもが歴史的景観の急激な消滅を余儀なくされることに危機感が募り、文化庁ならびに香川県教育委員会に南地区周辺の関連遺跡確認調査の補助事業採択を強く要望した結果、平成６年度から第２次弘福寺領田図調査事業として着手することが認められた。

第２次弘福寺領山図調査事業の実施にあたっては、前回と同様に文献、地理、民俗、自然分析等学識経験者等による調査委員会を中心とした総合調査を計画し、前回の調査で手薄であったとされた民俗等聞き取り調査、考古古代、文献中世の分野の補強を図った。

具体的な調査地として、田図南地区比定地および山田香川郡界線推定地、古代南海道推定地、田図北地区比定地の３ヶ所が発掘調査の対象地となった。

田図南地区比定地周辺では、終戦直前の陸軍飛行場の接収造成と戦後の民間払い下げによる区画整理で、高松平野に広く認められる条里地割とは別編成の土地区画が施行されている。このために本来であれば現用の道路や用水路下に重複して発掘調査が叶わないような条里遺構についても確認することができ、これら遺構、特に溝状遺構の多くは近世以降の順道絵図、古地籍図の記載との対照が可能で、現地

表の条里地割は少なくとも近世までは遡れることが確認できた。しかし一方で，陸軍飛行場拡収を契機とする一連の上地造成によって削平または撹乱を受けた遺構も少なからずあったもようで，当該調査地点の多くでは古代から中世の遺構（遺構面）がほとんど欠落しており，石組み井戸（14世紀），水田層（遺物の包含はないがおそらくは古代末から中世）が見られるにすぎない。

これは，本来の西高東低の地勢が昭和19年の陸軍飛行場造成によって切り盛りされたことによって高位の西半部に特段の削平がおよんだためと考えられ，ある意味では当該区域の考古学調査の限界を示しているものともいえる。

今後当該地区の調査に関しては，開発等の事前調査としてできるだけ多くの調査データを蓄積するとともに，現在整理が進められている関連遺跡調査報告書の作成作業等の動向も見据えながら地形環境や土地利用の変遷により詳細な検討を加えていく必要があるものと考えられる。

古代南海道推定地の発掘調査においては，復原条里地割から推定される南海道の想定路線上に調査区を設定し，砂岩塊石を心材とした５層の砂層堆積とそれに包含される遺物細片を確認したものである。このことは，南海道そのものの存在と位置推定を証明した意義はさることながら，南海道が郡界線とともに高松平野の条里地割の縦横の基線となっていることから，条里地割そのものが古代以来大きな設計変更なしに現代にまで受け継がれてきた可能性が高いことを示したものであるといえる。

第２次弘福寺領山図調査事業において垣間見ることができた南海道の遺構は，高松平野南部を高い計画性をもって横断した古代南海道の全体像と比べるとごく一部の確認にとどまりはしたものの，高松平野の条里プランの確定作業の上では大きな契機となった成果と考えられる。今後とも，弘福寺領田図比定地同様，当該遺構が展開してゆく区域を念頭におきながら，調査データの蓄積につとめることで高松平野の土地開発との関わりがより詳細に検討されてゆくものとなろう。

参考文献

『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報』　高松市教育委員会　1987
『讃岐国弘福寺領の調査』　高松市教育委員会　1992
『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』　高松市教育委員会　1999
『弘福寺領讃岐国山山郡山図比定地域発掘調査概報Ⅰ』　高松市教育委員会　1988
『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報Ⅱ』　高松市教育委員会　1989
『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報Ⅲ』　高松市教育委員会　1990
『弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報Ⅳ』　高松市教育委員会　1993
『弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡発掘調査概報Ⅰ』　高松市教育委員会　1996
『弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡発掘調査概報Ⅱ』　高松市教育委員会　1997
『弘福寺領讃岐国山田郡田図関係遺跡発掘調査概報Ⅲ』　高松市教育委員会　1998

第４節　周辺の調査成果

空港跡地遺跡

高松平野中央部南方に位置し、香東川によって形成された扇状地に立地する。高松空港移転に伴う跡地利用による諸施設の建設に先立つ発掘調査が実施され、弥生時代前期から江戸時代に至る大規模遺跡が埋没していたことがわかった。

調査は空港跡地全域に及ぶため調査区は広大である。そのため、例えば弥生時代中期後半から古墳時代後期の遺構では、複数の集落および墓域を確認しており、原始古代の高松平野の景観を復元するうえで恰好の材料となっている。さらに、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての墳墓群は、円形・方形・前方後円形・前方後方形の周溝墓が見られ、古墳出現期における墓制を考えるうえで貴重な資料となった。また、弥生時代後期に属する出水状遺構を確認しており、高松平野の用水確保が古くから行われていたことが明らかになっている。

古代においても、掘立柱建物跡・溝などを検出しており、複数の集落が存在したことが明らかになっている。また、生産域である水田も確認されている。

中世の集落も検出しており、溝で区画された掘立柱建物群や墓が確認され、中世集落の構造変遷を知る資料となっている。また、備前焼壺、土師器皿・古銭を一緒に埋納した珍しい土坑も見つかっている。

出土遺物のうち珍しいものでは、鹿の線刻がある弥生土器、銅剣から転用された青銅器、弥生時代後期から古墳時代前期と推定される人形土製品、古代の彩釉陶器などがあげられる。

宮西・一角遺跡

市道林町47号線拡幅工事に伴って発掘調査が行われ、弥生時代前期末から近代にかけての遺構、遺物が確認された。

主な遺構としては、弥生時代前期末の廃棄土坑、弥生時代後期初頭の竪穴住居跡、中世の土壙墓１基、弥生後期初頭から近代の溝等があげられる。また、南北幅10.6m、東西幅12.4m、深さ0.9mの凹地状遺構が検出され、内部からは弥生時代後期初頭から８世紀までの遺物が出土している。このほか、弥生時代後期の土器を多く含む旧河道や、平安時代の水田跡等も検出されている。

溝のうち、中世では交差または直角に屈曲すると思われる小溝が検出された。方向は現地表で想定される条里地割に平行するが、位置は東へ40m、南へ25mほど離れている。交差部分には土師器小皿が数枚重ねられた状態で一列に並んで埋納されており、用水路または用水に関連する何らかの祭祀が行われたと考えられる。近世以降の溝の多くは現地表の条里地割に沿った方向で検出され、それに従わない溝は終戦前後の軍用飛行場の造成等に関係していると思われる。

木遺跡は弘福寺領讃岐国山田郡田図南地区比定地と一部重複していることから関連する遺構の検出が期待されたが、明確なものは確認されなかった。

多肥宮尻遺跡

県道太田上町志度線建設に伴い調査が行われた。調査区の北西部分は、周辺地割の乱れ等から香東川の旧河道であることが確認されている。

調査では、縄文時代晩期～近世にかけての遺構・遺物を検出した。前述したように、鎌倉時代のピットと古代～中世と考えられる掘立柱建物１棟を除くと居住遺構は確認できず、６条の自然河川からの遺

物出土量と対照的な結果となった。当遺跡東側に隣接する空港跡地遺跡Ⅰ－14・15区において、弥生時代終末および古墳時代中期末葉～後期後半にかけての竪穴住居が少数確認されているが、居住域の中心とは考えられず、当遺跡南方に広がる微高地を中心に各時期の集落が展開すると予想される。

また、当遺跡東方は弘福寺領讃岐国山田郡田図の南地区に比定されており、調査区は香川郡１条13里に相当する。山図等によるとⅠ区東端付近は８世紀中葉において、津田西口ないし津田となっている。津田とは水の多い湿潤な田を意味する。平・断面で畦畔等の検出に努めたが、確認できなかった。なお、条里地割に合致する溝はⅠ区東端付近で検出したのみで、坪境等をしめす溝は確認できていない。

宗高・坊城遺跡

都市計画道路福岡三谷線建設事業に伴い、平成11年４月～９月まで発掘調査が行われた。調査区の南北には微高地が広がり、その間に旧河道が確認されている。これは近接する林・坊城遺跡で検出されたＳＲ01流路Ａにつながる。水田跡や集落跡は検出されていない。

旧河道では、川底から縄文時代晩期の土器が２点、川岸付近からは弥生時代後期の土器が多量に出土している。洪水跡と思われる堆積には多量の弥生土器に混ざって、鍬や勘棟の木製品が多く包含されていた。また、加工途中と思われる穴の開いていない勾玉も出土している。川は弥生時代後期頃に湿地状となり、次第に埋没していったと考えられる。

微高地は後世の削平を多く受けているため、中近世以降の遺構が大半を占める。弥生時代後期から中世にかけては溝が、中世では井戸が検出されている。近世では掘立柱建物跡、現地表の条里地割に沿った溝、井戸、出水、暗渠等の灌漑施設が確認されている。

日暮・松林遺跡

都市計画道福岡多肥上線の建設に伴って調査された。遺跡は旧高松空港の北西方向に位置し、条里地割の遺存する水田地域に立地する。多肥松林遺跡が西側に隣接する。

検出された遺構は弥生時代中期～近世に至る長期間にわたるが、中心的な存在をなすのは弥生時代である。遺構の分布は、北・南端部分ではやや希薄であるが、全体としては遺構の検出密度は高い。特に、弥生時代の遺構は中央から北側に集中している。

弥生時代の遺構は、時期的に大きく２期に分けられる。中期の遺構としては、18棟の掘立柱建物跡と溝等である。掘立柱建物跡は長軸が東西方向を示し、その位置関係より規格性が考えられる。柱穴の規模は深さ70cmを測るものもあり、埋土中に土器が多量に検出されたものもある。後期の遺構としては、竪穴住居跡10棟・方形周溝墓１基・井戸１基・溝・土坑・ピット等がある。竪穴住居跡は円形と方形の平面形を呈し、最大規模のＳＨ02は直径10mを測る円形の住居であり、多量の土器が出土した。方形周溝墓は７×５mの長方形を呈し、周溝内より土器が出土した。井戸は検出面で直径６m、深さ1.2mを測る。住居跡群の北側では中期～後期の土器を河床直下より出土する旧河道が流れている。

13世紀初め頃の遺構には溝、旧河道がある。溝は調査区南側を不規則に走っており、上面及び埋土中より完形の瓦器椀が数点出土した。旧河道は、調査区南側を北東方向に蛇行しており、幅約８m、深さ1.2mを測る。上層から13世紀初の土器、下層からは古墳時代後期の須恵器が出土した。

近世の遺構は、掘立柱建物・溝・木樋がある。溝は約110m間隔で東西方向に延びる３本が検出され、条里制の坪境と考えられる。木樋は「口」字状に板材を組んでいる。

多肥松林遺跡

高松平野中央部南方に位置し、香東川によって形成された扇状地に立地する。県立高松桜井高校建設に伴う発掘調査によって、初めて確認された遺跡である。

発掘調査では、南北に蛇行して流れていた旧河道と、その東岸から弥生時代中期の建物跡を10数棟確認している。川の中からは多量の弥生土器や木器が出土した。出土した木器の中には、剣形木製品など祭祀道具も見ることができる。

松林遺跡

香川県立桜井高校の周辺通学路整備に伴って調査を実施した。扇状地形の末端部に位置し、東側には多肥松林遺跡が隣接する。

遺構はほぼ全域で検出しており、縄文時代晩期～近世にかけて断続的ではあるが長期間にわたって土地利用がなされている。縄文晩期では自然河道、弥生前期では集石遺構等が見られる。中心となる時期は弥生時代中期中葉である。竪穴住居４棟をはじめ、溝、土坑等の遺構を検出した。特筆すべきものとしては地震の痕跡である噴砂があげられる。この噴砂上には弥生中期中葉の土器が供献されていることから、この時期のものと考えられ、時期的に南海地震による液状化であった可能性が高い。地震に対する祭祀行為としても注目される。弥生後期になると、幅3.8mの大溝等が見られる。以後、遺跡は断絶し、中世から近世にかけての条里遺構が見られる。

参考文献

『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　空港跡地遺跡Ⅰ』　香川県教育委員会　1996
『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊　空港跡地遺跡Ⅱ』　香川県教育委員会　1997
『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　空港跡地遺跡Ⅲ』　香川県教育委員会　1998
『香川県埋蔵文化財調査年報　平成７年度』　香川県教育委員会　1996
『県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成９年度』　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1998
『都市計画道路福岡多肥上町線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　日暮・松林遺跡』
高松市教育委員会　1997
『高校新設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　多肥松林遺跡』
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1999
『香川県立高松桜井高校周辺通学路整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　松林遺跡』
高松市教育委員会　1996

第１節　調査区の概要と基本層序

一角遺跡の所在する林町一帯は、旧香東川によって形成された扇状地形の末端部分に位置する。このため、周辺の地形は南西から北東方向に向かってわずかながら低くなっている。遺跡周辺の現地盤の標高は約18.8mである。

第１次調査では調査区の南壁が調査地の基本層序を最も反映していたため、南壁において土層断面図を作成した。基本層序は15層に分層できる。第１層は現在の耕作土で、厚さ約15cmの堆積が認められる。その直下に第２層として灰白色シルト質極細砂層が見られる。この第２層は戦後農地として再利用するために土地のかさ上げを行った際の造成土と考えられる。第３層の灰黄色シルト質極細砂層は、昭和19年に陸軍が軍用空港として造成を行った際の造成土と考えられる。各造成土の厚さは５～15cmで瓦片を多く含む。第４層の灰黄色シルト質極細砂層は、その埋土中に多量の瓦片と礫を含むことから整地面と考えられる。調査区南壁土層断面で第４層上面から土坑状の遺構が掘り込まれていることから、第４層上面を第１遺構面とした。第５層の灰黄色細砂～礫層は洪水による堆積と考えられる。第４層上面同様、調査区南壁土層断面において第５層上面から土坑、柱穴、井戸が掘り込まれていることがうかがえることから第２遺構面としてとらえた。第６層は黄灰色シルト質極細砂～細砂層、第７層は灰黄色シルト質極細砂層、第８層は黄灰色細砂層、第９層はマンガンを含む黄灰色細砂層、第10層は灰黄色細砂層、第11層は褐灰色シルト質極細砂層で、いずれも10cm以下の薄い堆積である。第12～14層については旧河道の埋土と考えられる。第12層は灰黄色細砂層、第13層は褐灰色シルト質極細砂層で、いずれも薄い堆積である。第14層は弥生後期の土器片を多量に含む黒色シルト質極細砂層で、深いところでは厚さ50cmの堆積が認められる。第15層は地山で、オリーブ褐色シルト質極細砂層である。旧河道の無い部分では、第11層直下に黄灰色シルト層が認められ、遺跡全体を考える上での地山はこの黄灰色シルト層としてとらえた。また、試掘調査においてこの地山上面から多数の遺構が掘り込まれていることから第３遺構面とした。

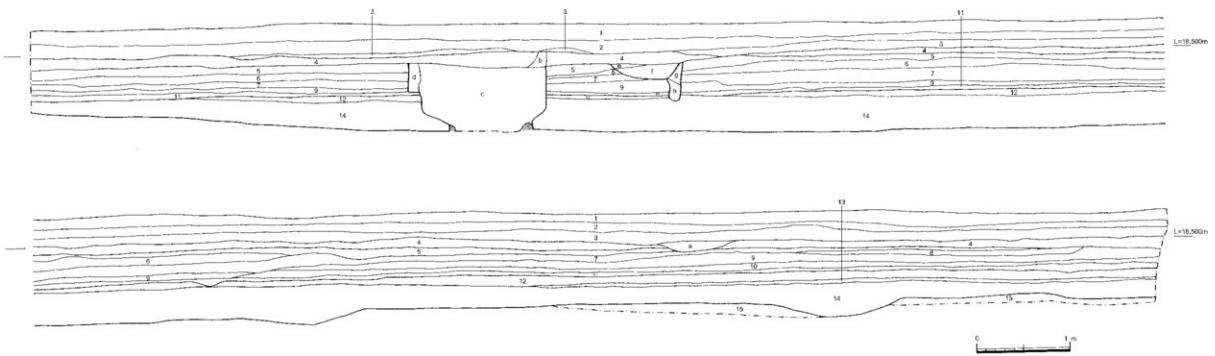
写真３　調査区南壁土層堆積状況（西から）

写真４　調査区南壁土層堆積状況（東から）

各遺構面の具体的な時期であるが、第１遺構面については、旧陸軍による高松空港の造成により埋められたと考えられることから上限については昭和19年と考えられる。下限については出土遺物中の陶磁器の年代観から明治以降と考えられる。第２遺構面は遺構出土遺物中の瓦、陶磁器から考えて幕末～明治頃の遺構面と考えられる。第３遺構面は旧河道中の遺物より弥生後期と考えられる。

各遺構面とも多くの遺構、遺物を検出した。遺物については弥生の旧河道や近世～近代の溝出土の遺物が大多数を占め、コンテナ50箱分出土した。

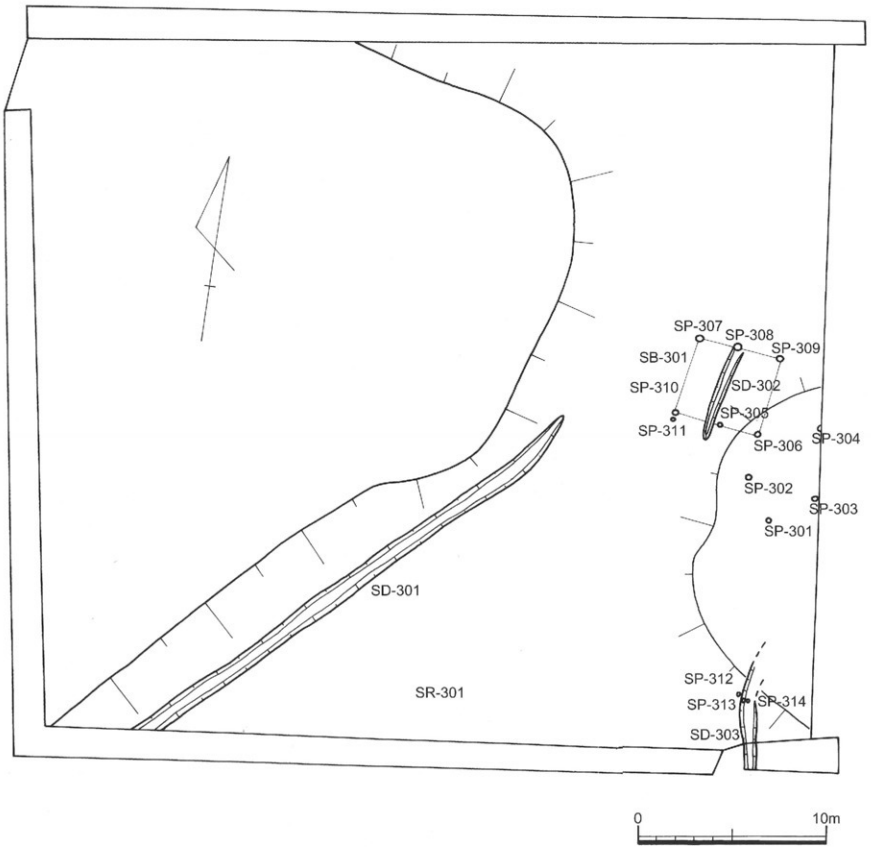
第３章　第１次調査の成果



1．耕作土
2．2.5Y R　7／2　灰白　シルト質極細砂
3．2.5Y R　6／1　灰黄　シルト質極細砂
4．2.5Y R　6／2　灰黄　シルト質極細砂
5．2.5Y　5／2　灰黄　極細～礫
6．2.5Y　5／1　黄灰　シルト質極細砂～細砂
7．2.5Y R　6／1　灰黄　シルト質極細砂
8．2.5Y R　6／3　黄灰　細砂
9．2.5Y R　6／3　黄灰　細砂（含マンガン）
10．2.5Y R　7／2　灰黄　細砂
11．10Y R　6／1　褐灰　シルト質極細砂
12．10Y R　4／1～6／1　褐灰　シルト質極細砂
13．10Y R　4／2　灰黄褐　シルト質細砂
14．10Y R　2／1　黒　シルト質極細（弥生後期包含層）
15．2.5Y　4／3　オリーブ褐　シルト質細砂

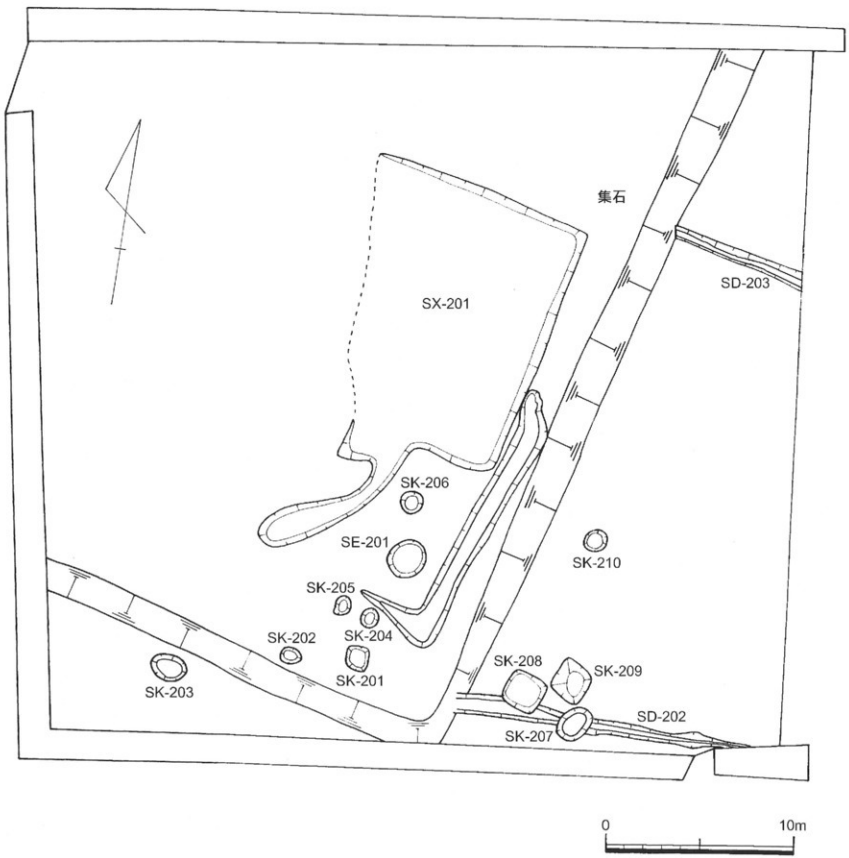
a．10Y R　5／1　褐灰　シルト質極細砂（瓦片多く含）
b．10Y R　6／1　褐灰　シルト質極細砂
c．10Y R　6／1　褐灰　シルト質極細砂
d．10Y R　6／2　灰黄褐　シルト質細砂
e．2.5Y　6／1　黄灰　シルト質細砂
f．2.5Y　6／1　黄灰　シルト質極細砂（含炭化物）
g．2.5Y　6／1　黄灰　シルト質極細砂
h．2.5Y　7／1　灰白　シルト質極細砂

第5図　調査区南壁土層断面図



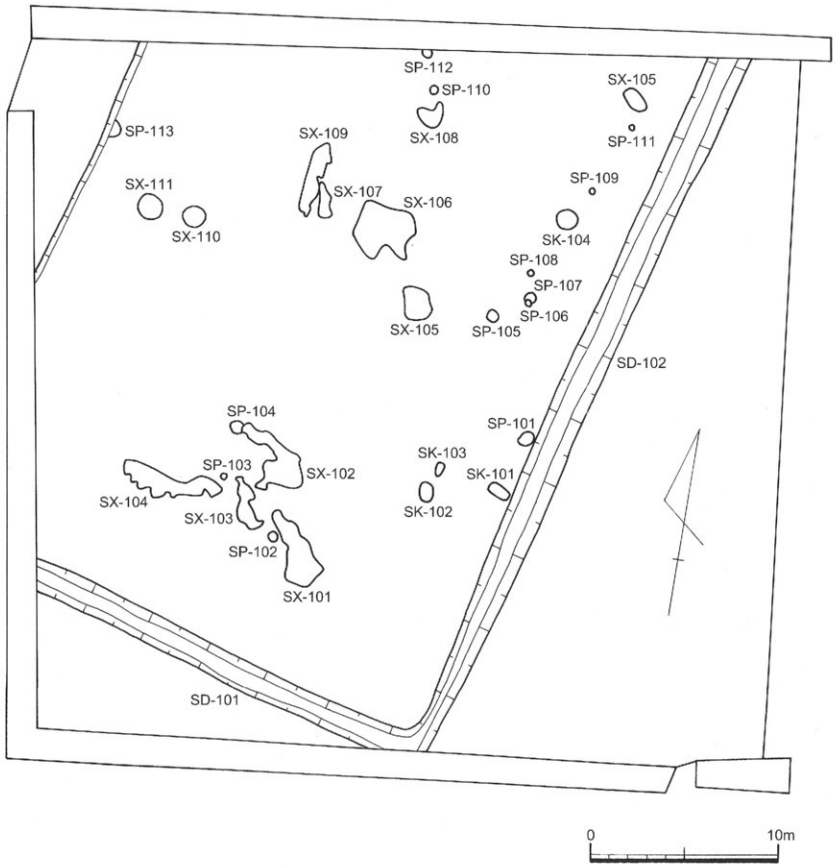
第６図　第３遺構面　平面図

写真５　第３遺構面完掘状況（東から）



第７図　第２遺構面　平面図

写真６　第２遺構面完掘状況（東から）



第８図　第１遺構面　平面図

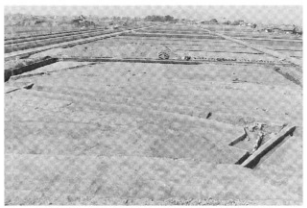


写真７　第１遺構面完掘状況（東から）

第２節　第３遺構面

地山の黄灰色シルト層上面で検出した遺構面である。遺構面の時期は概ね弥生後期後半と考えられる。検出遺構は南西から北東方向へ流れる自然河道１条、溝３条、掘立柱建物１棟、その他ピット数基である。遺物は自然河道で弥生土器を多量に検出したが、他の遺構についてはほとんど出土していない。

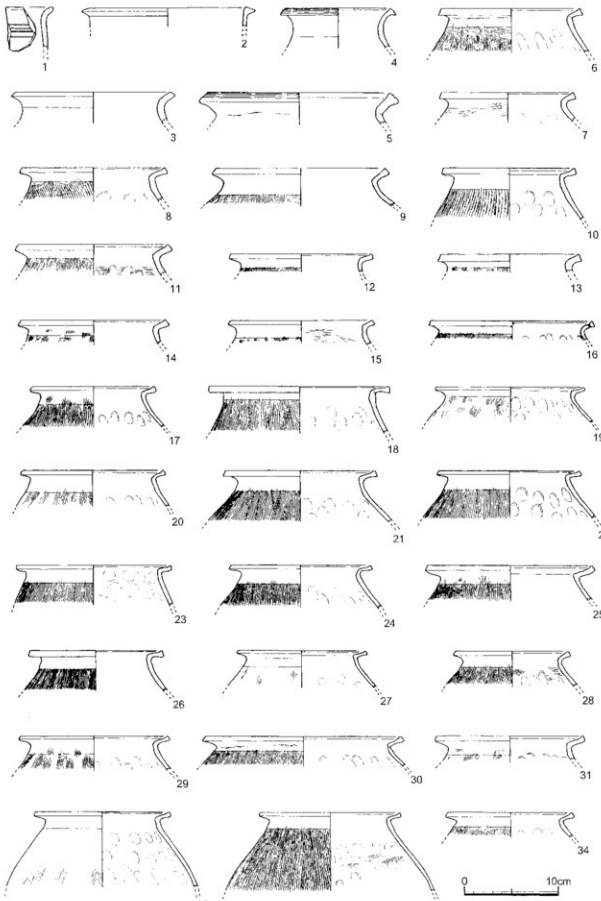
ＳＲ－301

調査区の南から北東方向へ蛇行しながら流れる自然河道である。南に隣接する空港跡地遺跡より続く流路と考えられる。川幅は調査区の南端で最大となっており約40mである。中央付近では急にせばまり約10m、北端では再度広がりを見せ約30mとなっている。深さは最深部で約50cmである。埋土は３層に分層できるが、上部の２層は薄い堆積である。空港跡地遺跡で検出した旧河道では、この上層部分において平安時代の水田層を確認しているが、今回の調査では水田を確認することができなかった。一方、下層の黒色シルト質極細砂層は堆積が厚く、弥生後期後半の土器を多量に包含している。遺物量はコンテナ約20箱分にのぼり、図示できたものを第９～21図に掲載した。

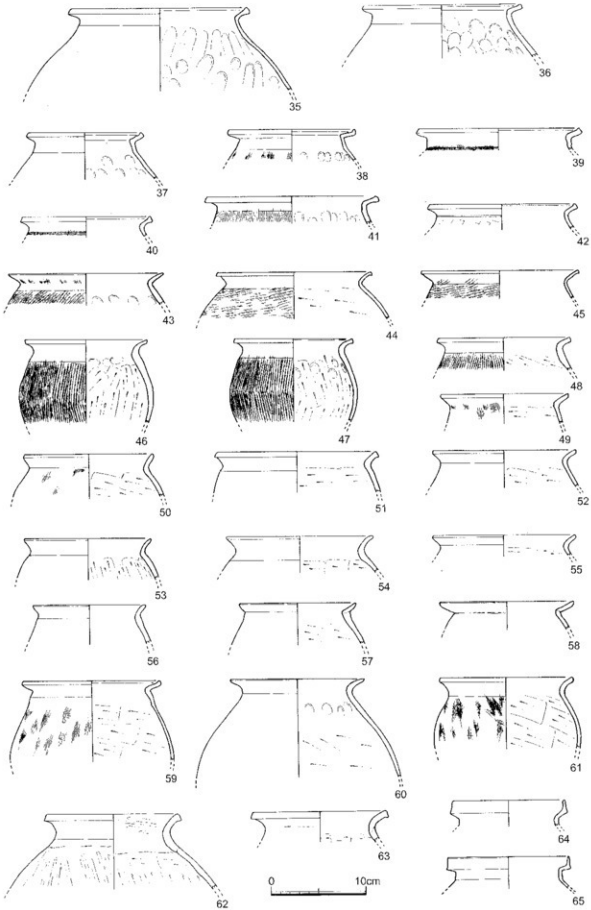
１～208は甕である。１は頸部付近に４条の沈線が施されており、弥生前期のものと考えられる。２も逆Ｌ字状の口縁を呈することから前期の時期が考えられる。

３は頸部に屈曲をもたず、ゆるやかに湾曲する。４・５は口縁端部をやや拡張させ、端面に２条の凹線を施している。４は頸部に屈曲を持たず、５は強い屈曲を示す。６・７は細筋のタタキを持つ。６は外面左上がりのタタキのちタテハケ、内面タテ方向の指頭ナデが施されている。７は外面右上がりのタタキ、内面指頭圧痕が見られる。３～７は弥生後期前半の時期が考えられる。

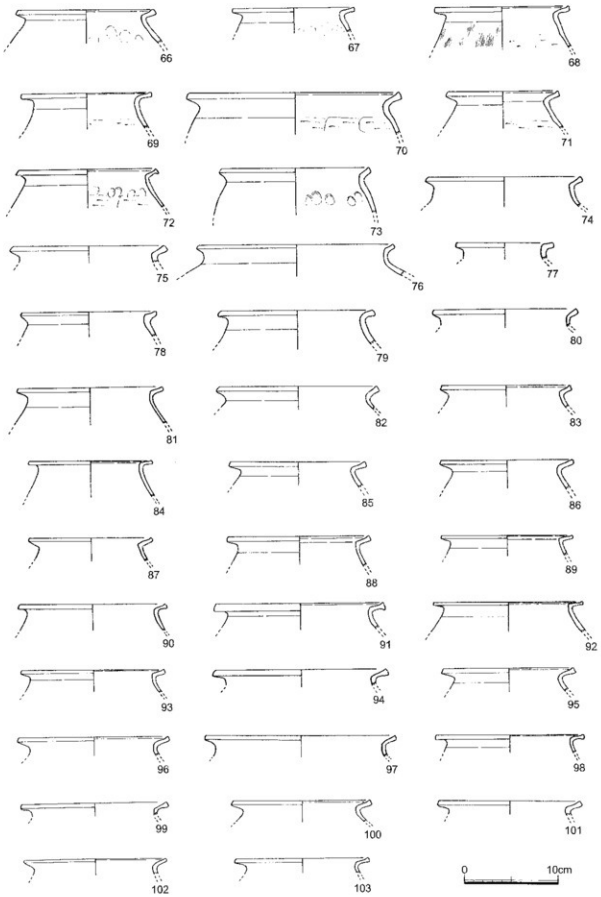
８以降は弥生後期後半のものと思われる。８～41は、くの字に強く屈曲する頸部を持ち、やや肩の張った体部を有する。口縁端部はややつまみ上げる。胎土中に角閃石を含まないものもあるが、下川津Ｂ類土器の形態である。外面はタテハケ、内面は指頭圧痕が基本的な調整である。その中で16は口縁部に円孔が１個穿たれている。42もほぼ同様の形態をとるが、外面板ナデで、頸部に沈線１条を施している。43～45はタタキ甕である。43は口縁端部に面を持たない。口縁部は内外面ともヨコナデが認められるが、外面の一部にタテハケが認められる。内面は指頭圧痕を施す。44・45は口縁端部に面を持ち、外面はタタキのみである。内面は44にヨコ方向のヘラケズリが認められる。46～48は球形に近い体部から短くゆるやかに湾曲する口縁を持つ。外面は粗いタテハケ、内面はタテ方向のヘラケズリのち上半のみ指頭圧痕を施す。49～61も同様の形態を呈するが、外面調整が細いタテハケ、内面がヨコ方向のヘラケズリを基本としている。口縁端部に差異が認められ、端部に面を持つもの49・50・51・52・54・55・59・61と面を持たないもの53・56・57・58・60に分けられる。頸部に明瞭な接合痕が見られるものが多い。62・63はゆるやかな頸部を持つもので、外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリが見られる。62の口縁部内面はヨコ方向のミガキが認められる。64・65は吉備系の甕である。内外面とも磨滅のため調整は不明である。胎土中に角閃石を含んでいることから在地で模倣したものと考えられる。66～111は磨滅により調整が不明なものを集めた。112～114は下川津Ｂ類土器の調整、形態に類似するが、頸部が長く伸びた形態である。外面はタテハケ、内面には指頭圧痕が認められる。115・116はさらに時期が下るものと考えられる。115は球形の体部で外面タテハケ、内面指頭圧痕が見られる。116は球形の体部で外面タテハケ、内面ヘラケズリのち上半と底部付近に指頭圧痕が見られる。117～208は底部である。117～171は外面タテヘラミガキ、内面ヘラケズリが認められるものである。その中で137～158については外面の磨滅が著しく、ミガキが残って



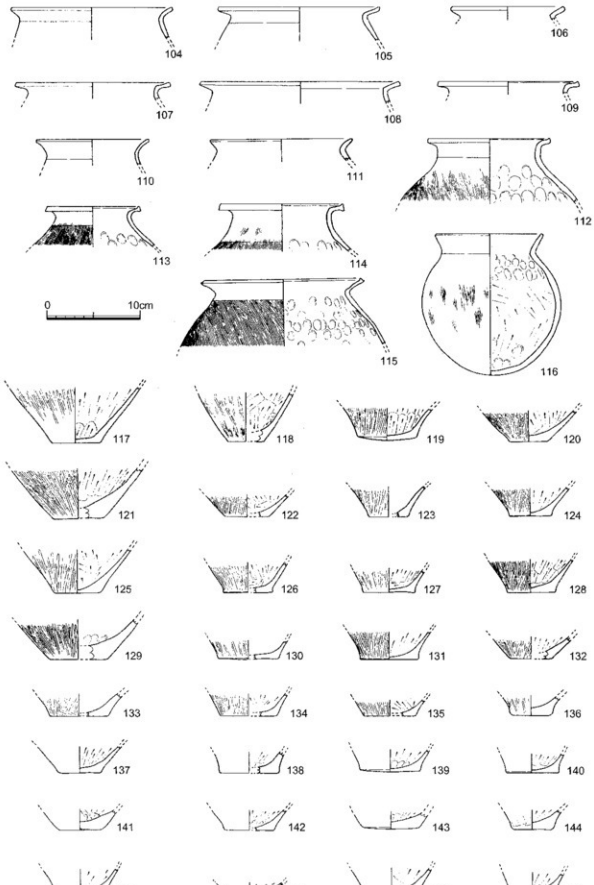
第９図　ＳＲ－301　出土遺物実測図①



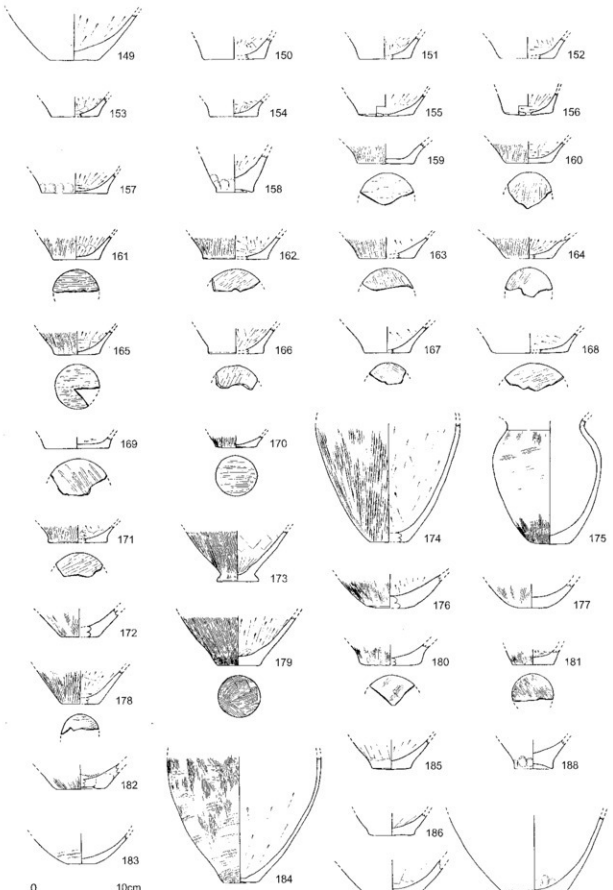
第10図　ＳＲ－301　出土遺物実測図②



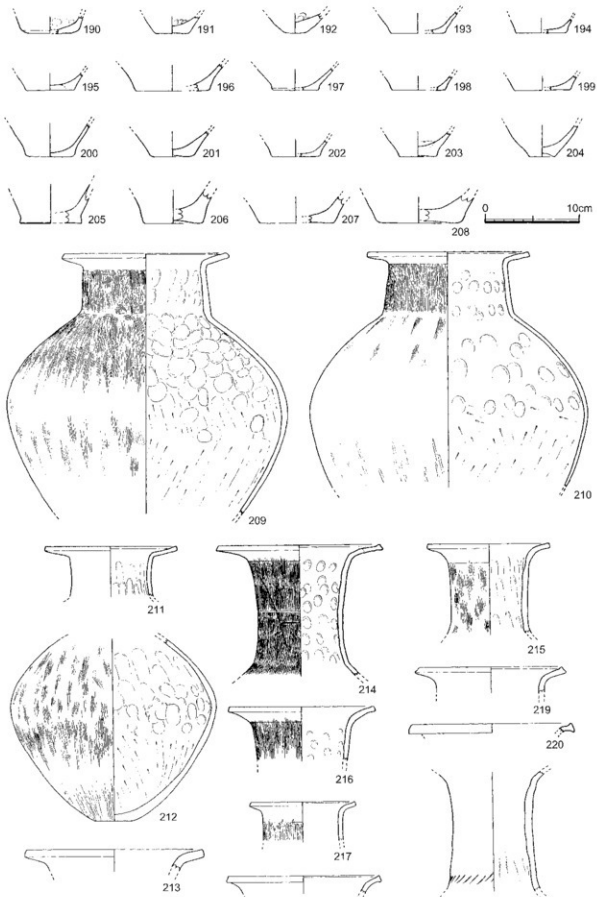
第11図　ＳＲ－301　出土遺物実測図③



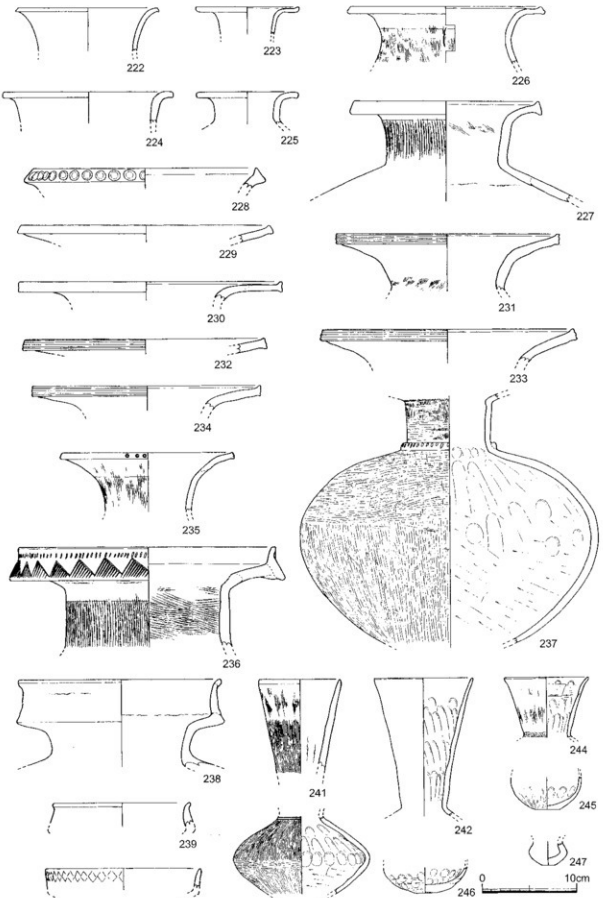
第12図　ＳＲ－301　出土遺物実測図④



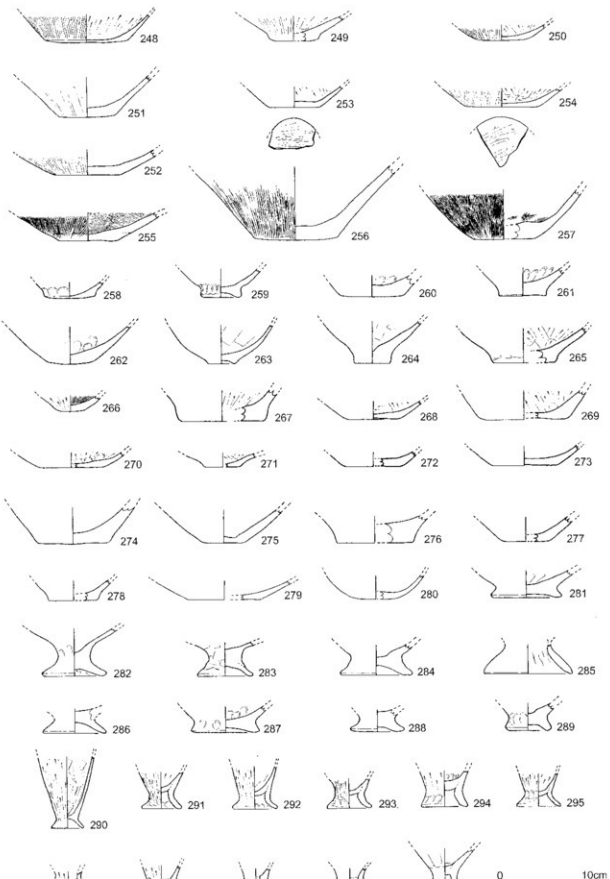
第13図　ＳＲ－301　出土遺物実測図⑤



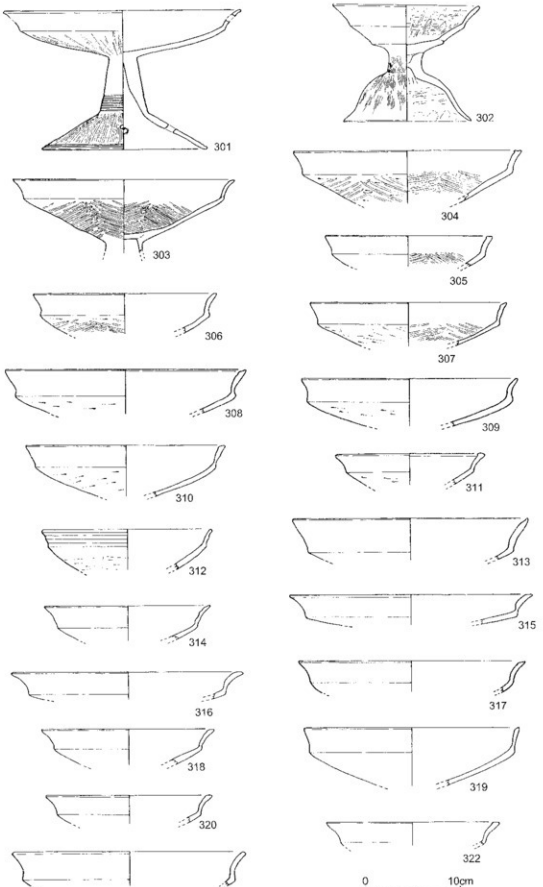
第14図　ＳＲ－301　出土遺物実測図⑥



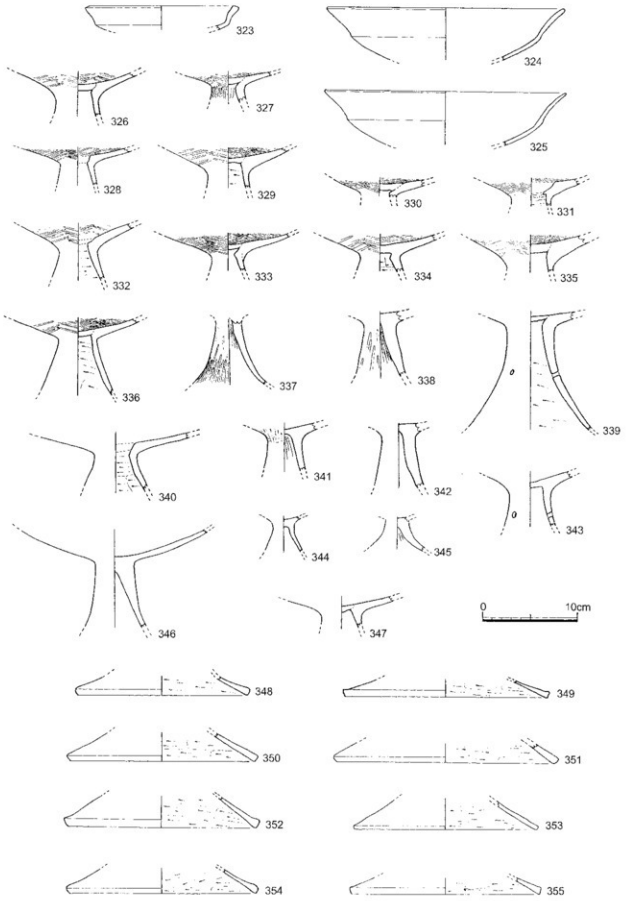
第15図　ＳＲ－301　出土遺物実測図⑦



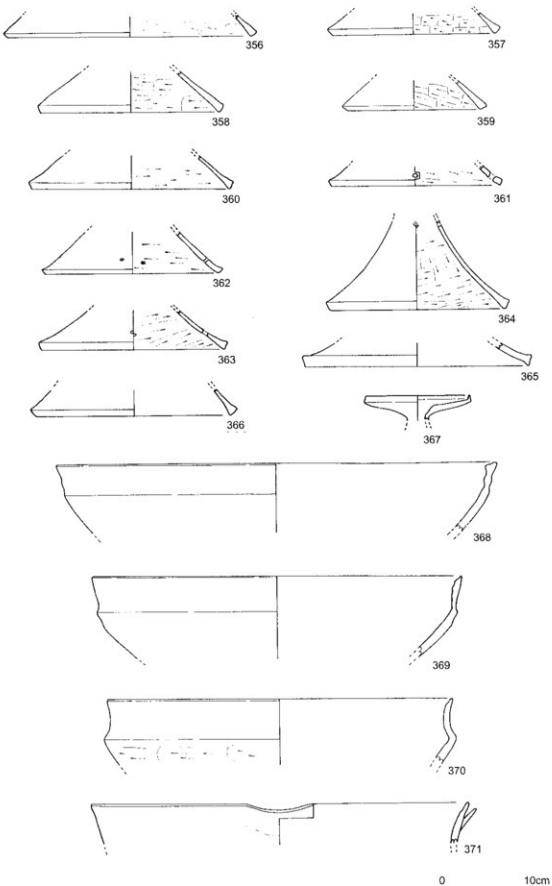
第16図　ＳＲ－301　出土遺物実測図⑧



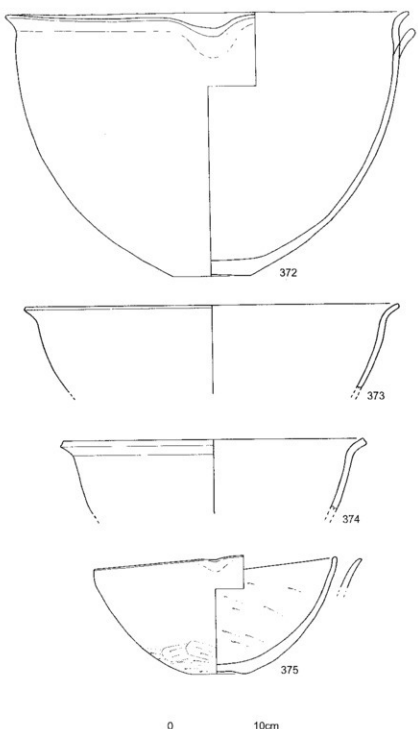
第17図　ＳＲ－301　出土遺物実測図⑨



第18図　ＳＲ－301　出土遺物実測図⑲

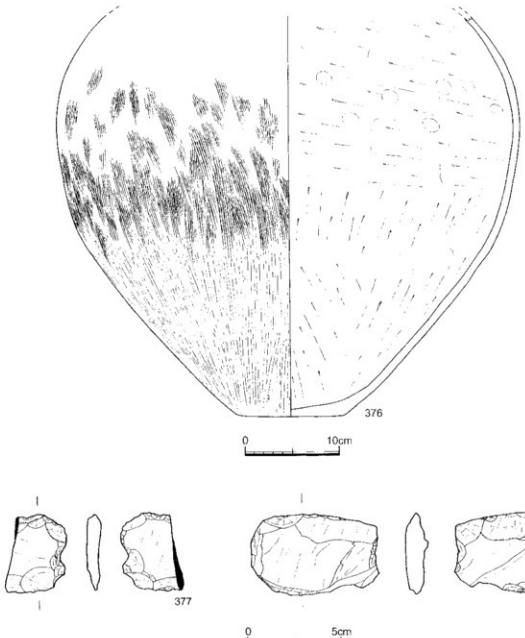


第19図　ＳＲ－301　出土遺物実測図⑪



第20図　ＳＲ－301　出土遺物実測図⑫

いない。155・156は底部に焼成前の穿孔が見られる。159～171は外面同様、底部底面にミガキが認められる。172～182は外面にタテハケを有する一群である。内面はヘラケズリが基本調整である。178～181は底部底面にハケが認められる。183・184はタタキ甕である。外面右上がりのタタキで、184はタタキのちタテハケである。内面はタテヘラケズリが認められる。185は外面板ナデ、内面タテヘラケズリである。186・187は内面板ナデ調整である。188・189は底部外面に指頭圧痕が見られる。190～192は底部内面に指



第21図　ＳＲ－301　出土遺物実測図⑬

頸圧痕が見られる。193～208は磨滅により調整不明である。

209～280は壺である。209～212は広口壺である。やや内傾する頸部から強く折れ曲がり、水平に開く口縁部をもつ。口縁端部はややつまみ上げる。外面は頸部から体部中央付近までタテハケ、体部下半はタテヘラミガキ、内面はタテヘラケズリのち上半のみ指頭圧痕である。下川津Ｂ類土器の主要器種の１つである。213～221は長頸壺である。214～216は外面タテハケ、内面指頭圧痕が見られる。214は頸部にヘラを用いた線刻が認められた。217は外面にタテヘラミガキが認められる。その他については小片のため調整不明である。221は頸部下部に刺突文が見られ、内面にはしぼり目が認められる。222～237は広口壺である。222～228は磨滅のため調整は不明である。形態は様々であるがすべて小型である。236は頸部から

写真8　ＳＲ－301　出土土器①

237

210

243

375

310

301

302

写真9　ＳＲ－301　出土土器②

口縁部にかけて湾曲する広口壺である。外面タテハケで、頸部にヘラによる線刻が認められる。227は口縁端部を拡張させる広口壺で、体部も肩の張った形態である。頸部外面は粗いタテハケ、内面はわずかにヨコハケが認められる。228～235は頸部から口縁部にかけて外反する広口壺である。228は口縁部全面に円形浮文が、235は3個のみ竹管文が見られる。231～234は凹線が認められる。236は口縁部を上方に拡張させ、外面に鋸歯文と刺突文を施している。外面は粗いタテハケ、内面は粗いヨコハケが認められる。237は直立する頸部を持つ。体部はやや扁平な球形を呈する。頸部外面はタテハケのちヨコヘラミガキ、体部外面はヨコハケのちタテヘラミガキ、上半のみさらにヨコ方向に丹念なミガキが施される。体部内面はヘラケズリのち上半のみ指頭ナデである。頸部と体部の境に突帯を持ち、刻目を施している。

238～240は複合口縁壺である。238・239は口縁部が内傾する。240は口縁部外面に斜格子文が施されている。

241～243は細頸壺である。241は外方へ直線的に伸びる口縁部～頸部で外面はタテハケである。内面にしぼり目が見られる。242はやや外反する口縁部～頸部で、外面は磨滅が著しく調整不明である。内面は指頭ナデである。243は体部で、外面上半はタテハケ、下半はタテヘラミガキ、最大径部分のみヨコヘラミガキである。内面は下半がヨコヘラケズリで、上半が指頭ナデである。頸部との接合面で剥離しており、接合面には沈線2条を巡らしている。

244～247は小型丸底壺である。244は口縁部がわずかに外反する。外面はタテハケ、内面は指頭ナデと板ナデが認められる。頸部外面には刺突文が施されている。245は体部下半で、精緻なつくりである。外面はタテヘラミガキ、内面に指頭圧痕が見られる。246は同じく体部下半であるが、245に比べ粗雑なつくりである。内外面とも指頭圧痕が著しく、接合痕もはっきりとわかる。247はミニチュアの小型丸底壺体部である。磨滅が著しいため調整は不明である。

248～280は壺の底部である。248～254は外面タテヘラミガキを施すもので、内面はタテヘラケズリを行う。253・254については底部底面にもヘラミガキが認められる。255～257は外面が粗いタテハケの一群である。255は内面に分割ヘラミガキが認められる。257はヨコハケがわずかながら残る。258・259は外面に、260～262は内面に指頭圧痕が見られる。263・264が外面板ナデである。265は外面板ナデ、内面ヘラケズリである。266は外面タテヘラケズリ、内面はくもの巣状のハケが施されている。267～271は内面ヘラケズリである。272～280は磨滅が著しく調整不明である。

281～289は脚台付の壺の脚台部である。281の内面、283の外面に板ナデが認められる。282・289の外面、287の内外面に指頭圧痕が見られる。

290～300は製塩土器である。体部は細身で直線的なものが多く、300だけが外方へ開く形態である。290～292は外面タテヘラケズリである。290の内面は板ナデのち指頭ナデ、291はタテヘラケズリ、292は板ナデである。293～297は脚部外面に指頭圧痕が見られる。内面調整は294が指頭圧痕、295がタテヘラケズリである。298・299は磨滅のため調整不明である。300は外面指頭ナデが認められる。

301～366は高杯である。301・302はほぼ完形になる。301は浅い杯部と外反する口縁部を持つ。脚柱部は直線的に外方へ開き、強く屈曲して直線的な裾部である。杯部外面は磨滅が著しいがタテヘラミガキが残る。脚裾部もタテヘラミガキである。脚裾部の下半および脚柱部の下半に沈線が2条と7条施されている。脚裾部には4方向に円形スカシが見られる。内面は磨滅のため調整不明である。302は3段に外反する杯部、短い脚柱部、ワイングラス状の脚裾部を持つ。杯部と脚部の両方とも丁寧なつくりで、どちらが杯部になるかわからない形状をしているが、中央に凹みがあるためこちらを脚裾部とした。外面はタテハケである。内面は杯部がヨコヘラミガキのちタテヘラミガキ、脚裾部がヨコヘラミガキと指頭圧

痕である。303～325は杯部である。303は内外面とも分割ヘラミガキである。同様に304の内外面、305の内面、306の外面、307の内面にも分割ヘラミガキが認められる。304・306の外面は分割ヘラミガキの前にヨコヘラケズリが認められる。307～312の外面はヨコヘラケズリである。312は口縁部外面に凹線が2条施されている。313～325は内外面磨滅のため調整不明である。326～347は脚柱部である。326～336は杯部内外面とも分割ヘラミガキが施されている。脚柱部の内面はヨコヘラケズリが見られる。外面はナデが多いが、327はタテヘラミガキである。脚部と杯部の接合部分は円盤充填技法がすべてに見られる。337・338は脚柱部が細く外面にタテヘラミガキを施している。内面にはしぼり目が見られる。339・340は内面にケズリが見られる。347とともに円盤充填技法が見られることから、当初は杯部内外面に分割ヘラミガキを施していたと考えられる。339は3方向に円形スカシが施されている。341は杯部外面にタテヘラケズリが見られる。342～347は磨滅のため調整不明である。343は3方向に円形スカシが穿たれている。348～366は脚裾部である。365・366は磨滅のため調整不明であるが、その他はすべて内面にヨコヘラケズリが見られる。脚裾部は大別して2群に分かれる。348～355の立ち上がりがゆるやかな一群と356～363の立ち上がりが急な一群である。立ち上がりの急な一群の中には円形のスカシを持つものが目立つ。361～364は4方向に見られる。361～363は裾部に、364は脚柱部に見られる。

367は小型器台である。ほぼ水平にのびる受部から垂直に口縁部が立ち上がる。脚部は中空である。内外面とも磨滅のため調整不明である。

368～375は大型の鉢である。368～371は高杯の杯部の形態に類似した形態である。調整は370の外面にヨコヘラケズリが認められる。371には片口も見られる。372～374は半球形の深い体部と外反する口縁をもつ。372には片口が見られる。375は半球形の形状で片口を持つ。外面下半および内面にケズリが認められる。

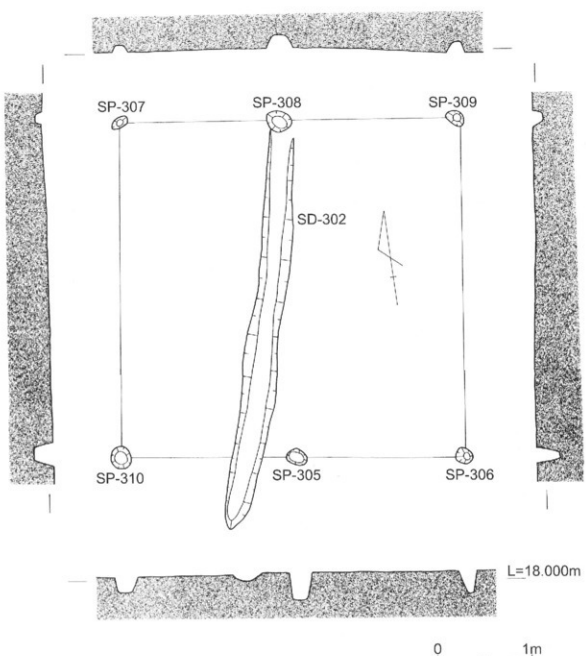
376は大型の甕の体部である。復元すると器高が60cm以上になると考えられる。外面上半は粗いタテハケ、下半はタテヘラミガキが認められる。内面は下半がタテヘラケズリ、上半がヨコヘラケズリのち指頭圧痕が見られる。

377・378はサヌカイト製の石器である。377は抉りが見られることから石鏃丁と考えられる。378も上下両方に調整が見られ、削器と考えられる。石器は以上の2点で、石材を含めても少量しか出土していない。

遺物の時期は前期にさかのぼるものもあるが、概ね弥生後期後半で、自然河道の最終埋没は古墳時代前期である。

ＳＢ－301

第３遺構面では、旧河道の東岸にかたよって14基のピットを検出した。このうち建物を構成するものはＳＰ－305～ＳＰ－310の６基だけである。この６基が構成する建物をＳＢ－301とした。建物を構成するピットのうちＳＰ－306は旧河道の河岸で検出したが、それ以外の５基についてはＳＲ－301の底面で検出した。桁行２間、梁間１間で、規模は約4.6m×4.4mを測り、床面積は約20㎡である。建物の方位は磁北よりやや東に傾いている。桁側の柱間は約2.3mで、梁側は棟持柱が見られない。旧河道の幅の狭い部分で旧河道に直行して建物が見られることから、堰状の遺構、あるいは橋脚の可能性も指摘できる。ピットから遺物の出土はなく、時期についてはＳＲ－301と同時期かそれ以前と考えられる。



第22図　ＳＢ－301　平・断面図

ＳＤ－301

調査区の南半，ＳＲ－301の西肩より約３m内側に入った部分において旧河道の底面で検出した溝である。ＳＲ－301の西肩に平行する形で検出しており、直線的な溝である。幅約1.2m、深さ約20cm、検出長約28mを測る。埋土は単層で浅いレンズ状の堆積である。遺物は出土しておらず時期は不明である。

ＳＤ－302

調査区の東半中央付近でＳＢ－301を構成するＳＰ－308に切られた状態で検出した溝である。ＳＢ－301とほぼ同一方位をとり、建物の中央に位置するが、両者の関係は不明である。溝は幅約40cm、深さ約10cm、長さ約5.6mを測る。埋土は単層で、断面形状はレンズ状である。遺物は出土しておらず時期は不明である。

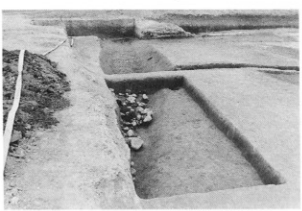
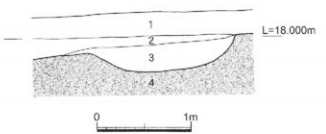


写真10　ＳＤ－303　完掘状況（北から）



1．暗褐色細砂　　3．暗黄灰色細砂
2．暗褐色細砂質シルト　4．灰黄色砂質シルト（地山）

第23図　ＳＤ－303　土層断面図

写真11　ＳＤ－303　土層堆積状況（南から）

ＳＤ－303

調査区の南東端でＳＲ－301の底面において検出した溝である。幅約1.8m、深さ約30cm、検出長約６mを測る。埋土は暗黄灰色細砂の単層で、断面形態はレンズ状を呈する。旧河道の落ち込み部分であるため、西肩がやや下がった状態で検出した。溝の北端では、ＳＲ－301の東岸の微高地上に達しており、旧河道からの取水部の可能性も指摘できる。微高地上では削平を受けており、溝の続きを確認できなかった。溝の底面では拳大の礫が多数検出できたが、規格性を持って配列されたとは考え難く、単に廃棄されたものと考えられる。遺物は弥生後期後半と考えられる小片が出土しているが、詳細な時期は不明である。

第３節　第２遺構面

第５層の灰黄色細砂～礫の洪水砂礫層の上面で検出した遺構面である。遺構面の時期は概ね幕末～明治初期と考えられる。

遺構は南半にかたよって検出した。特に北西半については削平が著しく、遺構を検出することができなかった。検出遺構は土坑10基、井戸２基、溝３条、集石遺構１基、性格不明１基である。遺物は少なく、全遺構でコンテナ５箱分である。

ＳＫ－201

調査区の南端中央で検出した土坑である。平面形態は方形を呈し、一辺約1.2m、深さ約20cmを測る。埋土は単層で、断面形状は逆台形である。遺物は瓦の小片が出土している程度で、詳細な時期は不明である。

ＳＫ－202

調査区の南端中央、ＳＫ－201の西側で検出した土坑である。平面形態は東西に長い楕円形で、長径約1.1m、短径約80cm、深さ約10cmを測る。埋土は単層で、断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

ＳＫ－203

調査区の南西端で孤立した状態で検出した土坑である。平面形態は東西に長い楕円形を呈し、長径約1.9m、短径約1.5m、深さ約10cmを測る。埋土は単層で浅いレンズ状の堆積である。南側がやや深く急に落ち込むのに対して北側はゆるやかに落ち込む。遺物は瓦や陶磁器の小片が若干量出土しているが詳細な時期については不明である。概ね幕末と考えられる。

写真12　ＳＫ－203　土層堆積状況（東から）

ＳＫ－204

調査区の南半中央、ＳＫ－201の北側に隣接して検出した小型の土坑である。平面形態は南北に長い楕円形を呈し、長径約1.1m、短径約90cm、深さ約30cmを測る。埋土は単層で、断面形状は逆台形である。埋土中、特に下層において拳大の礫が多数出土した。遺物は瓦や陶磁器の小片が数点出土したが、詳細な時期については不明である。概ね幕末と考えられる。

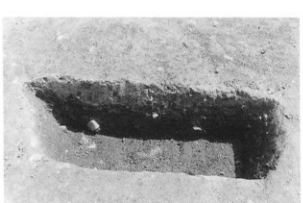


写真13　ＳＫ－204　土層堆積状況（南から）

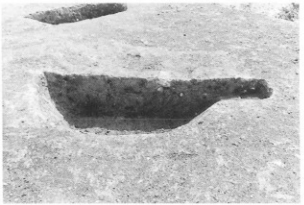


写真14　ＳＫ－205　土層堆積状況（西から）

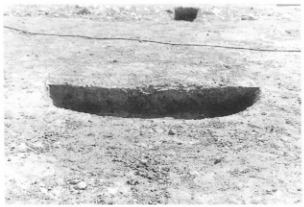


写真15　ＳＫ－206　土層堆積状況（東から）

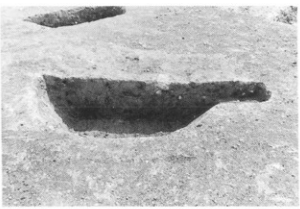
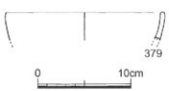


写真16　ＳＫ－207　土層堆積状況（西から）



第24図　ＳＫ－207　出土遺物実測図

ＳＫ－205

調査区の南半中央、ＳＫ－204の西側に隣接して検出した小型の土坑で、規模等もＳＫ－204に類似する。平面形態は南西部分に張り出しをもつ南北に長い不整形な楕円形を呈し、長径約1.1m、短径約80cm、深さ約30cmを測る。北肩はほぼ垂直に落ち込むのに対し、南肩はゆるやかに落ち込み、二段落ちに近い形状である。埋土は単層である。遺物は瓦や陶磁器の小片が少量出土しているが、詳細な時期は不明である。概ね幕末～明治初期と考えられる。

ＳＫ－206

調査区の中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、径約1.2m、深さ約25cmを測る。埋土は単層で、浅いレンズ状の堆積である。遺物は瓦や陶磁器の小片のみで詳細な時期は不明であるが、概ね幕末と考えられる。

ＳＫ－207

調査区の南東部分、ＳＤ－202を切った状態で検出した土坑である。平面形態は長北に長い楕円形で、長径約1.9m、短径約1.5m、深さ約20cmを測る。埋土は単層で、浅いレンズ状の堆積となっている。埋土中には拳大までの礫が多く検出されたが、全体にまんべんなく含まれており、意図的な配置は見られなかった。遺物は多量の瓦の小片が出土しており、その他少量の陶磁器類を合わせるとコンテナ１箱分になる。図示できるものを第24図に掲載した。379は瀬戸美濃系陶器の碗である。内外面とも施釉されている。遺構の時期は遺物から幕末頃と考えられる。

ＳＫ－208

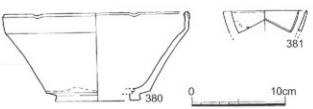
調査区の南東部分、ＳＫ－207の西に隣接し、ＳＤ－202を切った状態で検出した土坑である。平面形態は方形で、一辺約1.9m、深さ約30cmを測る。拳大までの大きさの礫を多く含む埋土は単層で、断面形状は逆台形である。北および西肩が垂直に落ち込むのに対し、南および東肩はややゆるやかに落ち込んでいる。遺物は瓦の小片と陶磁器が数点見られた。

図示できるものを第25図に掲載した。380は産地不明であるが陶器の鉢である。内外面とも緑灰色の釉を施しており、高台無釉とする。破片のため正確には分からないが、口縁部の５方向に片口がつくように復元できる。381は肥前系磁器の碗である。外面に草花文の染付が見られる。遺構の時期は出土遺物から考えて幕末～明治初期と思われる。

写真17　ＳＫ－208　土層堆積状況（西から）

ＳＫ－209

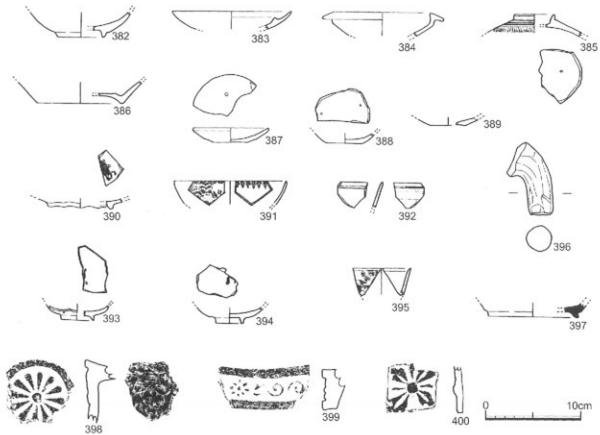
調査区の南東部分、ＳＫ－207・208の北側に隣接する部分で検出した土坑である。平面形態は南北に長い平行四辺形を呈し、長辺約1.9m、短辺約1.8m、深さ約30cmを測る。半大までの大きさの礫を多量に含む埋土は単層で、断面形状は逆台形を呈する。北・南・東肩が急な落ち込みとなっているのに対し、西肩はゆるやかに落ち込んでいる。



第25図　ＳＫ－208　出土遺物実測図

写真18　ＳＫ－209　土層堆積状況（西から）

遺物は瓦・陶磁器の小片などを中心にコンテナ１箱分出土した。図示できたものを第26図に掲載した。382は肥前系陶器の碗である。内外面ともに施釉されている。393は備前焼の灯明皿と考えられる。内外面とも無釉である。384は陶器の蓋である。内外面とも施釉される。産地は不明である。385も陶器の蓋である。内面のみオリーブ黄色の釉が施されている。見込みにはハリ支えの痕跡が残っている。外面は５条の圏線と山形の文様が見られる。産地は不明である。386は陶器の鉢である。上げ底で、内外面とも無釉である。産地は不明である。387・388は京・信楽系陶器の皿である。内面のみ施釉し、見込みにハリ支えの痕跡が見られる。387の口縁部外面の一部にススが付着していることから、灯明皿として使用したと考えられる。389は磁器の皿である。平底で高台を持たない。内外面とも施釉されている。産地は不明である。390は肥前系磁器の皿である。型成形によるもので、高台が波状である。見込みに亀を描いた染付が見られる。391は肥前系磁器の碗である。内外面とも印刷手法による染付が見られる。392は肥前系磁器の碗である。内面２条、外面７条の圏線が見られる。393・394は瀬戸美濃系磁器の碗である。両者とも見込みに染付を有する。395は瀬戸美濃系磁器の盃である。口縁部はやや外反し、内外面とも１条の圏線が施されている。外面の染付は松を描いたと考えられる。396・397は当該期の遺物とは時期差が大きく、混入品と考えられる。396は土鍋の脚部である。板および指によるナデが見られる。397は須恵器の杯である。398～400は瓦である。398は丸瓦の瓦当部で、菊の文様が見られる。399は軒平瓦の瓦当部で、中央に菊、外方に唐草文が見られる。400は軒桟瓦の瓦当部である。遺物は概ね幕末のものと考えられるが、391のように印刷手法を用いたものも若干見られる。このため遺構の埋没時期は明治に入ってからのことと考えられる。



第26図　ＳＫ－209　出土遺物実測図

ＳＫ－210

調査区の東南部分で検出した土坑である。平面形態は南北に長い楕円形を呈し、長径約1.4m、短径約1.2m、深さ約20cmを測る。埋土は単層で、浅いレンズ状の堆積である。埋土中には拳大の礫に混じり瓦片が多く出土した。詳細な時期は不明である。

ＳＤ－201

調査区の中央やや南寄りで検出した溝である。南北に延びた溝は南端で西方へ直角に折れ曲がるが、すぐに細くなりとだえる。これは削平によるもので、特に北側と西側の延長部分は検出できなかった。しかしながら、検出長は南北約16.6m、東西約5.8m、最大幅約1.9m、深さ約20cmを測る。溝の方位は条里制の方位とほぼ同一方向をとり、後述するＳＤ－101・102の西側に平行して検出した。瓦片や礫を多く含む埋土は単層で、断面形状は逆台形を呈する。

写真19　ＳＫ－210　土層堆積状況（西から）

溝の底面では20～30cm、最大で50cmの石を多数検出した。特に溝の北半において多く見られた。石は溝の東西両側の下場付近で平坦面を内側に向けた状態で２列の石列として検出した。石の長辺を内に向けるものもあれば、短辺を内に向けるものもあり統一性が見られない。石列の中には一部２段に積み重ねられたものもあり、当初は全体に複数段積み重ね

ることによって護岸した水路であったと考えられる。石列の裏側、つまり溝の肩では石列の裏込めとして拳大の礫が使用されていた。このような石列は溝の南端やそこから西へ延びる部分においては検出されていないが、削平によるものと考えられ、当初は全体に見られたと考えられる。

また、石列の北端では石を溝幅いっぱいに東西方向に並べた石列を検出した。北端の石列は石の短辺の平坦面を南に向けた状態で並べられている。また、さらに20cm北側でもう一列同様の石列が並べられている。水路の両側の石列と同様、一部2段積みになっている石列も見られた。石列の中央には南北両方の石列にのりかかるように置かれた細長い石も見られた。石列があるため、水路がせきとめられたような状態となっている。

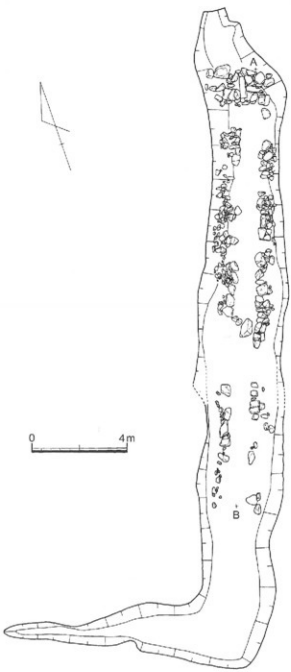
遺物は、瓦片を中心にコンテナ1箱分出土した。図示できるものを第28図に掲載した。401～403はいずれも軒丸瓦の瓦当部である。いずれも巴文が見られる。出土遺物から概ね幕末頃と考えられる。

ＳＤ－202

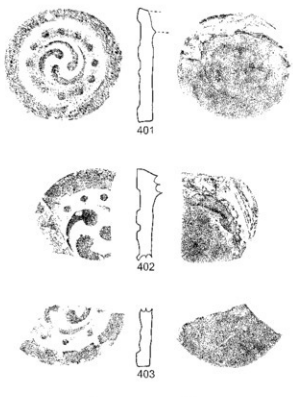
調査区の南東端でＳＫ－207・208に切られた状態で検出した東西方向に延びる溝である。溝の東は調査区の東に逃げ、西側は削平されている。溝の方位は条里地割よりやや東に振っている。検出長は約7.8m、幅約1.2m、深さ約20cmを測る。溝幅は東ほど狭く、東端では40cmとなっている。埋土は単層で、断面形状は西では逆台形を、東ではU字形を呈する。

出土遺物では、瓦、陶磁器、土師質土器がコンテナ1箱分出土した。図示できるものを第29図に掲載した。404は土師質の甕である。大型品で、外面は板ナデ、内面は指頭ナデが見られる。405は肥前系磁器の仏飯具である。脚裾部は無釉である。406は軒丸瓦の瓦当部で、巴文が見られる。遺物の時期から考えて幕末頃の埋没と考えられる。

写真20　ＳＤ―201　完掘状況（北から）



第27図　ＳＤ－201　平面図



第28図　ＳＤ－201　出土遺物実測図

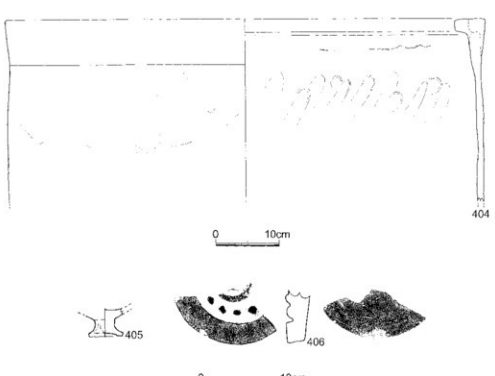
ＳＤ－202

調査区の南東端でＳＫ－207・208に切られた状態で検出した東西方向に延びる溝である。溝の東は調査区の東に遠げ、西側は削平されている。溝の方位は条里地割よりやや東に振っている。検出長は約7.8m、幅約1.2m、深さ約20cmを測る。溝幅は東ほど狭く、東端では40cmとなっている。埋土は単層で、断面形状は西では逆台形を、東ではＵ字形を呈する。

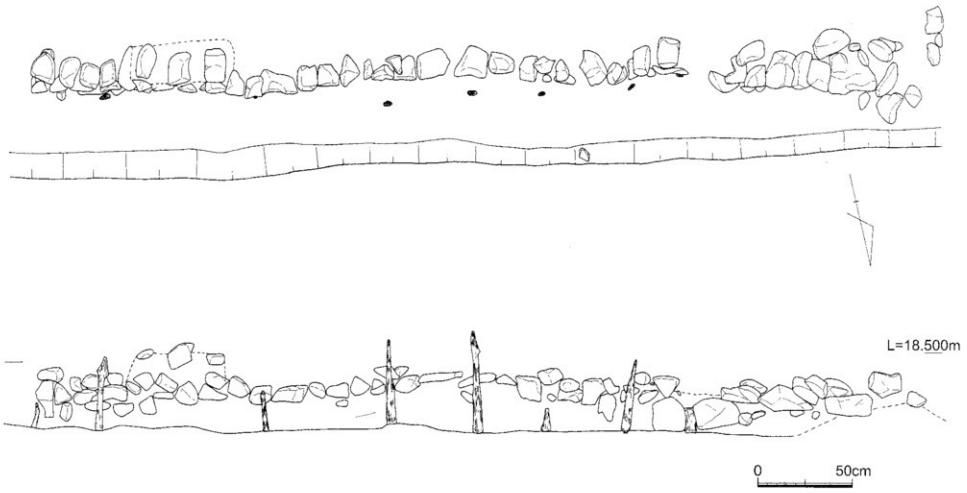
出土遺物では、瓦、陶磁器、土師質土器がコンテナ１箱分出土した。図示できるものを第29図に掲載した。404は土師質の甕である。大型品で、外面は板ナデ、内面は指頭ナデが見られる。405は肥前系磁器の仏飯具である。脚裾部は無釉である。406は軒丸瓦の瓦当部で、巴文が見られる。遺物の時期から考えて幕末頃の埋没と考えられる。

ＳＤ－203

調査区の北東端で検出した東西方向の溝である。溝の方位は条里地割の方位とほぼ同じである。検出



第29図　ＳＤ－202　出土遺物実測図



第30図　ＳＤ－203　石列平・断面図

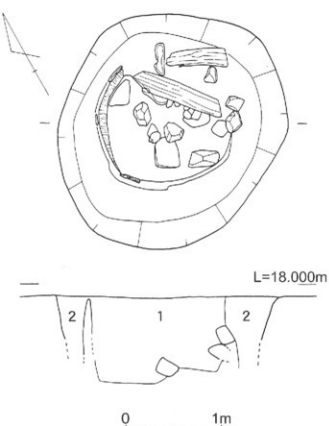
写真21　ＳＤ－203　完掘状況（西から）

写真22　集石遺構検出状況（北から）

長約５m、幅約40cm、深さ約30cmを測る。溝の北側は素掘りであるが、南側は石を積み重ね、その前面に木杭を打ち込み護岸されている。出土遺物は少なく、瓦片のみで詳細な時期は不明である。

集石遺構

調査区の北東部分、ＳＤ－201とＳＤ－203の延長部分交点付近で検出した遺構である。６個の石で構成されており、最大のもので径約30cmの石を使用している。石の上面を平坦にし、６個集合した状態で検出した。平面形態は長方形を呈し、長辺約60cm、短辺約30cmを測る。石で護岸された溝の延長部分にあたることから、削平を受けた溝の残りの部分、あるいは礎石等の用途が考えられるが、詳細は不明である。遺物も出土しておらず、遺構の時期も不明である。



1．灰色シルト質極細砂
　（近現代甘土　径３～５cmの円礫を多く含む）
2．黄灰褐色粗砂

第31図　ＳＥ－201平・断面図

ＳＥ－201

調査区の南半中央で検出した井戸である。平面形態は東西に長い楕円形を呈する。長径約2.5m、短径約2.2m、深さ約１mを測る。木枠の井戸枠は径約1.5mである。東側の残りが悪いが、西側は検出面まで残っている。埋土は井戸枠内と外の２層に分層できる。井戸枠内は３～５cmの円礫を多く含む灰色シルト質極細砂で、近代の耕作土を埋土としている。埋土の上部では挙大の礫や板材が乱雑に廃棄されている。井戸枠の外は黄灰褐色の粗砂である。断面形状は逆台形を呈する。

出土遺物は少なく、瓦の小片と土師質土

器のみである。図示できるものを第32図に掲載した。407は土師質の甕である。口縁部から体部までほぼ垂直になっており、口縁部外面に耳がつく。外面は板ナデのちタテハケ、内面は板ナデのちタテハケ、指頭圧痕が施されている。底部が検出されておらず、中空になるか底部がつくか不明であるが井戸枠として使用していた可能性も考えられる。遺構の時期は、年代観のわかる良好な資料がないため不明であるが、近代の耕作土の埋土と同じ埋土であることから、最終埋没は明治頃と考えられる。

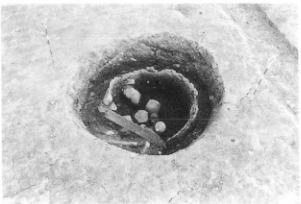
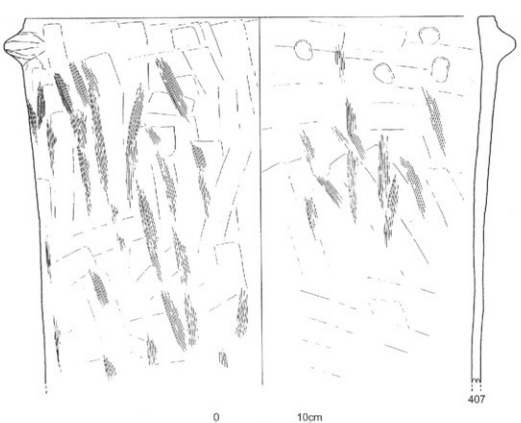


写真23　ＳＥ―201　井戸枠検出状況（北から）

写真24　ＳＥ―201　土層堆積状況（北から）

ＳＥ―202

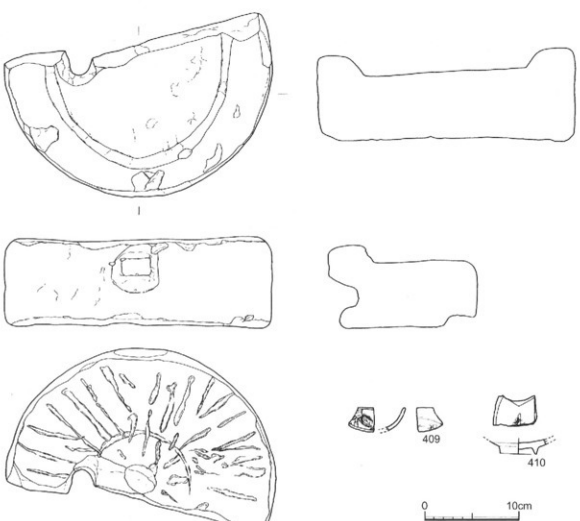
試掘調査時に第４トレンチの中央南壁で検出した井戸で、調査区の南端中央にあたる。一部拡張して調査を行った。平面形態は円形を呈し、径約1.5mを測る。漆喰製の井戸枠は径約80cmである。井戸枠は井戸検出面より60cm下層で検出しており、上面の掘り込みより垂直に落ち込み、井戸枠部分で２段落ちになるような掘削が行われている。



第32図　ＳＥ―201　出土遺物実測図

写真25　ＳＥ―202　完掘状況（北から）

出土遺物中で図示できるものを第23図に掲載した。408は塩基性角礫凝灰岩製の石臼である。409は肥前系磁器の皿である。内外面とも草花文が見られる。410は瀬戸美濃系磁器の碗である。外面に圏線２条、内面に文字が描かれている。この他、瓦の小片が多数出土している。遺構の時期は幕末～明治初期と考えられる。



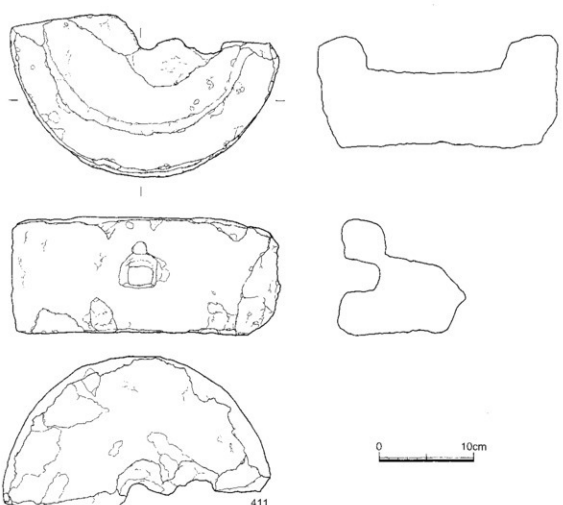
第33図　ＳＥ―202出土遺物実測図

SX－201

調査区の中央で検出した不整形な遺構である。北側の方形部分とその南端から南西方向に延びる溝状部分からなる。方形部分は西側が削平を受けており、平面形態や規模についてははっきりしないが、南北約14m、深さ約20cmを測る。方形部分の東辺および北辺は条里地割の方位とほぼ同一方位をとる。溝状部分は長さ約９m、最大幅約1.8m、深さ約20cmを測る。埋土は単層で、多量の礫と瓦の小片を含む。遺物は瓦片が多く、年代観がわかる資料に欠けるが、概ね幕末頃と考えられる。

その他の遺物

第２遺構面の精査中、第34図に掲載した石臼が出土した。石材は塩基性角礫凝灰岩である。



第34図　第２整地面精査時出土遺物実測図

第４節　第１遺構面

瓦を多量に含む整地層である第４層の灰黄色シルト質極細砂層の上面で検出した遺構面である。上層の第３層は旧陸軍による空港造成によるものと考えられることから、概ね明治～昭和19年の時期が考えられる。

検出遺構はＬ字に流れる溝をはじめ、土坑５基、ピット12基、性格不明11基である。遺物は瓦片等をコンテナ30箱分出土した。

写真26　ＳＫ－101　検出状況（西から）

写真27　ＳＫ－102・103　検出状況（西から）

写真28　ＳＫ－104　検出状況（西から）

ＳＫ－101

調査区中央やや東寄りで検出した土坑である。平面形態は東西に長い長方形を呈し、長辺約1.2m、短辺約60cm、深さ約20cmを測る。埋土中には拳大の礫と瓦片を多く含む。詳細な時期は不明である。

ＳＫ－102

調査区中央で検出した土坑である。平面形態は南北に長い楕円形を呈し、長径約１m、短径約70cm、深さ約20cmを測る。ＳＫ－101同様、埋土中に瓦と礫を多く含む。詳細な時期は不明である。

ＳＫ－103

調査区中央、ＳＫ－102の北側に隣接して検出した土坑である。平面形態は南北に長い楕円形を呈し、長径約70cm、短径約40cm、深さ約10cmを測る。他の土坑同様、瓦と礫を多く含み、時期は不明である。

ＳＫ－104

調査区の北東部で検出した円形の土坑である。径約1.1m、深さ約30cmを測る。埋土中には瓦と礫を多く含む。詳細な時期は不明である。

ＳＫ－105

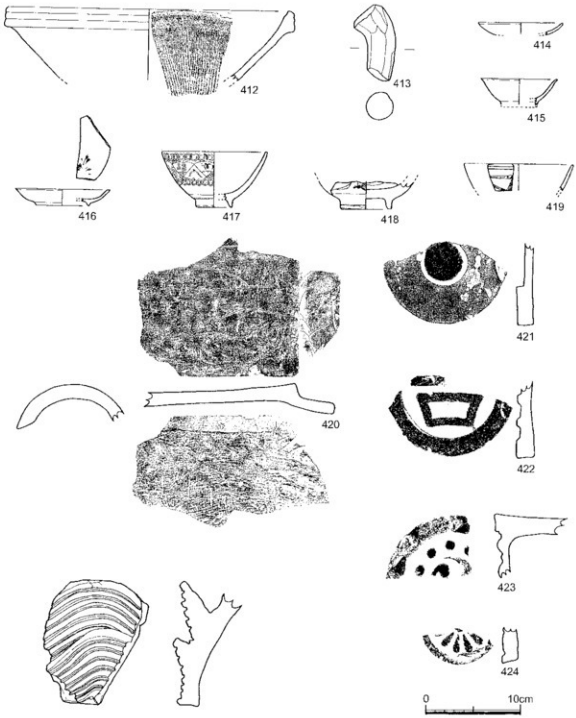
調査区の北東端で検出した東西に長い楕円形の土坑である。長径約1.4m、短径約80cm、深さ約20cmを測る。瓦と礫を多く含み、時期は不明である。

ＳＤ－101

調査区の西から南、南から北へとＬ字状に流れる溝が検出されており、西から南へ流れる方をＳＤ－101、南から北へ流れる方をＳＤ－102とした。方位は

条里制の方位とほぼ同じ方位をとる。ＳＤ－101は検出長約11.5m、幅約1.3m、深さ約35cmを測る。埋土は２層に分層できる。上層は灰黄色シルト質極細砂、下層は礫を多量に含む褐灰色シルト質極細砂である。溝の南側底面では木杭が打ち込まれている。

出土遺物はコンテナに５箱分で、図示できるものを第35図に掲載した。412は瓦焼の捏鉢である。413は土鍋の脚部である。414は土師器の小皿である。415は瀬戸美濃系磁器の盃である。416は瀬戸美濃系磁器の皿である。内面に色絵による草花文が見られる。417～419は肥前系磁器の碗である。417の外面は印刷



第35図　ＳＤ－101　出土遺物実測図

写真29　ＳＤ－101　上層掘削状況（東から）

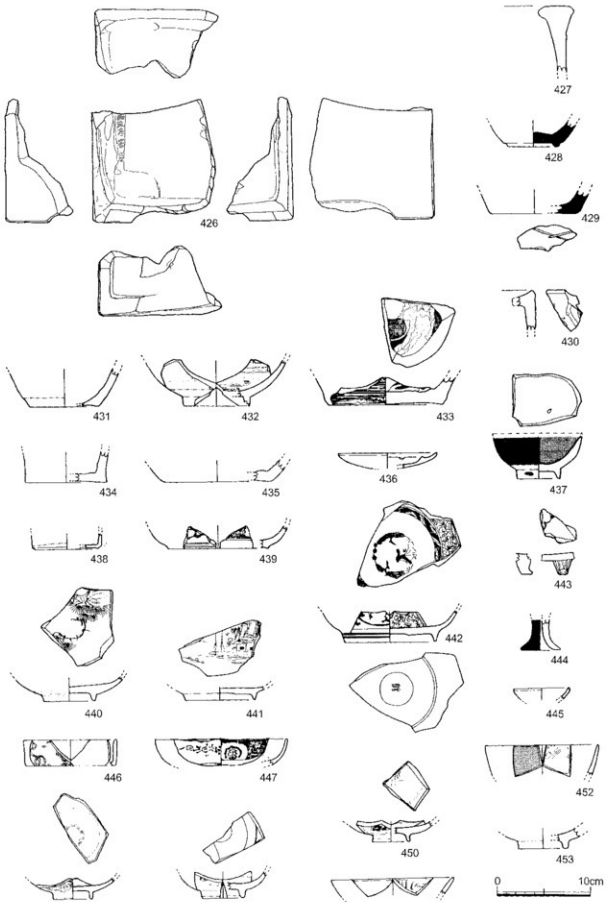
写真30　ＳＤ－101　完掘状況（東から）

写真31　ＳＤ－102土層堆積状況（南から）

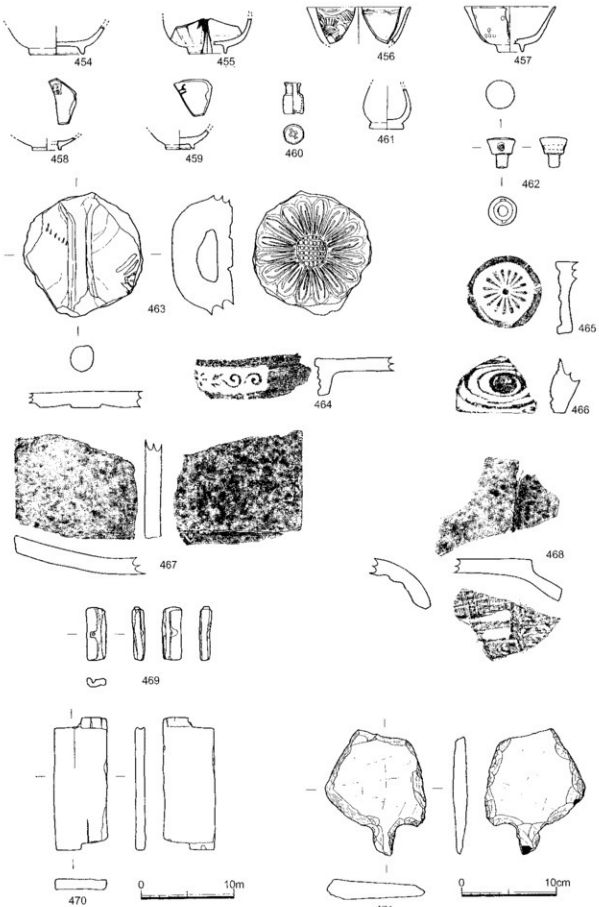
手法による染付が見られる。420～425は瓦である。422の軒丸瓦の瓦当面には吉国寺の「吉」の字が見られる。

ＳＤ－102

ＳＤ－101の続きと思われ、規模等はＳＤ－101と同じである。東側底面に木杭が見られる。出土遺物はコンテナに５箱分で、図示できるものを第36・37図に掲載した。426は土師質の竈である。427は土師質の甕である。428・429は須恵器で混入品と考えられる。429底面にはヘラ記号が見られる。430は瀬戸美濃系陶器の鉢である。431は陶器の鉢で底部無釉である。432・433は肥前系陶器の鉢である。高台無釉で内外面に刷毛目が見られる。434・435は備前焼の鉢である。436は備前焼の灯明皿である。437は肥前系陶器の碗である。外面鉄釉、内面青磁釉で高台無釉とする。見込みにハリ支えの痕跡が見られる。438～452は肥前系の磁器である。438は花生で底部無釉とする。439は鉢である。内外面に草花文が見られる。440は皿で、内面に松を描いた染付、外面に圏線が３条見られる。441・442は鉢で、蛇ノ目凹形高台である。443は鉢の脚部で獣脚である。444は仏飯具で、外面瑠璃釉を施す。445は紅皿である。446は段重で外面は印刷である。447は皿で内外面とも印刷である。448～452は碗である。453～455は磁器の碗で産地不明である。456～459は瀬戸美濃系の磁器である。456・457は端反りの碗である。457は陰刻である。458・459は盃である。458の見込みには「□□角力」の文字が見られる。460はガラスピンで底面に菱形の陽刻が見られる。461は底部に資生堂のマークが見られることから化粧ピンである。462は醤油差しの注口である。463～468は瓦である。469は赤色の石に金具を巻きつけたもので、火打ち石の着火具と考えらえる。470は板材であ



第36図　ＳＤ－102　出土遺物実測図①



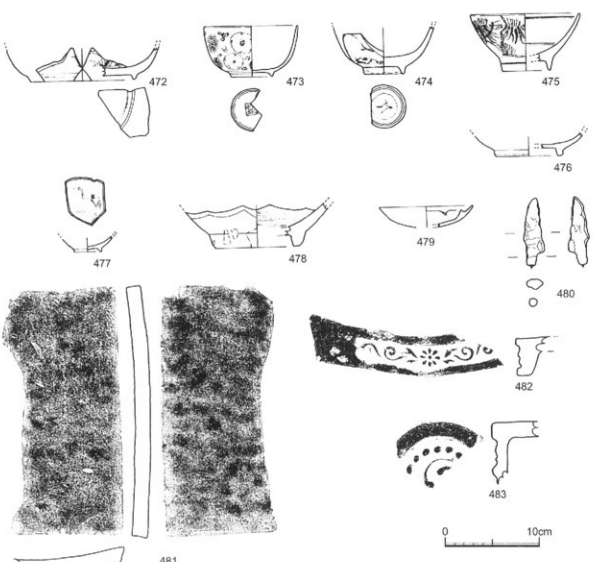
第37図　ＳＤ－102　出土遺物実測図②

る。471は弥生時代の石錐で、混入品である。

また、ＳＤ－101・102のコーナー付近で出土した遺物を第38図に掲載した。472は肥前系磁器の鉢である。内面に草花文、外面と高台内に圏線が見られる。473～475は肥前系磁器の碗である。473の外面はコンニャク印判である。474・475の外面は草花文が見られる。476は京・信楽系陶器の鉢である。477は瀬戸美濃系磁器の盃で、内面に鶴の色絵が見られる。478は肥前系陶器の鉢である。刷毛目が見られる。479は備前焼の灯明皿である。480は鉄製の小刀である。481～483は瓦である。

各遺物の時期は幕末のものが多く見られるが、印刷手法を用いた明治以降のものも多く見られ、中に

写真32　ＳＤ－102　完掘状況（南から）



第38図　ＳＤ－101・102コーナー部出土遺物実測図

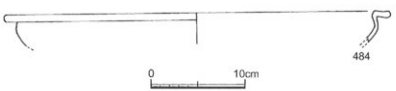
はガラス製のビンや化粧ビン等も見られる。遺構の最終埋没は昭和19年と考えられる。

ＳＰ出土遺物

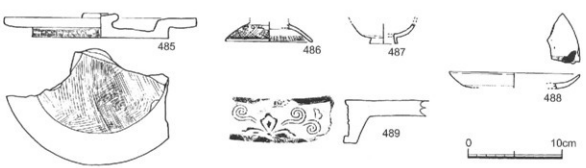
第１遺構面では13基のピットを検出した。土坑同様、ピットの埋土中には多量の瓦と礫を含む。建物を構成するピットはない。

写真33　ＳＰ－101　検出状況（西から）

ピットの出土遺物のうち図示できたものを第39・40図に掲載した。484はＳＰ－108出土の焙烙である。485～489はＳＰ－113出土遺物である。485は土師質の蓋である。内面にハケが見られる。486は磁器の蓋である。487は磁器の盃である。488は肥前系磁器の皿である。489は軒平瓦である。遺物の時期は幕末頃と考えられるが、遺構面の時期を考えると、遺物の方が若干古い様相を示す。



第39図　ＳＰ－108　出土遺物実測図



第40図　ＳＰ－113　出土遺物実測図

写真34　調査区西端段差（南から）

調査区西端段差

調査区の北西端で高低差約10cmの段差を検出した。検出長は約6.8mで、西が高く、東が低くなっている。方位はＳＤ－102とほぼ同一方位をとり、条里制の方位と同じである。段差の西側の高い部分が道路状の遺構であると考えられる。

ＳＸ－101

調査区中央南部で検出した不整形の遺構である。埋土中には瓦と礫を多量に含む。出土遺物の大半は瓦にかたより、コンテナ約10箱分が出土した。その一部を第41～48図に掲載した。490～495は軒平瓦、496～498は軒丸瓦、499・500は平瓦、501～513は丸瓦である。丸瓦には釘穴のあるものと無いものの２種類が見られる。詳細な時期を判断することのできる遺物は出土していない。

写真35　ＳＸ－101　検出状況（南から）

ＳＸ－102

ＳＸ－101の北側に隣接した状態で検出した不整形の遺構である。ＳＸ－101同様、埋土中に瓦と礫を多く含む。出土遺物は瓦だけで、詳細な時期は不明である。

ＳＸ－103

ＳＸ－102の南側に隣接して検出した不整形な遺構である。他のＳＸ同様、埋土中に瓦と礫を多量に含む。遺物は瓦のみで、詳細な時期は不明である。

ＳＸ－104

ＳＸ－103の西側に隣接して検出した不整形な遺構である。埋土中には瓦と礫を多量に含む。詳細な時期は不明である。

ＳＸ－105

調査区の中央で検出した不整形な長方形を呈する遺構である。埋土中には瓦と礫を多量に含む。詳細な時期は不明である。

ＳＸ－106

ＳＸ－105の北西で検出した不整形な遺構である。埋土中には瓦と礫を多量に含む。詳細な時期は不明である。

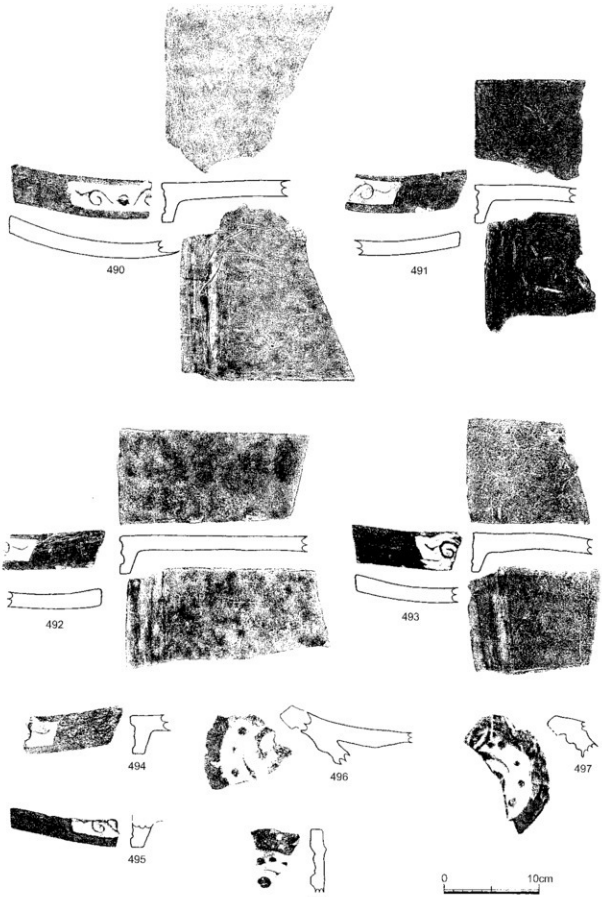
ＳＸ－107

ＳＸ－106の西側で検出した不整形な遺構である。埋土中には瓦と礫を多量に含む。詳細な時期は不明である。

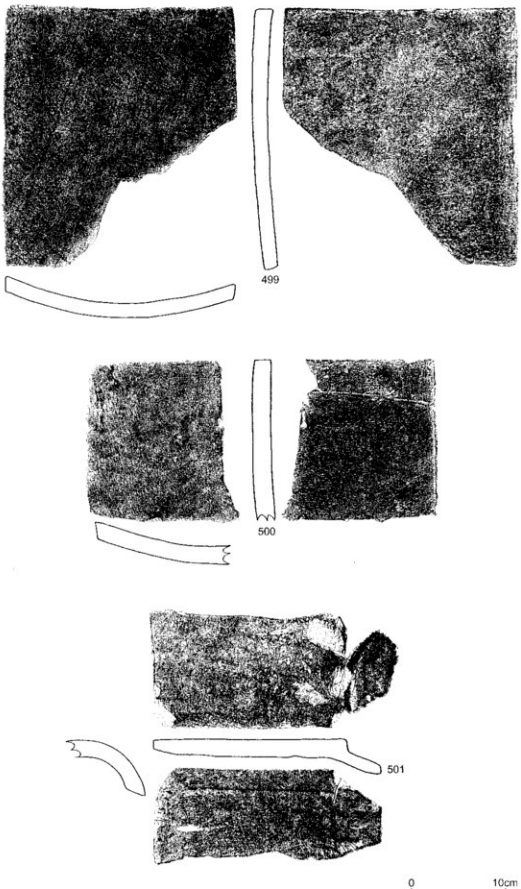
ＳＸ－108

調査区の北端中央で検出した不整形な遺構である。埋土中には瓦と礫を多量に含む。瓦しか出土しておらず、詳細な時期は不明である。

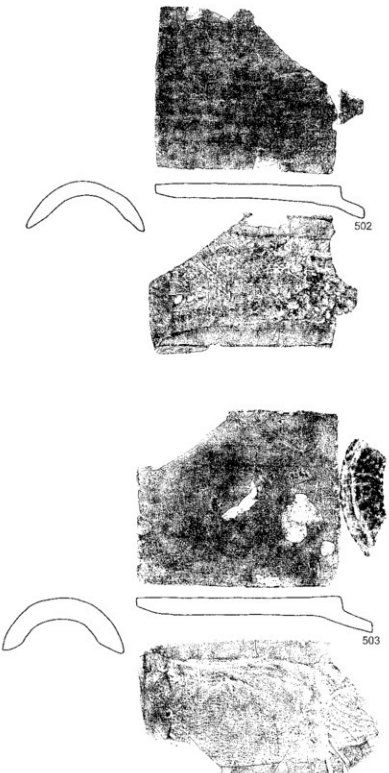
写真36　ＳＸ－106　検出状況（東から）



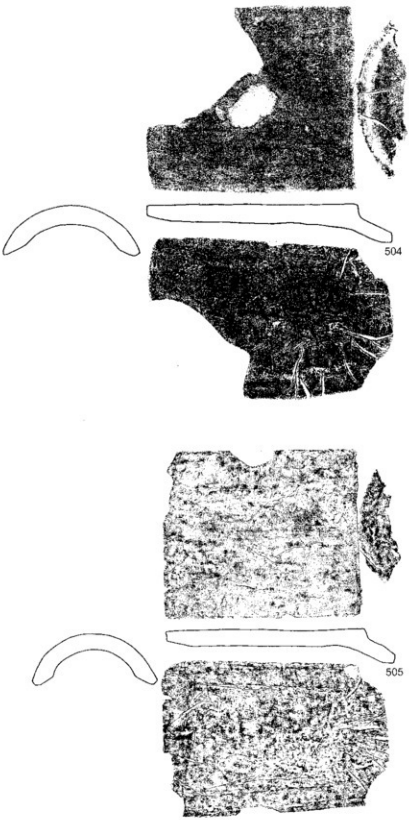
第41図　ＳＸ－101　出土遺物実測図①



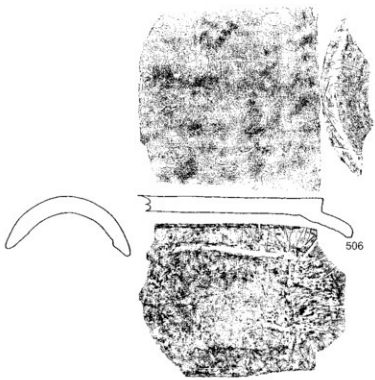
第42図　ＳＸ－101　出土遺物実測図②

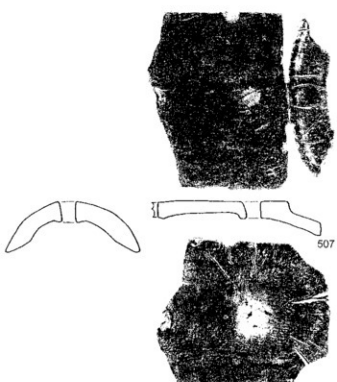


第43図　ＳＸ－101　出土遺物実測図③

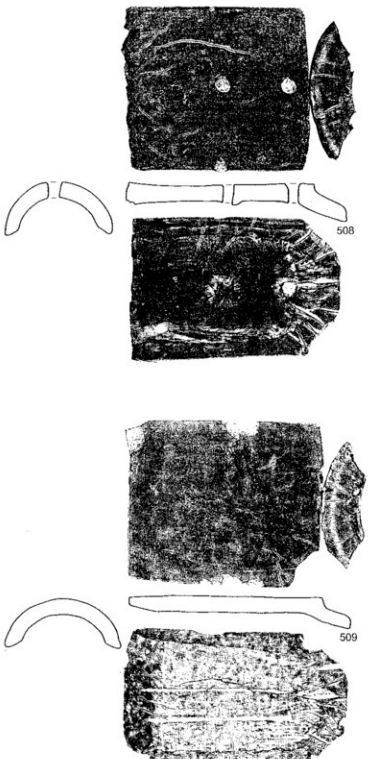


第44図　ＳＸ－101　出土遺物実測図④

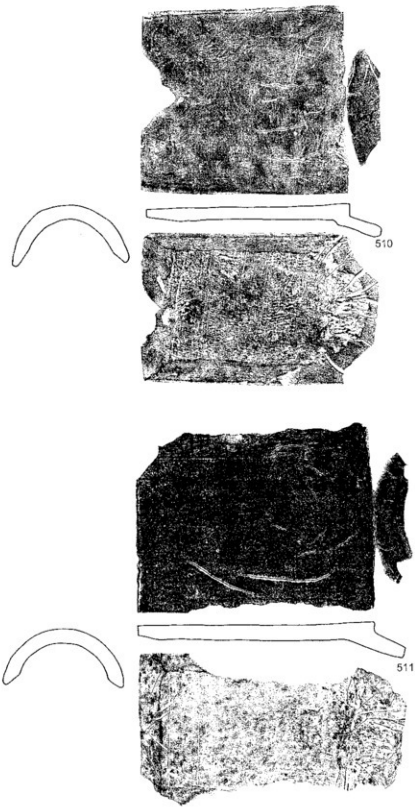




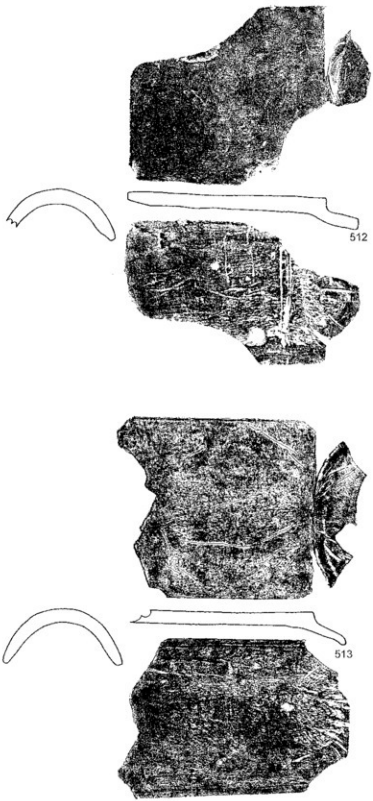
第45図　ＳＸ－101　出土遺物実測図⑤



第46図　ＳＸ－101　出土遺物実測図⑥



第47図　ＳＸ－101　出土遺物実測図⑦



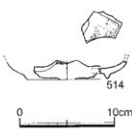
第48図　ＳＸ－101　出土遺物実測図⑧

ＳＸ－109

ＳＸ－107の西側に隣接して検出した南北に細長い溝状の遺構である。埋土中には多量の瓦と礫を含む。詳細な時期は不明である。

ＳＸ－110

調査区の北西部分で検出した円形の遺構である。埋土中には瓦と礫を多量に含む。詳細な時期は不明である。



第49図　ＳＸ－111
出土遺物実測図

ＳＸ－111

調査区の北西部分、ＳＸ－110の西側に隣接して検出した円形の遺構である。規模等はＳＸ－110とほぼ同じである。埋土中には瓦と礫を多量に含む。出土遺物のうち図示できたものを第49図に掲載した。514は肥前系磁器の皿である。19世紀のものと考えられる。遺構の埋没はもう少し時期が下ると思われる。

第４章　第２次調査の成果

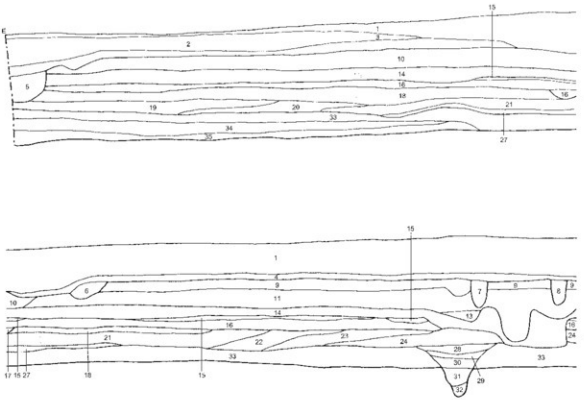
第１節　調査区の概要と基本層序

第２次調査では南壁と西壁において土層観察を行った。ここでは西壁の土層断面で基本層序を紹介する。西壁では全部で28層の堆積が見られたが、大別して第１～第９の９層に分層できる。第１層は図面上の１・２層がこれにあたる。花崗土で、平成６年の老人ホーム建設時の盛土であると考えられる。第２層は耕作土で、図面上の３・４層がこれにあたる。平成５年までの耕作土である。第３層は床土で、５・６層がこれにあたる。第４層は７層にあたり花崗土の盛土である。戦後の造成土と考えられる。第５層は８層にあたり、灰色のシルト質極細砂層である。陸軍による空港造成面と考えられる。９～24層のシルト～礫層は洪水による堆積と考えられ、第６層とした。第７層は25・26層にあたり、灰色粘質シルト層である。この上面で溝を検出していることから、第７層上面を第１遺構面とした。第８層は27層にあたり、オリーブ褐色の粘質シルト層である。この上面からも溝等の遺構が検出されていることから、第８層上面を第２遺構面とした。第9層は28層にあたり、灰色の粗砂～礫層で、遺物を包含しないことから地山と考えた。地山上面では竪穴住居をはじめ多数の遺構を検出していることから、第９層上面を第３遺構面としてとらえた。

写真37　調査区西壁土層堆積状況（南から）

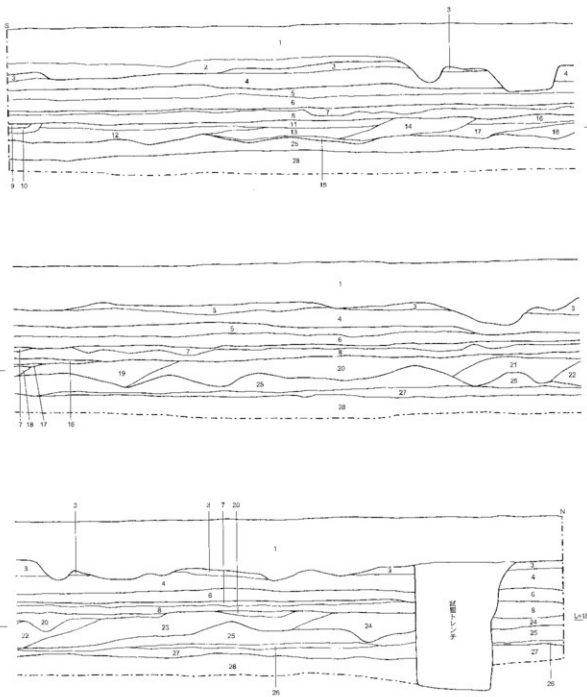
各遺構面の具体的な時期であるが、第１遺構面については出土遺物から江戸時代後半の18世紀後半～19世紀前半と考えられる。第２遺構面は遺物が極めて少なく、瓦泉と思われる破片が見られる程度で、詳細な時期は不明であるが、概ね古代と考えられる。第３遺構面では竪穴住居を検出しており、埋土中の遺物から弥生後期後半のものと考えられる。

第１・第２遺構面とも遺物は極めて少なく、出土遺物の大半は第３遺構面にかたよっている。全体でコンテナ３箱分の遺物が出土している。



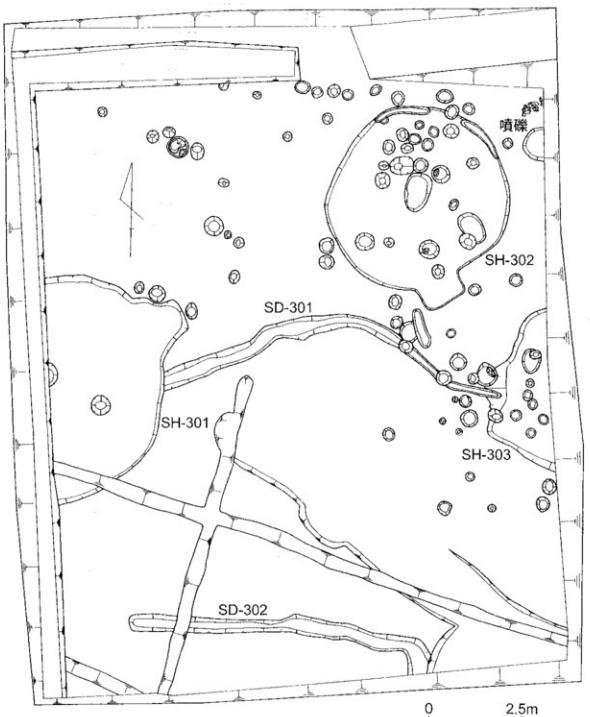
1.	花崗土			
2.	耕作土			
3.	花崗土			
4.	花崗土			
5.	2.5Y	4／1	黄灰	粘質シルト
6.	2.5Y	4／1	黄灰	粘質シルト
7.	5Y	4／1	灰	シルト質極細砂
8.	5Y	4／1	灰	シルト質極細砂
9.	耕作土			
10.	耕作土			
11.	耕作土			
12.	2.5Y	3／1	黒褐	シルト質極細砂
13.	2.5Y	4／1	黄灰	粗砂～礫
14.	5Y	6／1	灰	砂混粘質土
15.	花崗土			
16.	N	4／0	灰	シルト質極細砂
17.	2.5Y	5／1	灰	シルト質極細砂
18.	5Y	4／1	灰	シルト質極細砂
19.	2.5Y	3／1	黒褐	粗砂～礫
20.	10G	4／1	暗緑灰	シルト質極細砂
21.	2.5Y	5／2	暗灰黄	粗砂～礫
22.	5Y	3／1	オリーブ黒	粗砂～礫（やや粘質）
23.	5Y	5／2	灰オリーブ	シルト質極細砂
24.	2.5Y	6／2	灰黄	シルト質極細砂
25.	2.5Y	2／1	黒	粘土
26.	2.5Y	5／3	黄褐	シルト
27.	10YR	1.7／1	黒	粘土
28.	2.5Y	2／1	黒	粘土
29.	2.5Y	6／1	黄灰	砂混粘土
30.	2.5Y	6／2	灰黄	細砂～粗砂
31.	2.5Y	4／1	黄灰	粗砂～礫
32.	7.5Y	6／1	灰	粘土
33.	2.5Y	6／1	黄灰	粘質シルト
34.	2.5Y	4／2	暗灰黄	粗砂～礫
35.	2.5Y	5／2	暗灰黄	砂混粘質土
36.	5Y	5／1	灰	粗砂～礫

第50図　南壁土層断面図

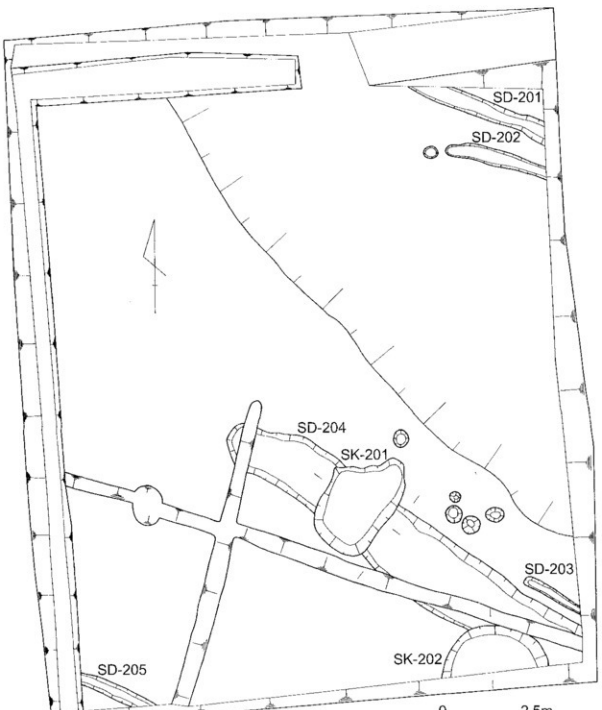


1.	花崗土			15.	10YR	1.7／1	黒	粘土
2.	花崗土			16.	5Y	5／2	灰オリーブ	シルト質極細砂
3.	耕作土			17.	2.5Y	6／2	灰黄	シルト質極細砂
4.	耕作土			18.	5Y	4／1	灰	シルト質極細砂
5.	2.5Y	3／1	黒褐	シルト質極細砂	19.	2.5Y	4／2	暗灰黄	粗砂～礫
6.	5Y	4／1	灰	砂混粘質土	20.	2.5Y	5／1	黄灰	粗砂～礫
7.	花崗土				21.	5Y	5／1	灰	粗砂～礫
8.	N	4／0	灰	シルト	22.	2.5Y	4／2	暗灰黄	粗砂～礫
9.	2.5Y	6／2	灰黄	シルト質極細砂	23.	2.5Y	4／1	黄灰	粗砂～礫
10.	2.5Y	2／1	黒	粘土	24.	2.5Y	3／2	黒褐	粗砂～礫
11.	2.5Y	6／4	にぶい黄	シルト	25.	2.5Y	6／1	黄灰	粘質シルト
12.	2.5Y	5／3	黄褐	シルト	26.	5Y	4／1	灰	粘質シルト
13.	5Y	4／1	灰	シルト質極細砂	27.	2.5Y	4／3	オリーブ褐	粘質シルト
14.	5Y	3／1	オリーブ黒	粗砂～礫（やや粘性）	28.	5Y	5／1	灰	粗砂～礫

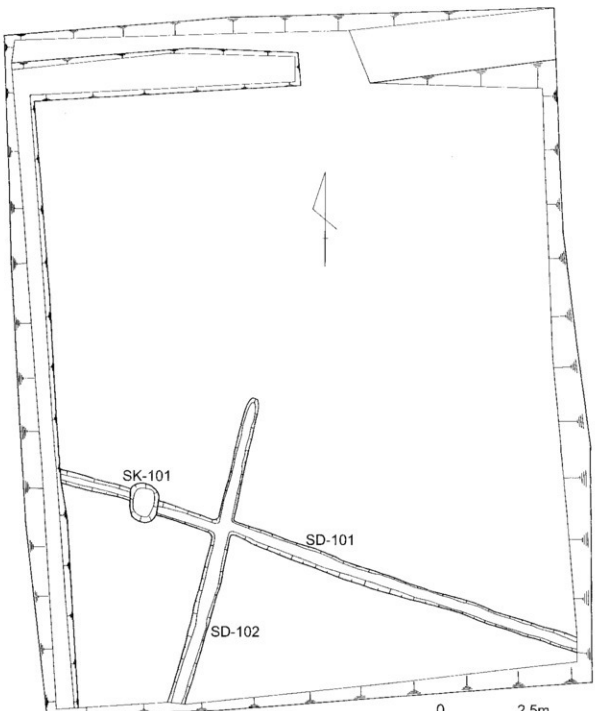
第51図　西壁土層断面図



第52図　第３遺構面平面図



第53図　第２遺構面平面図



第54図　第１遺構面平面図

第２節　第３遺構面

地山の灰色粗砂～礫層上面で検出した遺構面である。遺構面の時期は弥生後期後半頃と考えられる。検出遺構は竪穴住居３棟をはじめ、溝２条、ピット多数である。また、調査区の北東隅で大地震に伴う液状化現象の痕跡である噴礫を検出した。遺物は弥生土器を中心に、石器類数点も含めコンテナ約２箱分の出土量であった。

写真38　第３遺構面完掘状況（南から）

ＳＨ－301

調査区の西端中央で検出した竪穴住居である。西半が調査区外にのびるため詳細は不明であるが、平面形態は円形を呈すると思われ、東側に突出部をもつ。検出部分での直径は南北で約６ｍを測り、深さは最深部で約10cmである。埋土は黒褐色の砂混粘質土の単層で、断面形態は浅い逆台形を呈する。埋土中には多量の炭を含んでいる。内部構造としては壁溝は見られず、柱穴になると考えられるピットを２基検出した。両ピットとも径約50cm、深さ約20cmを測る。炉跡等は検出されていない。

竪穴住居の中央やや南寄りの床面直上では弥生土器をはじめとする遺物を密集した状態で検出した。遺物のうち図示できたものを第56・57図に掲載した。515～524は甕である。515・516は肩部にふくらみをもたない直線的な形態である。体部内面に指頭圧痕および指頭ナデが見られる。517・518はやや粗製の甕で、接合痕をよく残している。口縁は端部に向かって細くなっており、517はわずかに面をもつが、518は面をもっていない。体部外面は粗いタテハケが施されている。517の内面はヨコ方向の板ナデである。519・520はやや小型の甕で、水平に開く口縁部は端部をややつまみ上げる。520の体部外面はタテハケ、体部内面は指頭圧痕である。521～524はいわゆる下川津Ｂ類土器およびそれに類似する形態をもつものである。口縁部から頸部にかけての破片であるため調整が不明なものが多いが、523の体部内面には指頭圧痕が見られる。525は甕または広口壺の体部と考えられる。外面タテハケのち下半のみ粗雑なタテヘラミガキ、内面はヨコヘラケズリのち上半のみ指頭圧痕が見られる。体部最大径からやや下がった位置に焼成前の丸い穿孔が１箇所認められる。526～538は長頸壺または広口壺の口縁から頸部である。いずれも磨滅が著しく調整は不明であるが、533・536の頸部外面にタテハケがわずかに残る。539～551は底部

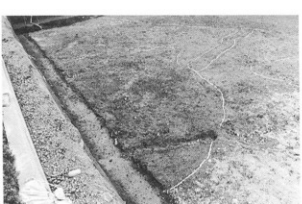
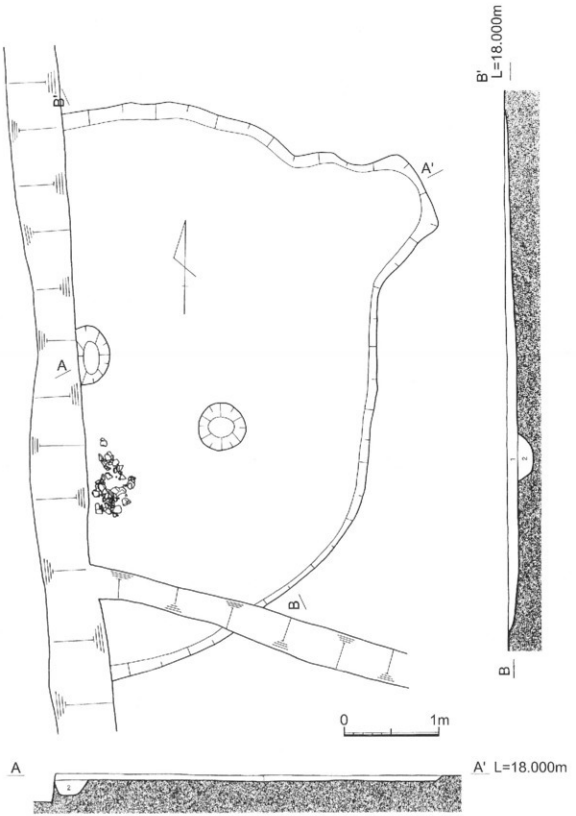


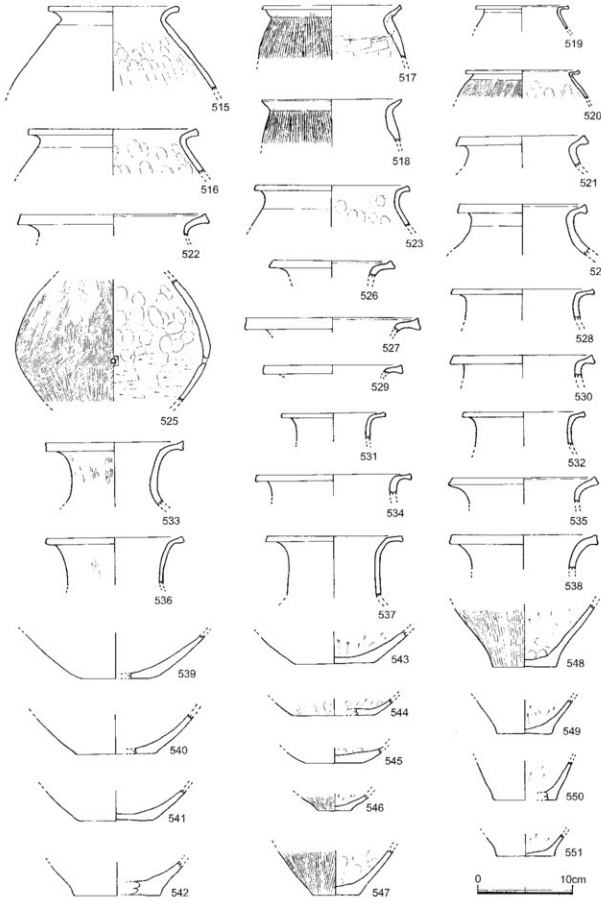
写真39　ＳＨ－301　検出状況（南から）

写真40　ＳＨ－301　完掘状況（南から）

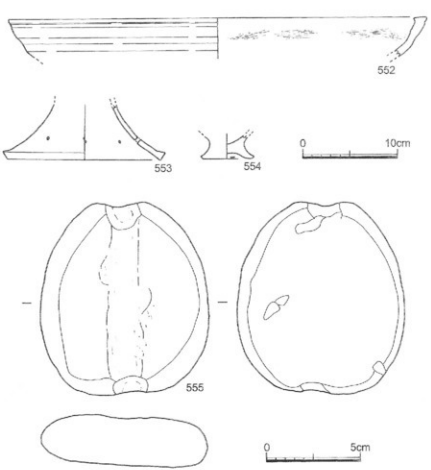


1．10ＹＲ　3／1　黒褐　砂混粘土（炭多く含む）
2．10ＹＲ　2／1　黒　　砂混粘土

第55図　ＳＨ－301　平・断面図



第56図　ＳＨ－301　出土遺物実測図①



第57図　ＳＨ－301　出土遺物実測図②

である。その中でも傾き具合いから539～545は壺、546～551は甕と考えられる。壺の底部は磨滅が著しく、調整不明のものが多いが、543・544の内面はタテ方向のヘラケズリが見られる。また544の外面にはタテヘラミガキ、545の内面には指頭圧痕がわずかに残っている。甕の底部はすべて内面タテヘラケズリが認められる。その中で547・548だけはケズリのち指頭圧痕である。外面は546～548にタテヘラミガキが見られる。552は大型の鉢である。調整は外面磨滅のため不明であるが、内面にヨコハケが見られる。口縁部外面には２条の凹線文が見られる。563は高杯の脚部である。破片であるため復元となるが、裾部の円形スカシは８方向にあったと考えられる。554は脚台である。内外面とも磨滅のため調整は不明であるが、底面に籾の圧痕が見られる。

写真41　ＳＨ－301　土器出土状況（南から）

石器も１点だけであるが出土している。555は石錘である。石材は砂岩である。平面形態は楕円形を呈し、その長辺の両端を打ち欠き、さらに片面に浅い溝状の凹みをもつ。裏面は平坦である。

出土遺物は竪穴住居全体でコンテナ１箱余りにのぼった。出土遺物の時期から弥生後期後半頃の竪穴住居と考えられる。

ＳＨ－302

調査区の北東部分で検出した竪穴住居である。平面形態はやや不整形な円形で、五角形に近い形態を呈する。また、南側に方形の突出部をもつ。規模は南北約4.6m、東西約4.9mを測り、突出部分は幅約1.1m、長さ約70cmである。削平が著しく、深さは最深部でも５cmたらずである。埋土は黒褐色砂混粘質土の単層で、断面形態は浅いレンズ状の堆積である。

住居内の内部構造であるが、北壁部分には幅約20cm、深さ約5cmの壁溝が断続的ではあるが見られる。壁溝の埋土は褐灰色砂混粘質土で、断面形状は逆台形である。ピットも多数検出されている。しかしながら、どのピットが主柱穴を構成するのかは不明である。いずれのピットも深さ20～30cmと比較的浅く、埋土は黒褐色砂混粘質土である。また、住居の中央に南北方向に長い楕円形を呈する土坑が見られた。長径約1.1m、短径約60cm、深さ約20cmを測る。埋土はにぶい褐色の粘土の単層で、断面形状は逆台形を呈する。埋土中に炭と焼土を多量に含むことから、この土坑が炉跡であったと考えられる。ベッド状遺構等の施設は見られない。

写真42　ＳＨ－302　完掘状況（北から）

出土遺物は少なく、ビニール袋に１袋のみであった。特に土器は小片しか出土しておらず、図示できるものは１点もなかった。石器のみであるが図示できるものを第59図に掲載した。556は柱状片刃石斧である。石材は緑泥片岩である。557はサヌカイト製のスクレイパーで、片面に自然剥離面を残している。出土遺物が少なく、良好な資料に欠けるが、土器の小片中に下川津Ｂ類土器の胎土をもつものがあることや、周辺で出土する遺物が弥生後期後半にかたよっていることから、ＳＨ－302についても弥生後期後半の時期が考えられる。

ＳＨ－303

調査区の東端中央部分でＳＤ－301に切られた状態で検出した遺構である。遺構の東半は調査区外に延びているため詳細は不明であるが、規模が大きく、底面が平坦であり、内部にピットが見られることから竪穴住居とした。遺構の規模は、南北約4.4m、東西の検出長約2.2mを測り、方形の平面形態になると予想される。埋土は灰黄褐色の砂混粘質土の単層で、深さ約10cmを測り、断面形状は浅い逆台形である。

写真43　ＳＨ－303　完掘状況（南から）

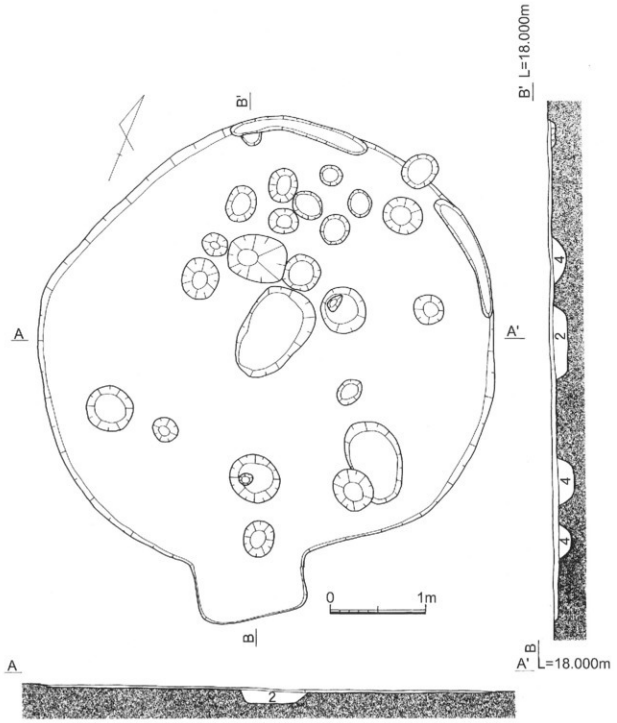
内部構造としてはピットが７基見られただけで、壁溝や炉跡は検出していない。ピットについてもどのピットが主柱穴になるのかは不明である。

遺物は１点も出土しておらず、遺構の時期は不明であるが、切り合い関係からＳＨ－301より先行すると考えられる。

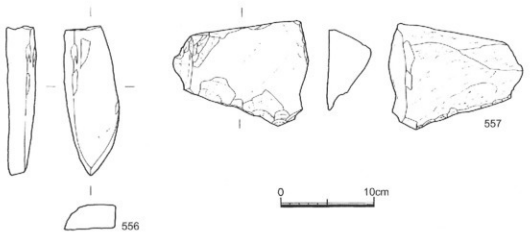
ＳＤ－301

調査区の中央部分、ＳＨ－301とＳＨ－303の間で検出した東西方向に流れる溝である。溝の西側はＳＨ－301に切られ、東側はＳＨ－303を切っており、中央部分は北側に蛇行している。検出長は約8.9m、最大幅約50cm、深さ約10cmを測る。埋土は黒褐色砂混粘質土の単層で、断面形状はＵ字である。

遺物は弥生土器の小片が出土したのみで、詳細な時期は不明であるが、弥生後期後半に位置づけられる。



第58図　ＳＨ－302　平・断面図



第59図　ＳＨ－302　出土遺物実測図

ＳＤ－302

調査区の南部で検出した溝である。東西方向に流れる溝は調査区南東端で南に向きを変えて調査区外に延びている。検出長約8.8m、最大幅約50cm、深さ約20cmを測る。埋土は黒褐色砂混粘質土の単層で、断面形状はＵ字形である。

遺物は弥生土器の小片が出土したのみで、詳細な時期は不明であるが、弥生後期後半に位置づけられる。

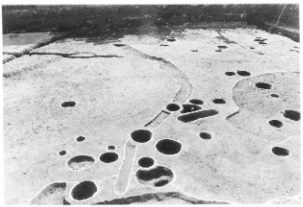


写真44　ＳＤ－301　完掘状況（東から）

ＳＫ－301

調査区の北東端、ＳＨ－302の東側に隣接して検出した土坑である。東半が調査区外に延びているため詳細は不明であるが、平面形態は円形を呈すると思われる。南北径約90cm、東西検出長約55cm、深さ約10cmを測る。埋土は黒褐色砂混粘質土の単層で、断面形状は逆台形を呈する。

遺物は１点も出土しておらず、時期は不明である。

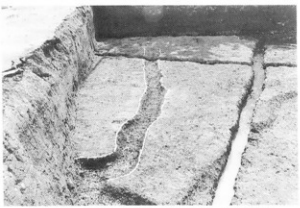
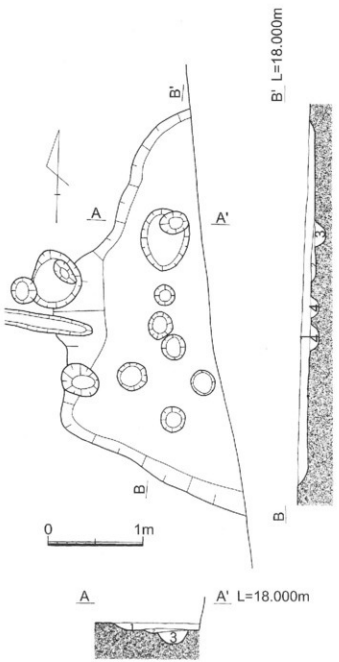


写真45　ＳＤ－302　完掘状況（東から）

噴礫

調査区北東端で検出した液状化の痕跡である。北東部分は調査区外へ延びるため不明であるが、礫脈の検出長約1.8m、幅約80cmを測る。地山の下層の砂礫層から噴き上がったもので、高さは90cmである。噴き上がった礫は拳大のものが多いが、最大径約40cmを測る。噴礫の上面はやや盛り上がっており、礫が寝ていることから、あまり削平を受けていない状態で上層の堆積があったことがうかがえる。

遺構との切り合いや供伴する遺物がないため時期は不明である。遺構面上での削平が少ないことから、第３遺構面廃絶期から第２遺構面形成期の間であり、具体的には弥生後期終末～古代の中で時期を検討したい。



1．10YR　4／2　灰黄褐　砂混粘質土
2．2.5Y　5／1　黄灰　砂混粘質土
3．10YR　4／1　褐灰　砂混粘質土
4．10YR　3／2　黒褐　砂混粘質土

第60図　SH－303　平・断面図

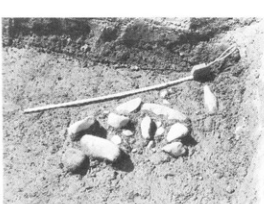


写真46　噴礫検出状況（南から）

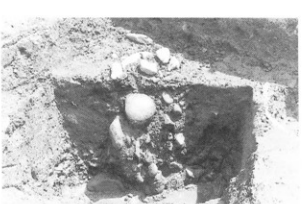
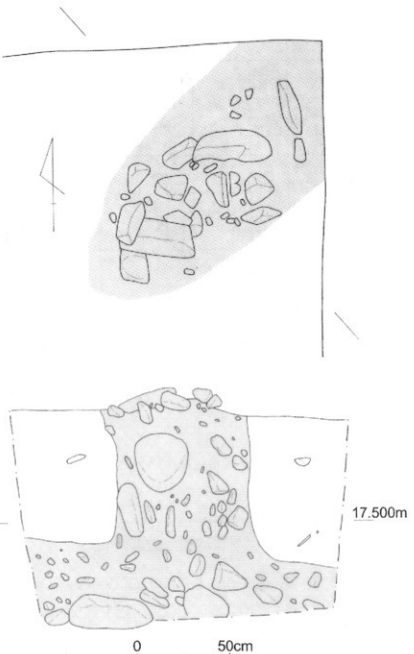


写真47　噴礫断面（西から）



第61図　噴礫平・断面図

第３節　第２遺構面

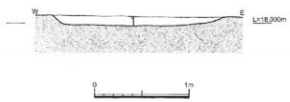
第８層のオリーブ褐色の粘質シルト層上面で確認した遺構面である。遺構面の時期は概ね古代と考えられる。

検出遺構は条里方位にのっとった溝５条をはじめ、土坑２基、ピット６基である。遺物は土坑出土の瓦泉１点のみである。

ＳＫ－201

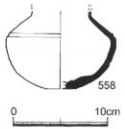
調査区の中央やや南寄りで検出した土坑である。平面形態は北側に突出部をもつ不整形な長方形を呈し、長辺約2.9m、短辺約1.8m、深さ約20cmを測る。埋土は単層で、断面形状は浅いレンズ状である。

遺物は須恵器の瓦泉が１点出土した。第63図の558である。



１．2.5Y　６／１　黄灰　シルト～細砂

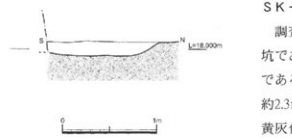
第62図　ＳＫ－201　断面図



第63図　ＳＫ－201　出土遺物実測図

ＳＫ－202

調査区の南東端でＳＤ－204を切った状態で検出した土坑である。南半が調査区外に延びているため詳細は不明であるが、平面形態は円形を呈すると思われる。東西径約2.3m、南北検出長約1.2m、深さ約15cmを測る。埋土は黄灰色粘質シルトの単層で、断面形状は浅い逆台形を呈する。遺物は１点も出土しておらず、時期は不明である。

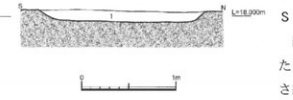


１．2.5Y　６／１　黄灰　粘質シルト

第64図　ＳＫ－202　断面図

ＳＤ－201

調査区の北東端で検出した条里方向の溝である。検出長約４m、幅約50cm、深さ約５cmを測る。埋土は灰黄色シルト質極細砂の単層で、断面形状は浅いレンズ状である。遺物は出土しておらず時期は不明である。



１．10YR　６／１　褐灰　シルト～細砂

第65図　ＳＤ－201　断面図

ＳＤ－202

調査区の北東端、ＳＤ－201の南側に隣接して検出した条里方向の溝である。検出長約2.8m、幅約40cm、深さ約３cmを測る。埋土、断面形状はＳＤ－201と同じである。遺物は出土していない。

ＳＤ－203

調査区の南東端で検出した条里方向の小溝である。検出長約1.8m、幅約25cm、深さ約５cmを測る。埋土は単層で、断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

ＳＤ－204

調査区中央から南東端に向かって流れる溝である。ＳＫ－201、ＳＫ－202に切られた状態で検出した。検出長約11m、最大幅約1.9m、深さ約20cmを測る。埋土は灰黄色シルト質極細砂の単層で、断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

ＳＤ－205

調査区の南西端で検出した条里方向の溝である。検出長約２m、幅約30cm、深さ約10cmを測る。埋土は単層で、断面形状はU字を呈する。遺物は出土していない。

第４節 第１遺構面

第７層の灰色粘質シルト層上面で確認した遺構面である。遺構面の時期は概ね江戸時代後半頃と考えられる。

検出遺構は溝２条、土坑１基のみで、遺物もビニール袋１袋分しか出土していない。

写真48　第１遺構面遺構検出状況（西から）

ＳＫ－101

調査区の南西部分で検出した土坑である。平面形態は南北に長い長方形を呈し、長辺約１m、短辺約80cm、深さ約30cmを測る。埋土は暗灰黄色の粘土の単層で、断面形状は逆台形を呈する。

遺物は瓦を中心にビニール袋１袋分出土した。図示できるものはなかったが、瀬戸美濃系の京焼写しが出土している。遺構の時期は18世紀後半～19世紀と考えられる。

ＳＤ－101

調査区の南半で東西方向に流れる溝である。方位は条里方位に合致する。ＳＫ－101に切られた状態で検出した。検出長約14.5m、幅約50cm、深さ約30cmを測る。断面形状は逆台形を呈する。遺物は瓦片数点しか出土していないが、ＳＫ－101より先行することが切り合いよりわかる。

ＳＤ－102

調査区の南東部でＳＤ－101に直交するように検出した溝である。検出長約8.4m、幅約50cm、深さ30cmを測る。遺物は出土していない。

第5章　まとめ

第１節　遺構の変遷について

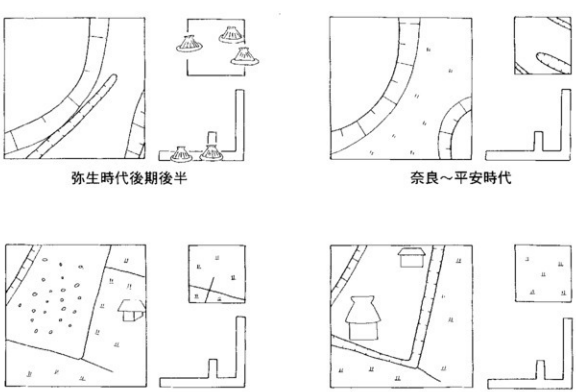
一角遺跡では弥生時代から昭和19年に至るまでの遺構・遺物を検出した。大別すると弥生後期後半、古代、幕末～明治初期、明治～昭和初期の４時期に分けることができる。

弥生時代後期後半では、南接する空港跡地遺跡から続き、今回の一次調査地点の大半を北流する自然河道が見られる。この東岸で試掘調査時に２棟、第２次調査時に３棟の竪穴住居を検出しており、集落域が広がっていたことがうかがえる。同様な調査結果は空港跡地遺跡でも得られている。また、断言はさけたいが、検出状況から集落の廃絶期に地震による噴砂が起こった可能性を指摘できる。

古代は削平を受けており、良好な調査結果を得られなかったが、条里方向の溝が数条認められた。今回の調査では検出できなかったが、空港跡地遺跡では自然河道の上層で水田層を確認していることから、一角遺跡においても水田が行われていた可能性が高いと考えられる。自然河道はその後も廃川として名残りをとどめていたと考えられ、近世まで度重なる洪水があったと考えられる。

幕末～明治初期には当調査区に吉国寺が所在していたとされており、それに伴う可能性がある溝を検出した。しかしながら、礎石や築地塀といった遺構は検出されていない。周囲にも条里地割に合致する溝が見られることから、水田が広がっていたと考えられる。

明治～昭和19年ではＬ字の溝で囲まれる一画を検出しており、吉国寺の名残り、あるいは岩山神社宮司宅のまわりを囲む溝と考えられる。以後、昭和19年の陸軍による空港建設によって大規模な土地改変が行われた。



第66図　遺構変遷略図

第２節 吉国寺について

岩田神社と吉国寺は創建は定かではないが、順道図絵の中には記載が見られ、嘉永４年の讃岐国名勝図絵にも桜木神社などとともに東から俯瞰した風景が描かれている。順道図絵に従うと、山田郡の条里区画の８条10里４・９坪と３・10坪界線に沿った３・10坪側に神社参道が位置し、神社地はさらに北側の15坪から16坪にまたがって所在していた。そして参道に東接して10坪の北西４分の１を吉国寺が占めていたように理解できる。参道は絵図上で幅員約６m、参道の西側には松並木の緑地帯が見られ、吉国寺境内地と対面する部分では幅員約12mで描かれている。さらに西側に用水路が描かれており、９・10坪界に相当すると考えられる。また、参道の東に隣接する吉国寺の東西幅は築地塀、水路を含めると約43mである。松並木、参道、吉国寺の総合値は約61mである。

さて、これらに対応する遺構は、弘福寺領讃岐国山田郡田図調査事業の平成６年度調査区と宮西 -角遺跡、そして今回の調査区で確認されている。弘福寺調査事業では、整地層と考えられる黒褐色の砂礫層が見られた。砂礫層の西端には幅約2.5m、深さ60cmの溝が沿い、溝の東肩から数メートル東に松の根株列が同方向に並んでいた。溝の方位はほぼ条里方向に一致しており、宮西 -角遺跡においても検出している。これら一連の遺構は、参道、松並木、９・10坪界溝に相当すると思われる。また、弘福寺調査事業では、黒褐色砂礫層（整地層）の上面に５cm程の段差が認められた。今回の１次調査の西端段差につながるものである。当初は参道の東端としてとらえてきたが、この段差から松並木までを含めた幅は約37mとなっており、参道６mと松並木12mの合計18mの２倍近い数値となってしまう。一方、今回の調査で確認したＳＤ－101・102のＬ字状に屈曲した溝は、順道図絵や明治の地籍図等でも見られ、吉国寺を囲む溝あるいはその後再掘削された溝の可能性が高い。埋土中からは幕末～昭和初期の遺物が多量に出土した。このことは、吉国寺が幕末の廃仏毀釈で廃寺になった後も、築地塀などは昭和の初め頃まで崩れ残っていたという聞き取りを裏付ける。あるいは、一面下層のＳＤ－201も同一方位にあることから、廃仏毀釈で廃寺になった時に溝も再掘削されたとも考えられる。ＳＤ－102を吉国寺の東限とするなら、９・10坪界溝までの距離は約64m、ＳＤ－201であれば約61mとなっており、順道絵図の61mと近似している。吉国寺の東西幅が順道図絵では約43mで、ＳＤ－102と段差状遺構の距離が27mであることから、段差状遺構は吉国寺境内地に含まれていたことがわかる。そこで、讃岐国名勝図絵に描かれた図を見ると、吉国寺は東に山門を開き、西端中央よりやや南に本堂を置いている。本堂の北側には渡廊下を介して東西棟の建物（講堂）、さらに北側に庫裡が北築地塀に沿って建てられている。この講堂の東面から西築地までの距離を復元すると、名勝図絵の建物の柱間等から推定して10間ないし11間の奥行きが考えられ、坪界溝との距離で言えば約37mで、調査結果と同じである。このことから段差状遺構は吉国寺講堂の基壇の痕跡と考えられる。また、名勝図絵においては、吉国寺の南東端に鐘楼が描かれており、北側約10mのところで一段下がった状態で山門が描かれている。調査結果においても、ＳＤ－101・102のコーナーから約14m北側の地点でＳＸ－201が見られた。南北約14m、東西約10m範囲で落ち込みが見られ、山門に対応すると考えられる。

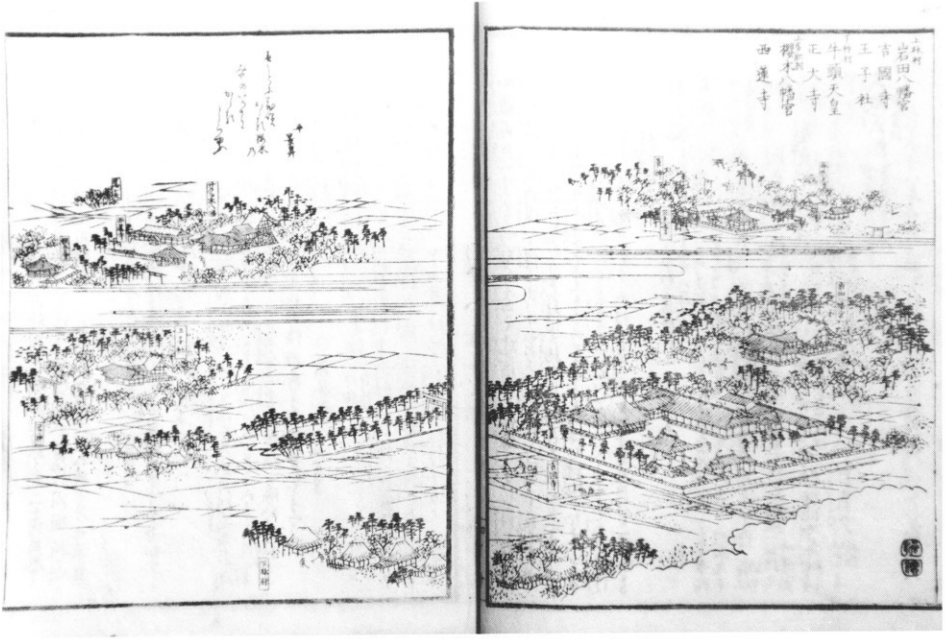


写真49　吉国寺絵図（『讃岐國名勝図絵』を撮影）